

CBID 研修プログラム開発事業
2016 年
報告書

地域に根ざした共生社会づくり



公益財団法人 日本障害者リハビリテーション協会

協力団体：日本財団

目次

| | |
|--------------------------------|----|
| 1. はじめに | 3 |
| 2. プロジェクトの概要とスケジュール | 4 |
| 3. 総括 | |
| 3-1 地域に根ざした共生社会づくり (CBID) について | 5 |
| 3-2 SDGs の視点 | 7 |
| 3-3 地方創生の視点 | 10 |
| 3-4 包括的な視点 | 12 |
| 3-5 地域の「できることもちより力=相互支援力」の開発 | 15 |
| 4. 地域に根ざした共生社会づくり (CBID プログラム) | |
| 4-1 解説 | 18 |
| 4-2 事業計画 | 19 |
| 4-3 できることもちよりワークショップマニュアル | |
| 4-3-1 キーパーソン発掘 | 30 |
| 4-3-2 事例作成 | 32 |
| 4-3-3 準備マニュアル | 37 |
| 4-3-4 当日プログラム | 41 |

| | | |
|-------|-------------------|-----|
| 4-4 | 診断・評価ツール | |
| 4-4-1 | プロジェクト概要図 | 50 |
| 4-4-2 | CBR マトリックス | 51 |
| 5 | 共生社会づくりに基づく実践報告 | |
| 5-1 | 解説 | 52 |
| 5-2 | 事前準備 | |
| 5-2-1 | 松本大学 | 53 |
| 5-2-2 | 一般社団法人しん | 54 |
| 5-2-3 | NPO 法人工房あおの丘 | 65 |
| 5-3 | ワークショップ実施 | |
| 5-3-1 | 松本大学 | 80 |
| 5-3-2 | 一般社団法人しん | 91 |
| 5-3-3 | NPO 法人工房あおの丘 | 101 |
| 5-4 | チラシ | |
| 5-4-1 | 共通 | 112 |
| 5-4-2 | 松本大学 | 113 |
| 5-4-3 | 一般社団法人しん | 114 |
| 5-4-4 | NPO 法人工房あおの丘 | 115 |
| 6 | 12月4日振り返りの会での「総括」 | 116 |
| 7 | 企画委員リスト | 123 |

1. はじめに

この冊子は、2016年度に日本財団のご協力を得て、公益財団法人 日本障害者リハビリテーション協会が実施した、「CBID*研修プログラム開発事業」の報告書です。

当協会は、2015年に、CBRアジア太平洋ネットワーク、障害分野NGO連絡会（JANNET）とともに第三回アジア太平洋 CBR**会議を共催しました。一方、世界保健機関（WHO）、国際労働機関（ILO）、ユネスコ、国際障害開発コンソーシアム（IDDC）は、CBRの実務的提案を発表した CBR ガイドラインで、CBRの目的はCBIDであると明記しました。それを受けて当協会は、国内でCBIDに近い実践を行っている事例を集めて国内CBID事例集を日本財団のご支援により作成しました。

その延長線上で、CBIDの考え方がさらに国内の他の地域にも広がることを願って、2016年度「CBID研修プログラム開発事業」を日本国内3つの地域（地方都市：松本市の新村（にいむら）地区、中核都市：名古屋市（一般社団法人しん）、中山間地域：富山県入善町（NPO法人工房あおの丘）にてワークショップを実施しました。

*CBID=Community-based Inclusive Development

**CBR=Community based Rehabilitation

本事業は地域診断から始まり、説明会、プレ研修を経て、3つの地域で各実践主体による本番のワークショップが行われ、一連の活動の総括として振り返りの会を開催しました。研修の中心となるのは、名古屋の一般社団法人草の根ささえあいプロジェクトとNPO法人起業支援ネットが7年間にわたり開発実施し、個人ができることを出し合うという「できることもちよりワークショップ」です。

本報告書では、3実践主体の報告や研修後の波及効果を盛り込み、さらに国内外の動きの視点に基づいてこの事業の意義と思われることを記しました。本事業の結果、実践者自身や地域にどのような変化をもたらしたのかについてまとめましたので、ご覧いただければ幸いです。

本事業に多大なご支援をいただいた、日本財団、3実践主体の皆様、企画にご協力いただいた大塚晃様（上智大学教授）、林早苗様（東京女子大非常勤講師）、企画並びに本事業のスーパバイザーとしてご協力いただいた鈴木直也様（NPO法人起業支援ネット副代表理事）、研修講師の渡辺ゆりか様（一般社団法人草の根ささえあいプロジェクト代表理事）には心から感謝申し上げます。

この報告書が、地方創生、地域包括ケア、地域福祉に携わる方々や障害のある人を含む支援を必要とする人たちが地域に結びつくためのヒントを得たいという方、さらに国際協力に関わる方にもお役に立てば幸甚でございます。

公益財団法人 日本障害者リハビリテーション協会
会長 炭谷 茂

2017年3月末

2. プロジェクトの概要とスケジュール

公益財団法人日本障害者リハビリテーション協会

2-1 プロジェクトの概要と目的

日本障害者リハビリテーション協会は、第三回アジア太平洋 CBR 会議の共催(2015年)の際、日本における地域に根ざした共生社会の実現に向けた先進的な実践を紹介するために CBID¹事例集を作成し、会議参加者の前でこれらの取り組みを報告した。2016年には、CBID実践のエッセンスが日本国内に広がり活用されること、そして独自のプロジェクトが展開されることを目的として日本財団のご協力のもと「CBID 研修プログラム開発事業」を実施した。地域の人々の気づきや変化に着目し、「地域が変わる、地域を変える」地方創生の新しい取り組みとして、また、国連の持続可能な開発目標(SDGs)達成に向けて、開発途上国でも活用できるツールとなることも視野に入れている。

| | |
|------|-----------------------------------|
| 対象地域 | ① 地方都市：松本市新村(にいむら)地区 |
| | ② 中核都市：名古屋市「一般社団法人 しん」 |
| | ③ 中山間地域：富山県下新川郡入善町「NPO 法人 工房あおの丘」 |

2-2 スケジュール

| | | |
|-----------------------|-------------------------------------|---|
| ① 企画会議(東京) | 5月18日 7月17日 12月4日 | プロジェクトに関する企画や助言をいただくため企画委員会を設置して企画会議を3回開催した。企画委員については123ページを参照。 |
| ② 事前準備 (3地域) | | 3地域からの提出資料は地域診断、プロジェクト計画づくり、地域社会資源発掘に関する事前分析 |
| ③ 説明会(東京) | 7月17日 | プロジェクトの日程と概要を説明し、事前分析発表 |
| ④ プレ研修(松本) | 9月4日 | 松本大学の会場提供により、3地域が集まり、本事業研修講師による模擬研修(プレ研修)が行われた。参加者は準備から本番のシミュレーション研修を体験し、研修実施者として課題を検討し、本番に備えた。 |
| ⑤ 本番 ワークショップ 開催 | 10月19日：松本 10月30日：名古屋 11月3日：入善 | 3地域による「できることもちよりワークショップ」開催。キーパーソンや参加者への声かけ、事例の作成、会場設営など、各地域でそれぞれ入念な準備を経て左記の日程で開催。 |
| ⑥ 振り返りの会 (東京) | 12月4日 | 3実施団体関係者、企画委員、一般(13名)の参加のもと、ワークショップの結果が報告され、事業の振り返りと今後の課題を共有した。 |

¹ CBIDとは、地域社会での障害のある人やその他の支援を必要とする人が開発から排除されないこと

3. 総 括

3-1 地域に根ざした共生社会づくり (CBID) について

公益財団法人日本障害者リハビリテーション協会 上野 悦子

1980年代から世界保健機関 (WHO) は、主に途上国で障害のある人と家族の生活の質の向上のために地域に根ざしたリハビリテーション (CBR) に取り組んできた。CBR は保健分野からはじまったが国や地域によりさまざまな形で実施され、規模も拡大された。そして共通の理解とアプローチの提供のため、合同政策方針 (1994年、WHO、ILO、UNESCO) が策定され、定義や目的が明らかにされた。2004年には合同政策方針の改定版が出され、定義はほぼ変わらないが、障害者権利条約制定への議論の影響を受け、人権や貧困への対応、地域社会の参加に重きがおかれるようになった。

CBR の定義と目的

CBR の定義は、2004年改訂合同政策方針の中で、このように述べられている。「CBR は、障害のある全ての人々のリハビリテーション、機会均等、ソーシャル・インクルージョン (社会的統合) のための総合的な地域社会開発の一戦略である。CBR は、障害者自身とその家族、組織や地域社会、そして関連する政府・非政府の保健、教育、職業、教育、社会的その他のサービスの一体となった取り組みにより実行される。」

そして CBR の目的は次の2つであることが示された。

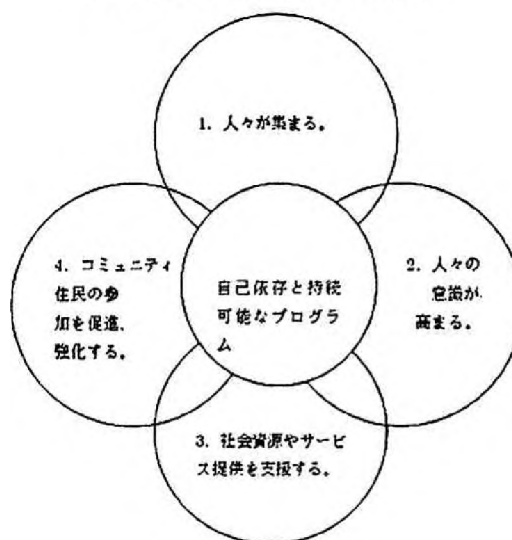
1. 障害者が能力を最大限発揮でき、通常のサービスと機会を利用でき、地域社会において積極的な貢献者となるよう促進すること。
2. 参加の障壁を取り除くなど地域社会での変化を通して障害者の人権を促進し保護するよう地域社会を活性化すること。

2010年には、WHO、ILO、ユネスコ等は専門家や障害者団体とともに協議の結果、障害者権利条約の実践戦略として CBR ガイドラインを発表し、CBR の目的は CBID (次頁参照) であることが明記された。CBR ガイドラインの作成過程で CBR マトリックスが開発され、包括的に状況を把握するツールとして示された。

障害者権利条約は政策を提供するのに対し、CBR・CBID は権利条約を地域で実践するための戦略としてボトムアップで行われる。同ガイドラインでは地域社会の参加の必要性を強く訴えている。(右図参照)

また、持続的な CBR プログラムに必要な要素として、効果的なリーダーシップ、連携、地域社会の主体性、地域の資源利用、文化的要因への配慮、能力開発、財政支援、政治的支援などを挙げている。

「コミュニティを動かすこと」の
4段階 (CBR ガイドライン)



CBIDはCommunity-based Inclusive Development（地域に根ざしたインクルーシブ開発）の略で、Community-basedは地域社会を基本とすることを示し、インクルーシブ開発とは、誰もが排除されず開発に組み込まれることである。地域社会には障害者と家族だけではなく、高齢者、社会的に孤立した人、貧困、性的マイノリティの人々など様々な困りごとを抱えた人が暮らしている。CBIDでは誰もが生き生きと暮らせるように地域社会が変わり、変えることを示している。言い換えると、地域社会において共生社会を実現することである。

CBIDを実現する方法としてCBRガイドライン¹では、ツイントラックアプローチが重要であると述べている。ツイントラックアプローチとは、ひとつは障害に特化した支援で、もうひとつは障害者を含む困難を抱える人々のインクルージョン実現を示す地域社会が活性化されることである。例えば、CBRガイドラインの「教育」では、障害のある子どもが十分な教育を受けられるような方法と並んで、地域全体がインクルーシブな小学校教育を開発するために参加を促すことが重要であると書かれている。ツイントラックアプローチについては、CBRの合同政策方針の改訂版（2004）でCBRの目的としてすでに示されていた。（前頁参照）

2015年に第三回アジア太平洋CBR会議が東京で開催され、それに合わせてCBID事例集²が作成され、アジア太平洋地域の事例だけではなく日本の活動でもCBIDのエッセンスが取り入れられた実践が紹介された。それらに共通していたのはツイントラックアプローチが見られたことで、当事者の変化だけではなく、地域社会の変化もある程度示された。変化をみるため地域課題からインクルージョン実現のためのプロジェクト概念図を開発した。それは実践から抽出されたものである。またCBRマトリックスの使用によっても変化の動きを明らかにした。インクルージョンの実現では他分野の人たちとの連携やパートナーシップが欠かせない。障害以外の分野の人たちとつながることはコミュニティの人たちの参画する機会が広がることになり、そのことが事業の持続性の確保につながるのである。CBRガイドラインではまたインフォーマルな支援も重要視される。

国内でのCBIDへの取り組みへの期待

日本では地域での課題が複合化し、既存の福祉制度では対応が難しくなってきたと言われており、多くの地域社会でさまざまな試行錯誤が行われている。よい活動が続けられている地域がある一方、地方の衰退を大きな課題として抱える地域も多く政府は地方創生に取り組んでいる。日本の地域社会で継続されている良い実践をCBIDの視点で見直すことで価値の再発見につながるかもしれない。また地域課題の解決のため新たな取り組みを見出したい地域ではCBIDの理念や手法を取り入れることを検討していただければどうか。

¹ 2010年WHO,ILO,UNESCO,IDDCにより発表。日本語訳：

http://www.dinf.ne.jp/doc/japanese/intl/un/CBR_guide/index.html

² 国内CBID事例集：http://www.dinf.ne.jp/doc/japanese/intl/cbr/cbr_jirei_2015/index.html

3-2 SDGs の視点

東京女子大学非常勤講師 林 早苗

「地域に根差したリハビリテーション (Community-based Rehabilitation: CBR)」は、1980 年代に世界保健機関 (World Health Organization: WHO) が開発に着手したプログラムであり、当時の目的は、開発途上国の障害者が地域社会にある既存の資源を活用してリハビリテーションサービスにアクセスできるようになることであった。その後、社会参加と包摂、生活の質を高めることを目指す障害者の幅広いニーズに応えるための多分野戦略へと進化し¹、2006 年の国際障害者権利条約制定後には、その目的は、社会が障害者を含むすべての支援を必要とする人々を含めて包摂的なものに変えること、「地域に根ざしたインクルーシブ開発 (Community-based Inclusive Development: CBID)」であると表明するに至った²。つまり、CBR あるいは CBID は、「ミレニアム開発目標 (Millennium Development Goals: MDGs)」や「持続可能な開発目標 (Sustainable Development Goals: SDGs)」に先駆けて、地域社会の重要性和潜在能力に注目し、障害者を含む支援を必要とする人々への取り組みなしでは開発課題は解決しないという認識のもと、多分野にわたる様々な課題に様々な関係者と共に取り組んできた。

MDGs から SDGs へ

「ミレニアム開発目標 (Millennium Development Goals: MDGs)」は、2000 年 9 月に採択された「国連ミレニアム宣言」とその他の国際開発目標を統合し、国際社会が取り組むべき開発指針として策定された。極度の貧困と飢餓の撲滅など、2015 年までに達成すべき 8 つの目標を掲げ、具体的な 21 のターゲットや 60 の指標を提示した。

MDGs は、開発途上国が抱える課題に国際社会が取り組むきっかけとなった。障害については、障害と貧困の密接な関連が特に国際機関において認識されるようになった。例えば世界銀行が、「障害者が世界人口の 15% を占める一方で、障害問題は世界の貧困の 20% に関与している」という調査を報告するなど³、障害者が MDGs の政策や施策に参加しない限り MDGs が達成されることはないであろうと国際社会に働きかけた。これらの課題解決に向けての協働の結果、達成期限の 2015 年までに全ての目標において一定の成果をあげた⁴。

しかし、改善は見られたものの目標達成できなかった課題も数多く残った⁵。国際社

図 1. ミレニアム開発目標



¹ 世界保健機関 (WHO) 2010 『CBR ガイドライン』 訳：公益財団法人日本障害者リハビリテーション協会

² 日本障害者リハビリテーション協会 2014 「CBR (地域に根ざしたリハビリテーション)・CBID (地域に根ざしたインクルーシブ開発)」

³ Braithwaite J. and Daniel Mont. 2008. 'Disability and Poverty: A Survey of World Bank Poverty Assessment and Implication'. Washington D.C. : World Bank

⁴ 極度の貧困状態にある人口割合の半減などが成果として挙げられる (United Nations. 2015. 'Millennium Development Goals Report 2015')。

⁵ 5 歳未満児や妊産婦の死亡率削減、女性の地位や環境問題などについては課題が残った (United Nations. 2015. 'Millennium Development Goals Report 2015')。

会は、未達成課題を含め、2015年以降の新たな国際開発の枠組みについて議論を重ねた。2015年9月25日、「国連持続可能な開発サミット」が開催され、193の加盟国によって、2030年までの新たな国際開発目標となる「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ（Transforming Our World: 2030 Agenda for Sustainable Development）」が採択された⁶。

SDGs の概要——「誰も置き去りにしない（Leaving no one left behind）」

2030アジェンダは、通称、「持続可能な開発目標：SDGs（Sustainable Development Goals）」と呼ばれる。MDGsに続き、次の15年間で17目標達成を目指す。目標には、169のターゲットを設定している。

SDGsの特徴は、「就労、就学および職業訓練のいずれも行っていない若者の割合を大幅に減らす（ターゲット8.6）」など、開発途上国だけでなく先進国も対象としている点や、一人一人に焦点を当て、「誰も置き去りにしない（Leaving no one left behind）」ことを表明している点である。また、様々な関係者の連携を求め、特に市民社会や民間セクターの関与を重視している点が挙げられよう。

障害に関しては、「障害」の表記がなかったMDGsとは異なり、5つの目標において明記している。具体的な目標課題は、教育（4）や雇用の機会の確保（8）、能力強化および社会的、経済的および政治的な包含の促進（10）、普遍的アクセスの提供（11）、データの入手可能性の向上（17）である。また間接的には、子供、高齢者、難民などと共に障害者を「支援を必要とする人々」として言及している⁷。かつ、「障害者の80%以上が貧困下にある」と明記するなど、障害者の抱える課題を開発課題として取り扱い、具体的には、障害者を含む支援を必要とする人々の能力強化を目指している。

図2：持続可能な開発目標（SDGs）



⁶ 国連2015「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ」（国連文書A/70/L.1を基に外務省作成、仮訳）

⁷ 同上。「障害」記載するターゲットは4.5、4.a、8.5、10.2、11.2、11.7、17.18であり、「支援を必要とする人々」として障害者を言及するターゲットは1.3、1.4、1.5、6.2、11.2、11.5である。

日本の取り組み（推進本部、実施指針、地方創生との関連）

日本国政府は、2016年5月20日、関係行政機関相互の連携を図り、総合的かつ効果的にSDGsに係る施策を実施するため、内閣総理大臣を本部長とする「持続可能な開発目標（SDGs）推進本部」を設置した⁸。2016年12月22日には、実施指針を策定し、「持続可能で強靱、そして誰一人取り残さない、経済、社会、環境の統合的向上が実現された未来への先駆者を目指す」という目標を掲げた⁹。8つの優先課題は、表1の通りである。

障害に関しては、優先課題1に、「障害者の自立と社会参加支援」と明記している。また、「地方創生」は、あらゆる人々が活躍する「一億総活躍社会」を実現する上で最も緊急度が高い取り組みの一つとして位置付けている¹⁰。

表1： SDGs実施指針

| | | | |
|---|---------------------------|---|--------------------------|
| 1 | あらゆる人々の活躍の推進 | 5 | 省・再生可能エネルギー、気候変動対策、循環型社会 |
| 2 | 健康・長寿の達成 | 6 | 生物多様性、森林、海洋等の環境の保全 |
| 3 | 成長市場の創出、地域活性化、科学技術イノベーション | 7 | 平和と安全・安心社会の実現 |
| 4 | 持続可能で強靱な国土と質の高いインフラの整備 | 8 | SDGs実施推進の体制と手段 |

⁸ 首相官邸 2016 「持続可能な開発目標（SDGs）推進本部の設置について」

⁹ 首相官邸 2016 「持続可能な開発目標（SDGs）実施指針」

¹⁰ 国際協力機構 2016 「SDGs達成への貢献に向けて：JICAの取り組み」（JICA SDGs ポジション・ペーパー）

3-3 地方創生の視点

上智大学教授 大塚 晃

CBID(Community-based Inclusive Development 地域に根ざしたインクルーシブ開発)は、障害のある人をはじめとする、すべての支援を必要とする人々やグループを含めてインクルーシブに社会やコミュニティに受け入れていくことを意味している。また、それは、社会やコミュニティが変革されていることをも意味している。これらの視点は、国が推進している地方創生の考え方と一致するものである。地方創生の考え方を見てみることにする。

2014年9月3日、第2次安倍改造内閣発足と同日の閣議決定によって「まち・ひと・しごと創生本部」が設置された。その基本方針には「地方が成長する活力を取り戻し、人口減少を克服する。そのために、国民が安心して働き、希望通り結婚し子育てができ、将来に夢や希望を持つことができるような、魅力あふれる地方を創生し、地方への人の流れをつくる」とされている。そして2014年12月2日に「まち・ひと・しごと創生法」が施行されたことにより、「まち・ひと・しごと創生本部」は、内閣設置の法定組織になり、地方の活性化を目指す方法論として「まち・ひと・しごと創生総合戦略」を策定した。「まち・ひと・しごと」に関して、「まち」は、国民一人一人が夢や希望を持ち、潤いのある豊かな生活を安心して営める地域社会を形成していくこと。「ひと」は、地域社会を担う個性豊かで多様な人材の確保。「しごと」は、地域における魅力ある多様な就業の機会の創出である。これらを一体的に推進していくことが地方創生である。

地方創生の基本目標は、「人口減少問題の克服」と「成長力の確保」を長期ビジョンに掲げ、2020年までの具体的な取り組みは、大きく4つに分けられる。

1. 地方において安定した雇用を創出する

地方における安定した雇用の創出、特に若者(15~34歳)の正規雇用数の向上と女性の就業率の向上を目指している。具体的な施策としては、地域産業の競争力を高めることを目的として包括的創業支援、中核企業支援、地域イノベーション支援、金融支援、といった業種を横断した取り組みの他、農林水産業の成長産業化、サービス業の付加価値向上、観光産業の活性化、地元名産品のPR、文化・アート・スポーツの振興推進などに分野別に取り組んでいくことである。地方での雇用や人材育成のサポートとしては、「地域しごとセンター」「プロフェッショナル人材センター」の整備と運営も施策として挙げられている。

2. 地方への人の流れをつくる

地方から首都圏への人口流出を減らし、首都圏から地方への転入を増やすことを目的とした地方創生のための諸事業が挙げられる。「移り住みたくなる地域」「そこで働きたくなる」地域をつくっていく活動が重要である。具体的な施策として、地方への移住推進のため、全国移住促進センターをオープンし移住情報一元提供システムを整備すること、地方居住推進国民会議を開催すること、アメリカで普及しているGCRC(継続

的ケア付きリタイアメントコミュニティ)を日本社会の特性に合わせてアレンジし普及させていくことなどが施策として挙げられている。また、地方での雇用を創出し就労を拡大するために、企業の地方拠点強化、政府関係機関の地方移転のほか、テレワークやサテライトオフィスといった、新しい働き方の促進などである。

3. 若い世代のファミリープランを実現する

若者が安心して結婚・出産・子育てができる社会をつくることである。特に子どもを持った後にも、ワークライフバランスが保てることを目指した取り組みといえる。具体的な施策としては、ファミリープランの経済的基盤づくりとも言える若年者グループの雇用対策、正社員化実現にはじまり、子育て世代包括支援センターの整備、育児休暇の取得促進、長時間労働の抑制といった、子育てやワークライフバランス実現のためのサポートが挙げられている。

4. 地域と地域を連携させる

「時代に合った地域づくり」「誰もが安心して暮らせるまちづくり」を実行するとともに、地域間の連携を図っていくという視点である。例えば、子どもからお年寄りまで様々な人々が分け隔てなく交流できる「小さな拠点」の形成のような施策が挙げられている。

CBIDの実現のために、このような地方創生の視点から見てみよう。「長期ビジョン」では、「地域の特性に応じた地域課題の解決」が挙げられている。従来、まちづくりは、行政が中心となって担ってきたが、地域の特性に応じた地域課題を解決し、住民が望むまちづくりを実現するためには、地域住民と行政が協働してまちづくりを担っていく必要がある。そのためには、それぞれの地域が異なることを理解し、地域の課題やニーズを適格に把握し、市民と行政が相互に連携し地域課題の解決を目指していくことは、市民生活をより一層充実させる魅力あるまちづくりの実現に向け期待できるものである。このような地域診断のために、CBRマトリックスを活用することは、大きな可能性を秘めていると言えるだろう。また、上記の「地域と地域を連携させる」ために、子どもからお年寄りまで様々な人々が分け隔てなく交流できる「小さな拠点」の形成のような施策が挙げられている。福祉分野においては、年齢や障害の有無にかかわらず、誰もが一緒に身近な地域でデイサービスを受けられる「富山型デイサービス」が頭に浮かぶ。

富山型デイサービスは、平成5年7月、惣万佳代子さん、西村和美さんら3人の看護師が県内初の民間デイサービス事業所「このゆびと一まれ」を創業したことにより誕生した。民家を改修した小規模な建物で、対象者を限定せず、地域の身近な場所でデイサービスを提供した「このゆびと一まれ」は、既存の縦割り福祉にはない柔軟なサービスの形として、開設当初から全国的に注目を集めた。

このように、富山型デイサービスなどの実践は、福祉の観点から地方創生を実現していくことにも大きな可能性があることを示していると考えられないだろうか。

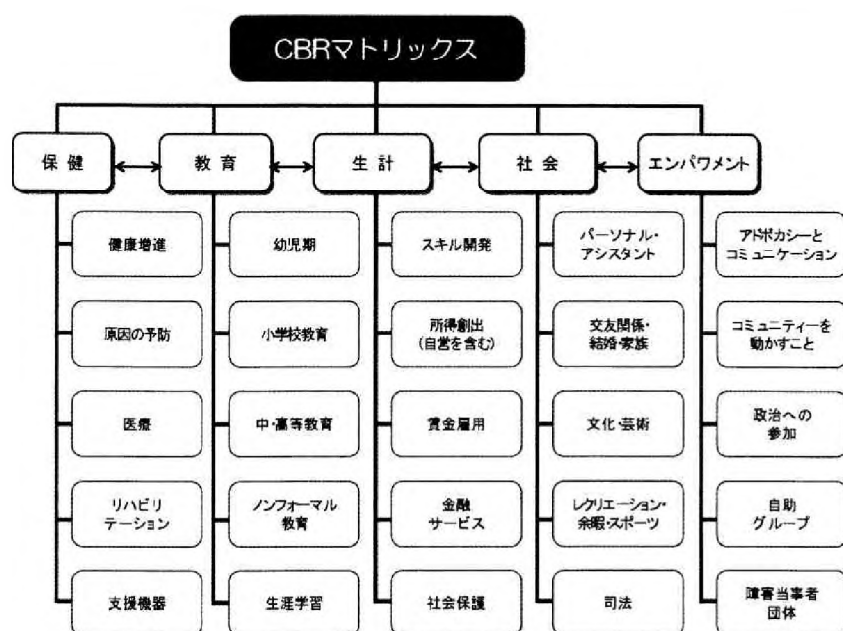
3-4 『包括的な視点を常に活動の中に取り込みながら実践する』

一般社団法人草の根ささえあいプロジェクト 代表 渡辺 ゆりか
 特定非営利活動法人起業支援ネット 副代表理事 鈴木 直也

～CBR マトリックスを使った診断とビジョンづくりの有効性～

CBID 研修プログラムでは CBR マトリックスの考え方をベースに、様々な形で包括的な視点が保たれるような工夫がされている。CBR マトリックスは障害のある人や困難を抱える人の置かれた状況を包括的に見るためのツールであり、個人レベル、事業所や団体レベル、地域の社会包摂度診断にも使えるものである。CBID を実践するための事業計画を作成する時も、ワークシートとして CBR マトリックスを活用している。

左の図が CBR マトリックスである。大きく保健、教育、生計、社会、エンパワメントの 5 つの項目に分かれていて、更に一つひとつの項目に対して 5 つの要素がある。



この 25 の要素で現状や活動、結果などを診断することができる。

事業計画ではコミュニティの現状を CBR マトリックスを用いて分析する。診断のテーマは 2 つ。

1 つ目は、25 の要素が誰に対しても機会が開かれているかどうか。そして 2 つ目は要素の質が担保されているかどうかである。こうして包括的に地域を診断することで、地域の強みや弱みが発見できる。

また、CBR マトリックスは、コミュニティの視点だけではなく「個人の視点」でも診断ツールとして活用が可能である。当事者にとって 25 の要素が充足しているのか、不足しているのかを診断することで、個人の生活上の課題を様々な角度から把握することができる。同じ地域に住んでいても、個人が使える資源には大きな差があり、一人ひとりかなり違った診断結果になる。そこを見逃さないことがとても重要な視点となる。いくら地域に資源があっても、当事者が使えていなければ、本人にとっては無いのと同じである。地域にあって個人に無いということは、個人がアクセスする時に何らかのバリアーが存在しているということである。そのバリアーを取り除かない限り生活の課題は解決しないであろう。

そして、この現状をどう変えていくか、つまり個人の未来のビジョンについても CBR マトリックスで表わすことができる。どの要素を強化していくのかが一目でわかるた

め、関係者とビジョンを共有する時にも有効なツールとなる。また、その状況にあわせた支援の内容や優先順位も共有しやすいため具体的な行動に落とし込みやすいというメリットがある。

CBID を実践するための事業計画では、最終的に 3 年後の地域の姿を CBR マトリックスで表す。これは、個人のビジョンをひとり一人達成していく時に地域がどう変わっていくかをイメージするものである。地域にばかり目がいつては、当事者が取り残される危険性がある。個人の延長線上に地域があり、誰かのために良くしようと変えた地域が、結果として他の誰かの為になっているという好循環を作っていくことが重要である。CBR マトリックスを活用することで、この好循環をイメージしながら実践することがポイントとなるであろう。

～CBR マトリックスを応用することで更に活用の幅が広がる～

CBR マトリックスの視点は、CBID 研修の中心プログラムである「できることもちよりワークショップ」の中でも応用されている。できることもちよりワークショップは、ひとりの困りごと（事例）に対して、参加者ができることを持ち寄り、それを付箋に書いて貼っていくという流れになっている。この時、付箋を整理していくために、CBR マトリックスを応用した要素を活用する。

CBR マトリックスは生活の質にとって必要な機能に主眼が置かれているが、ここでは悩みやニーズに対する支援という視点で、CBR マトリックスの要素を変換している。

下の表がその要素をまとめたもので、全 27 の要素に分かれている。

| 悩み・ニーズ | 悩みやニーズに対して提供できる支援 | | |
|--------|-------------------|------------------|------------|
| 仕事 | 就労の支援 | 働く機会の提供 | 起業・自営の支援 |
| 住居・居宅 | 住居の確保 | 訪問支援 | 身辺の世話・見守り |
| 日常生活 | コミュニケーションの支援 | 家庭の支援 | 権利擁護 |
| お金 | 公的給付の受給サポート | 貸付（サポート） | 多重債務の支援 |
| 病気 | 医療・看護 | 予防・リハビリ | 入退院の支援 |
| 教育 | 発達支援 | 学校 | インフォーマル教育 |
| 交流活動 | 居場所の提供 | 移動の支援 | 余暇の支援 |
| 社会参加 | 自助グループの支援 | 地域・政治・企業とのつながり支援 | 人材の育成 |
| 法律・手続き | 制度利用の相談 | 申請手続きの支援 | 被害に関するサポート |

ひとりの困りごとに対して出来ることを出していく時、思いつかない視点もあり、なかなか包括的な支援とはならない。しかし上記の 27 の要素で整理していくことで、足りない視点到気づき、徐々に包括的な支援となっていく。

ワークショップではグループ内で支援が出てこない要素に対して、参加者全体から支援を求める時間が用意されている。多様な参加者がいればいるほど、求められた支援に対して「できること」は集まってくる。一人では難しいと感じたことも、数人がグループになって知恵を絞れば出来ることは結構あるという意識に変わる。そしてグループのメンバーだけでは困難だと手詰まり感を感じても、参加者全体で持ち寄れば、どんな困難なことでも何とか出来るという雰囲気全体に充ちてくるのである。

「誰一人取り残さない社会」を目指すとき、『多様性』と『包括性』の視点は極めて重要である。このワークショップでは、参加者を集める段階から 27 の要素を意識して多様な参加者が集まる様に仕掛けている。そして、多様な参加者から包括的な意見やアイデアを引き出すために 27 の要素が重要な役割を果たすのである。“専門”をベースに考えるのではなく、“地域”をベースに考えるのが CBID であるとすれば、地域が本来持っている多様性と包括性の可能性をどれだけ引き出せるかが重要であり、その意味において CBR マトリックスの視点と活用は効果的である。

3-5 地域の「できることもちより力＝相互支援力」の開発

NPO 法人起業支援ネット 副代表理事 鈴木 直也

～地域の潜在力と高まる地域の“役立ち”ニーズ～

ワンデイ・シェフ・レストランというのがある。地域の主婦などが日替わりで一日だけのシェフになって自慢の一品をランチで提供するというものである。プロではないから、たくさんのメニューを用意することはできない。しかし1日だけ、1品だけならお客さんを笑顔にする料理が提供できるというのである。地域のひとり一人の中に“できること”がまだたくさん眠っている。どうすればその力を引き出すことができるのだろうか？ このワンデイ・シェフ・システムの考案者は、コーディネーターの存在の重要性を説いている。そして、コーディネーターの重要な仕事とは「相互支援のしくみづくり」だという。ポイントは「お金で解決しないこと」。お金以外の手段で問題を解決しようとすることで、多くの人達を巻き込み、できることを持ち寄ることができる、と語っている。

内閣府「国民生活選好度調査」(2007年)によると、近所に生活面で協力し合う人が一人もいない人の割合が65.7%である一方、困ったときに助け合いたいと思っている人の割合は68.1%(*)で、住民のニーズと現実に大きな隔たりがあることが確認できる。また社会貢献の意識は年々高まりをみせ、1986年にはほぼ同じだった「社会のために役立ちたいと思っている」と「あまり考えていない」の割合が、2015年にはそれぞれ、65.0%、32.4%(*)となっており、約2/3の人が社会のために役立ちたいと思っている。具体的には「社会福祉に関する活動」を挙げた人の割合が一番高く(35.1%)、続いて「町内会などの地域活動(32.9%)」(*)が挙げられている。つまり社会福祉に対する貢献ニーズをどう具体的な活動に結び付けていくかが重要な鍵となっている。

～“できることもちよりワークショップ”が拓く地域の可能性～

本プロジェクトは「地域のつながり」という抽象的なテーマを、どうやって具体的に提案し、実践の土壌を作っていけるかというチャレンジである。

よく「困っている人がいたら助けましょう」「見て見ぬふりをしてはいけません」と言われるが、実際は、①困っている人にあうことが稀である、②困った人を誰かが助けている姿を見たことがない、③もし困った人にあってもどう助ければ良いかわからない、というのが実情ではないだろうか。本プロジェクトの中心的なプログラムである「できることもちよりワークショップ」は①困っている人の事例に挙げ、②参加者ができる限りの支援を出しあうことで、③実際に地域で困っている人に対して何らかの行動ができるようになる、ことを目指している。

ワークショップの参加者の多くは最初に事例を読んだ時、どうやって支援すればよいか全然思い浮かばなかったという。問題を解決しなければと思うばかりに、自分の能力では対処できないことがないと感じてしまうからである。しかし他の参加者が、直接問題解決にはつながらなくても「少しでも困っている人の助けになれば」と思って出した支援に触れる中で、「それなら自分にもできることがある」と思い始め、前向きに参加できるようになってくる。どんな小さなことでも自分のできることが、誰かの

役に立つかもしれない。そう考えることで、参加者の「できること」が持ち寄られ、困りごとを解決する支援というより、困った人を包み込んでいくような支援が集まっていくのである。

困りごとを抱えている人は、その困難さ故に様々な制約が生じてしまい、徐々に地域から孤立してしまう傾向にある。孤立することで問題が重層化して、困難さが更に増してしまう。困難さが大きければ大きいほど、素人では手に負えないという意識が働き、更に孤立してしまうという悪循環に陥る。すぐに問題解決ができない時、大切なことは問題解決に寄り添ってくれる人の存在である。どんな些細なことでも少しでも役に立つことを持ち寄ることが大きな力になる。

ワークショップの参加者は福祉的な仕事に就いてフォーマルな支援をしている専門家や事業従事者に加えて、行政関係者、教育関係者、地域の企業関係者、自治会の関係者など、多様な人々が集まる様に設計されている。福祉以外の関係者からみると、福祉の専門的な支援（フォーマルな支援）を知る機会になり、福祉関係者からみると、地域にあるインフォーマルな支援の可能性を知ることになる。

フォーマルな支援とインフォーマルな支援の両方が上手く機能してこそ、困っている人の暮らしは改善していく。困っている人を中心にしながら、地域の多様な人がつながることで地域の可能性が引き出されていく仕掛けがこのワークショップには組み込まれている。また、専門家は自分の専門的な能力で問題の解決をはかるのが職業であるため、自身が持つインフォーマルな「できること」に目が向きにくい。しかしワークショップに参加することで、自らのインフォーマルな支援の可能性に気づくことができ、支援者としての能力が開発されていくことも期待できる。

～“助け合い文化”を地域に根付かせていくために～

地域のつながりは支援する側の人間だけでは実現しない。支援される側の人がいればこそ、つながりに意味が芽生え、現実的なものとなっていく。また支援する側だった人も、いつ何時支援を受ける側になるかわからないのである。いつか必ず、これまでの支援によって網羅されてきた地域のつながりに助けられる日が来るはずである。つまり支援される側の人、大きな時間軸で考えれば間接的に支援する側に立っているとも言え、時間差の相互支援が成り立っている。

「情けは人の為ならず」という言葉を誤解して、「人に情けを掛けて助けてやることは、結局はその人のためにならない」という考え方もある様であるが、それでは地域はつながれないだろう。本来の意味である「人に情けをかけるのは、その人の為になるばかりでなく、やがては巡り巡って自分に返ってくる」ということが信じられる地域かどうか問われている。地域（コミュニティ）に現実感があれば、誰かを助けることは長期的に自らの身を助けることであり、困っている人を“困った人”だとみなして孤立させるようなことは起きないだろう。

結局、地域という実につかみどころがなく曖昧なものを信じていくことができるかが問われており、“まちづくり”の要諦は“まちを信じる力づくり”にあると言えるのではないかと。いざという時には助けてくれる、そんな文化をどうやって育てていくのか？ まちづくりに対する前向きな意識をどうやって醸成していくのか？ そして

自立発展的な貢献をどうやって引き出すのか？ 一朝一夕にとはいかないけれども、時間をかけて地道に取り組んでいく意義はあるだろう。

最初は避難訓練のような形態が一番効果的であろう。災害が起きた時に、迅速に避難できた地域は避難訓練をしっかりとやっていた地域であったという話を耳にする。避難訓練は文字通り、避難経路を覚え、災害時のパニック状態を抑制し、いざという時の手順を覚える為に行われる訓練であるが、それ以外にも、関わる人同士の信頼関係を構築する効果もあると考えられる。

地域の助け合いも、避難訓練の様に事前に体験しておくことで、いざという時の効果が期待できる。ワークショップの体験を通して、地域の「できることもちより力」の開発を行っておくことが、そこに暮らす人々の不安を軽減し、生活の質を向上していくことにつながるであろう。

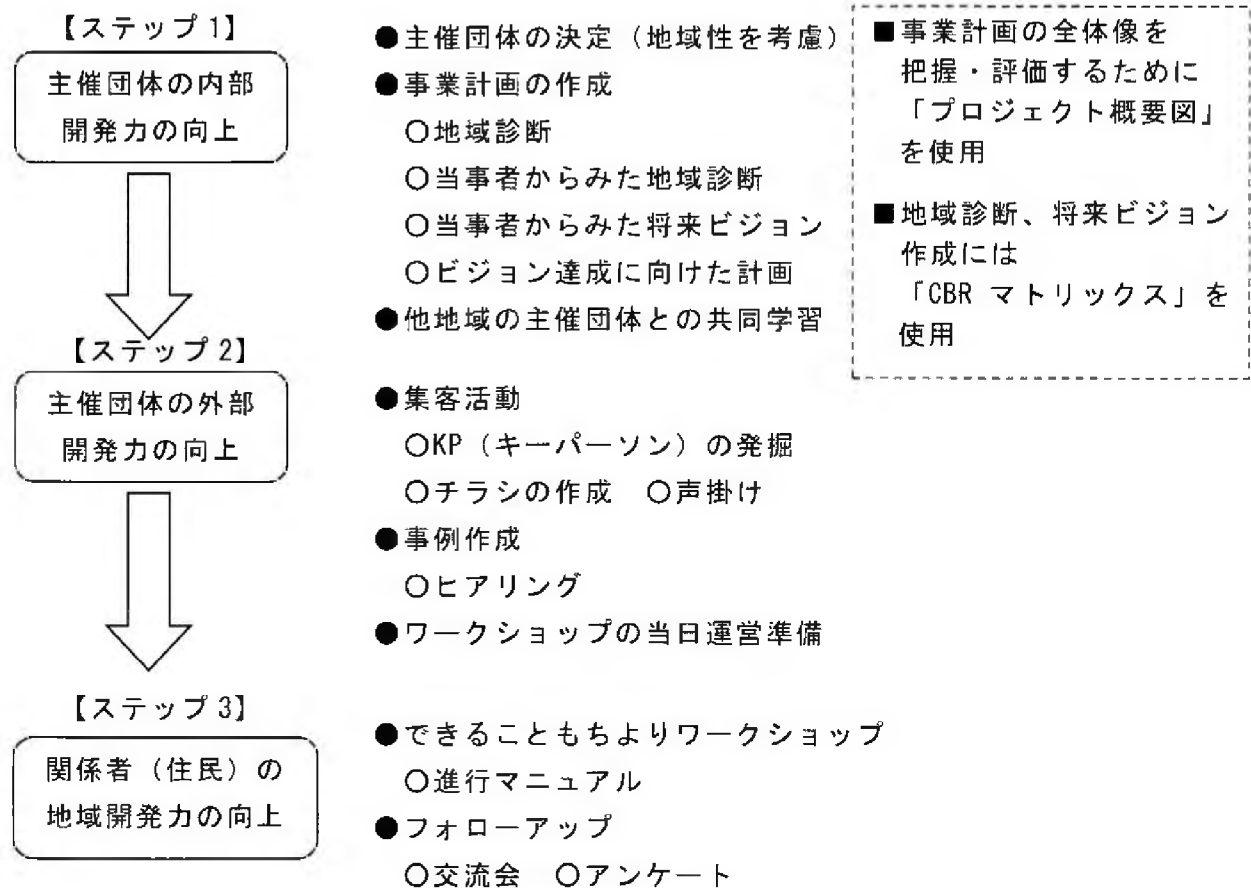
※ 内閣府「社会意識に関する世論調査」（2015年）

4. 地域に根ざした共生社会づくり (CBID プログラム)

鈴木 直也

4-1 解説

地域に根ざした共生社会作りプロジェクトは大きく 3 つのステップを踏むことで、最大限の成果を得られるように設計している。ステップ 1 が「主催団体の内部開発力の向上」、ステップ 2 が「主催団体の外部開発力の向上」、ステップ 3 が「関係者（住民）の地域開発力の向上」である。



ステップ 1 では、事業計画を組織のメンバーで作り上げることで、プロジェクトを推進していく力を強化する。また、他の地域の団体と共に学ぶことで、視野を広げ、更にはモチベーションの向上につなげる。

ステップ 2 では、ワークショップの意義を地域に伝え、多様な参加に結び付ける為に、包括的な視点で地域のキーパーソンを見つけ、賛同を得ていくプロセスを踏む。また、事例を作成するために、その事例分野に詳しい関係者にヒアリングに行き、協力関係を構築する。これらの動きを通じて、主催団体の外部開発力を磨いていく。

ステップ 3 では、関係者（住民）がワークショップへの参加を通して、これまで関わりが薄かった困りごとを抱える人に対する関心を高め、関わる覚悟と具体的なイメージを持つことを目指している。

総合的に地域全体の包括的な支え合い力が高まっていくことを目指した取り組みとなっている。

4-2 事業計画

CBIDを実践するためのワークシート

このワークシート集は、CBIDを実践するためのプランニングツールです。
プランニングは10のSTEPから構成されています。

最初は1人で記入してみましよう！

次に仲間や同僚と一緒に考えましよう！

そして、その次は関係当事者（ステークホルダー）を集めて考えましよう！

次のページから未来が始まります！

Step① 地域の概要と課題

Step② 理念・目的

Step③ コミュニティの現状

Step④ マトリックスで見るコミュニティの現状

Step⑤ マトリックスで見る個人のおかれている現状

Step⑥ コミュニティの好ましい未来のビジョン

Step⑦ 個人の好ましい未来のビジョンとステップ

Step⑧ インクルーシブの方法

Step⑨ 事業/プロジェクト運営（財源とネットワーク）

Step⑩ 事業/プロジェクトの全体像

Step① 地域の概要と課題

A. 地域データ

| 人口 | 産業 | 特色 |
|----|----|----|
| | | |

B. 地域の課題

1. キーワードを参考にしながら、地域の課題を書きだしましょう。
2. 独自にキーワードをあげて、課題を書きだしましょう。
3. 重大な課題のキーワードを○で囲みましょう。

| キーワード | 課題 | キーワード | 課題 |
|-------|----|-------|----|
| 経済 | | 高齢者 | |
| 教育 | | 障害者 | |
| 環境 | | 患者 | |
| 食 | | 若者 | |
| 子育て | | 子ども | |
| 福祉 | | 子育てママ | |
| 文化 | | 会社員 | |
| 交流 | | 自営業者 | |
| 企業 | | 外国人 | |
| NPO | | | |
| 行政 | | | |
| 自治組織 | | | |
| 家族 | | | |

Step② 理念・目的

1. どんな地域を実現するためにC B I Dを実践しますか？

「〇〇な地域の実現を目指します」という文章を10個書き出しましょう。

2. 書き出した10個の文章を何度も繰り返し読み返し、より大切にしたいと感じた文を5つ選び、選択の欄に○をつけましょう。

| No. | 実現したい地域 | 選択 |
|-----|---------|----|
| 1 | | |
| 2 | | |
| 3 | | |
| 4 | | |
| 5 | | |
| 6 | | |
| 7 | | |
| 8 | | |
| 9 | | |
| 10 | | |

3. ○をつけた5つの文を3つの文に集約しましょう。

4. 最終的に一番大切にしたいと感じた文を1つ選び、選択の欄に○をつけましょう。

| No. | 実現したい地域 | 選択 |
|-----|---------|----|
| I | | |
| II | | |
| III | | |

5. 選択した文をベースに、3つの文を1つに集約しましょう。

| 理念 |
|----|
| |

Step③ コミュニティの現状

A. 理念からみて「好ましくない」コミュニティの現状

1. 理念からみて「好ましくない」と感じるコミュニティの現状を書き出しましょう。
2. 書き出した現状は理念からみた時にどれくらい深刻でしょうか？
●：かなり深刻 ○：深刻 △：やや深刻

| No. | 理念からみて『好ましくない』コミュニティの現状 | 深刻度 |
|-----|-------------------------|-----|
| 1 | | |
| 2 | | |
| 3 | | |
| 4 | | |
| 5 | | |
| 6 | | |
| 7 | | |
| 8 | | |

B. 理念からみて「好ましい」コミュニティの現状

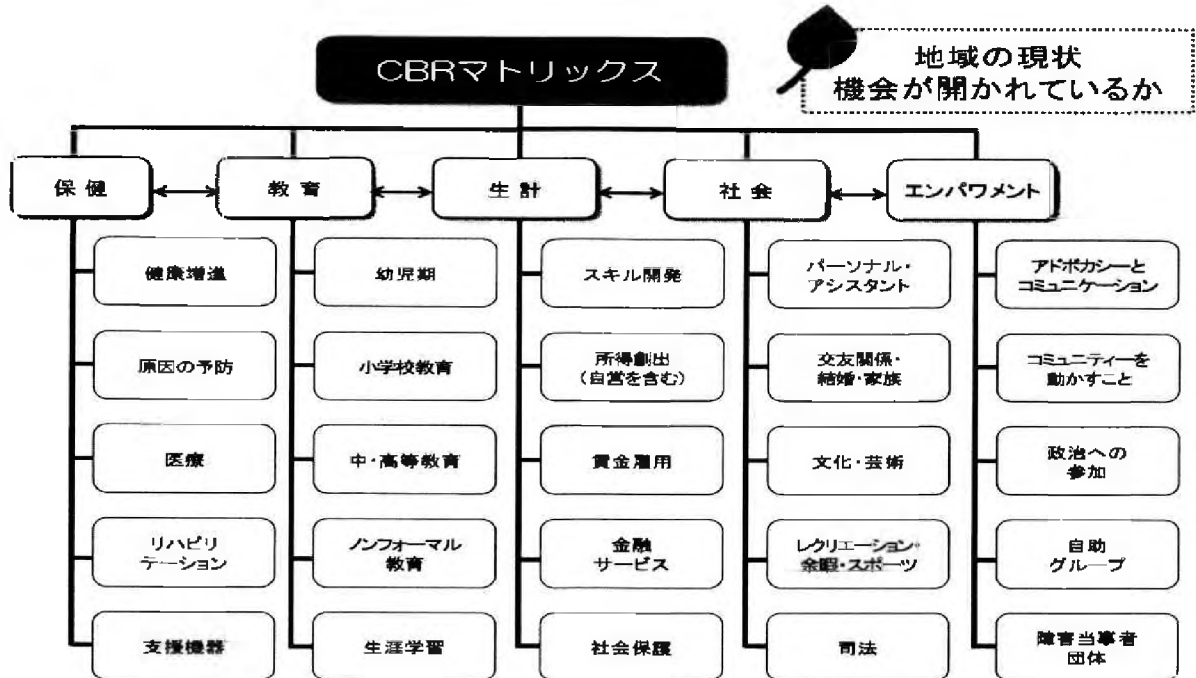
1. 理念からみて「好ましい」と感じるコミュニティの現状を書き出しましょう。
2. 書き出した現状は理念からみた時にどれくらい期待できるでしょうか？
●：かなり期待 ○：期待 △：やや期待

| No. | 理念からみて『好ましい』コミュニティの現状 | 期待度 |
|-----|-----------------------|-----|
| 1 | | |
| 2 | | |
| 3 | | |
| 4 | | |
| 5 | | |
| 6 | | |
| 7 | | |
| 8 | | |

Step④ マトリックスで見るコミュニティの現状

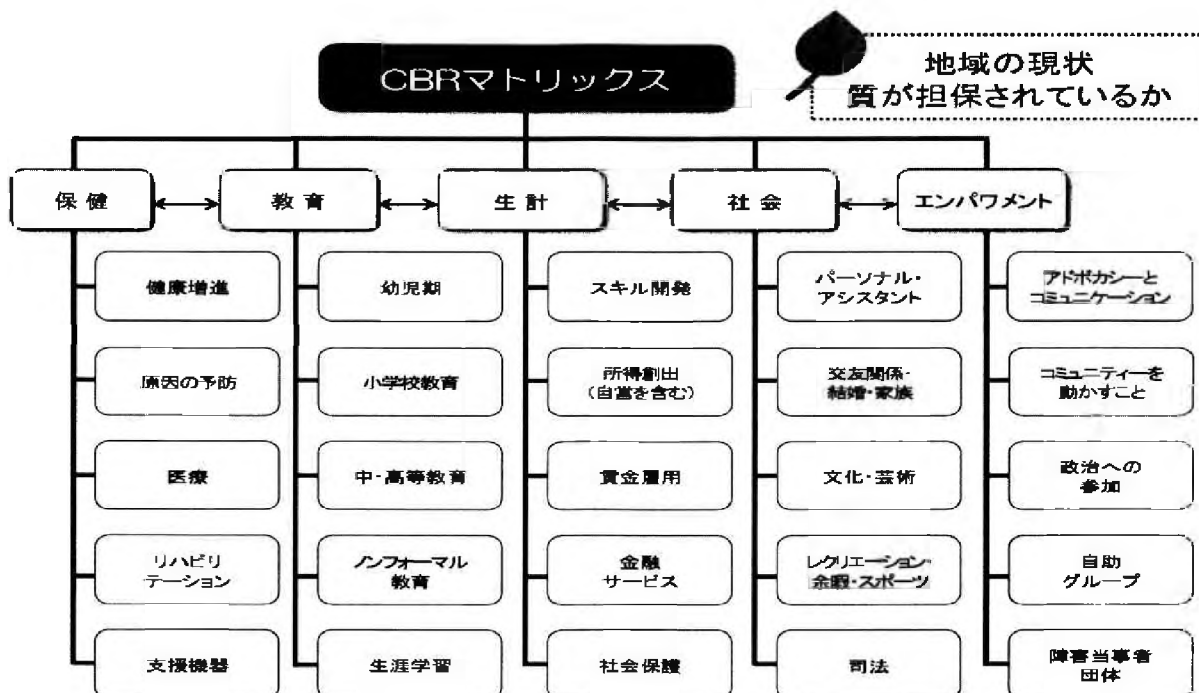
1. マトリックスの要素は誰に対しても機会が開かれていますか？

○：開かれている △：どちらとも言えない ×：開かれていない



2. マトリックスの要素の質を評価してみましょう。

○：高い △：どちらとも言えない ×：低い

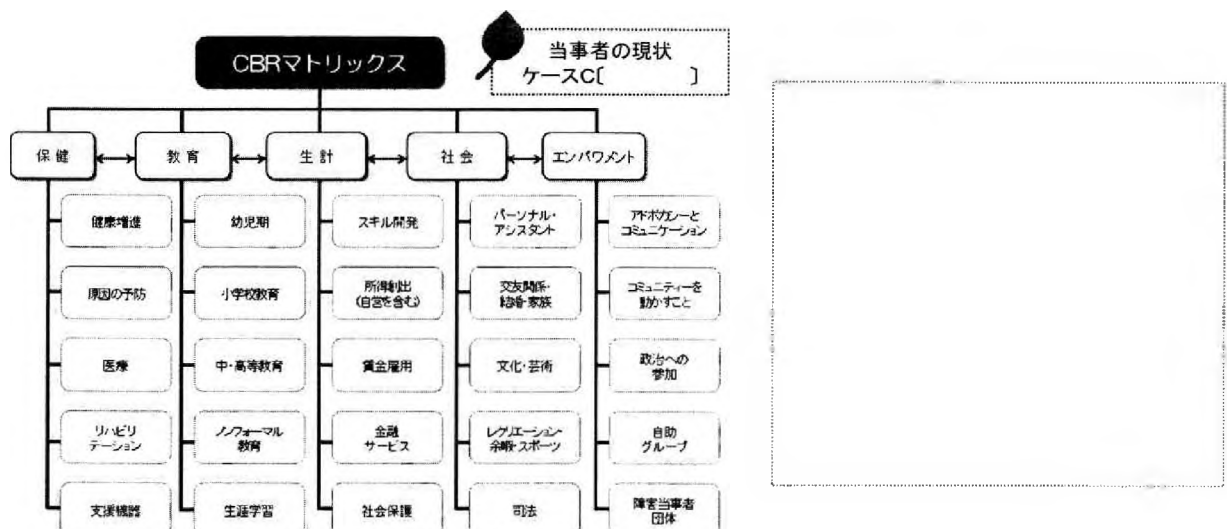
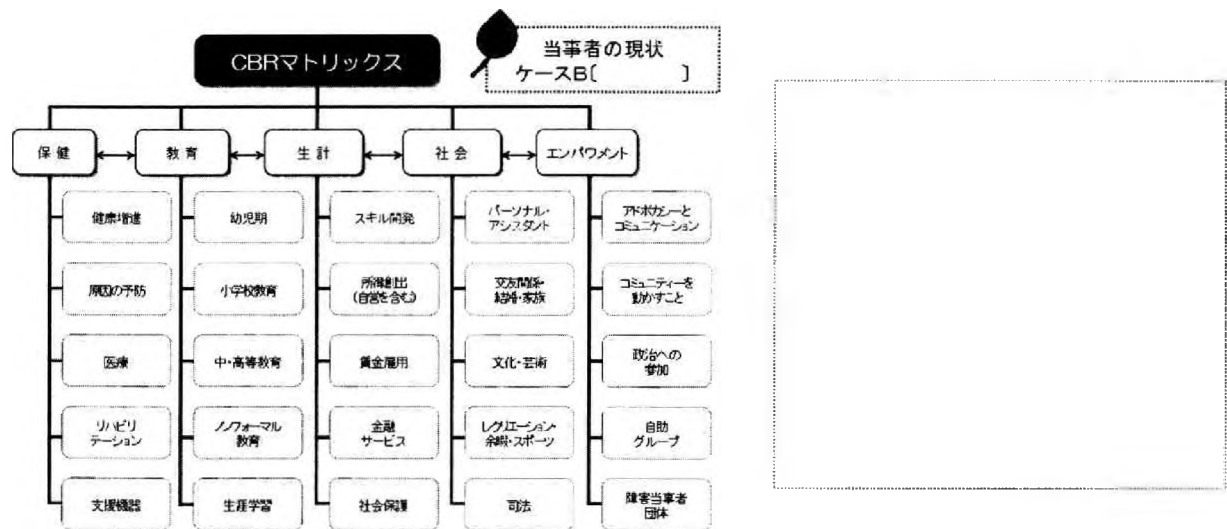
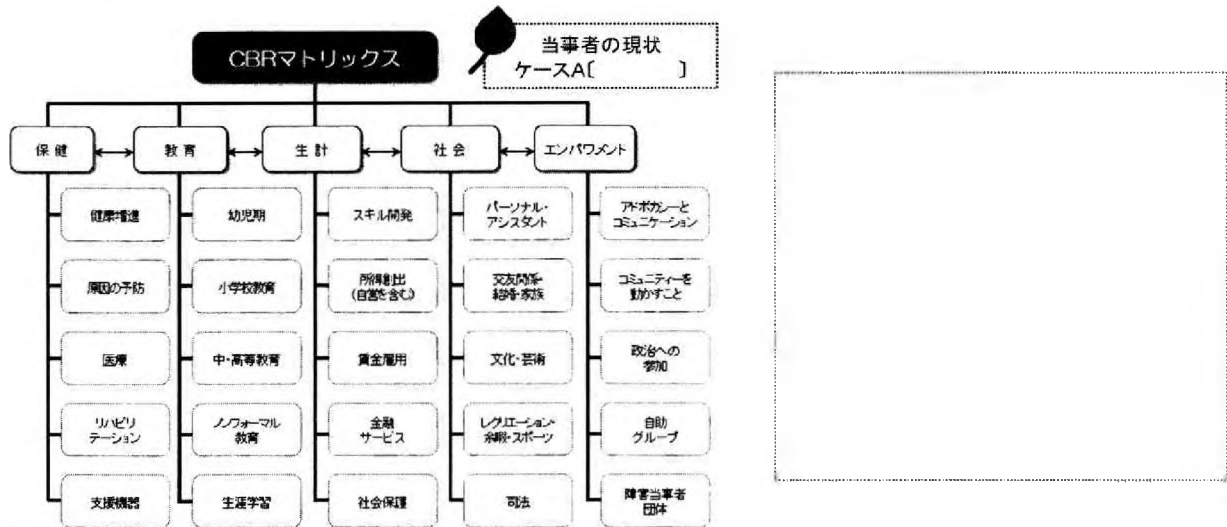


Step⑤ マトリックスで見る個人のおかれている現状

1. 当事者にとって要素が充足しているかどうかを個別に評価しましょう(3ケース)。

○ : 充足 △ : どちらとも言えない × : 不足

2. マトリックスの右に当事者と評価について説明してください。



Step⑥ コミュニティの好ましい未来のビジョン

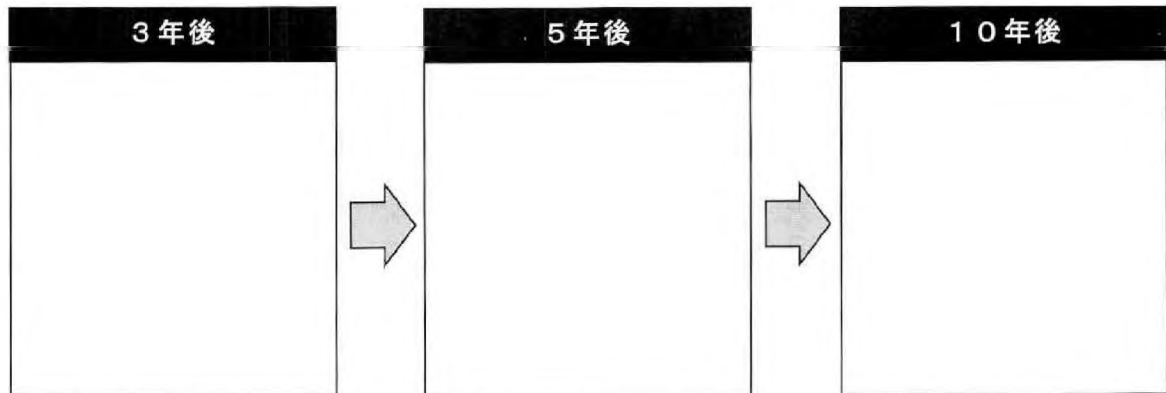
1. 好ましいコミュニティの未来のビジョンを書きましょう（3年後、5年後、10年後）。
2. 書き出したビジョンを重要度で順位付け（1～4）しましょう。

| No. | 3年後のビジョン | 重要度 |
|-----|----------|-----|
| 1 | | |
| 2 | | |
| 3 | | |
| 4 | | |

| No. | 5年後のビジョン | 重要度 |
|-----|----------|-----|
| 1 | | |
| 2 | | |
| 3 | | |
| 4 | | |

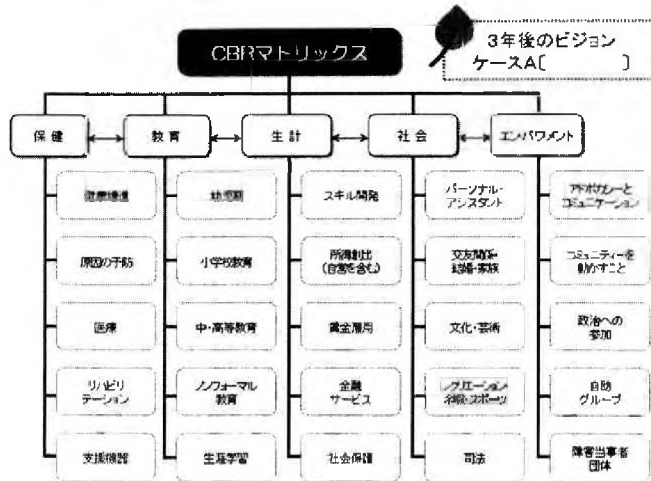
| No. | 10年後のビジョン | 重要度 |
|-----|-----------|-----|
| 1 | | |
| 2 | | |
| 3 | | |
| 4 | | |

3. 書き出したビジョンをまとめましょう。



Step⑦ 個人の好ましい未来のビジョンとステップ

1. 当事者の3年後にどの要素が充足しているかを描きましょう。
現状を記したマトリックスに上書きする形で、赤色で○を付けます。
2. どの順番で充足を図っていくかをマトリックスの右に書きましょう。



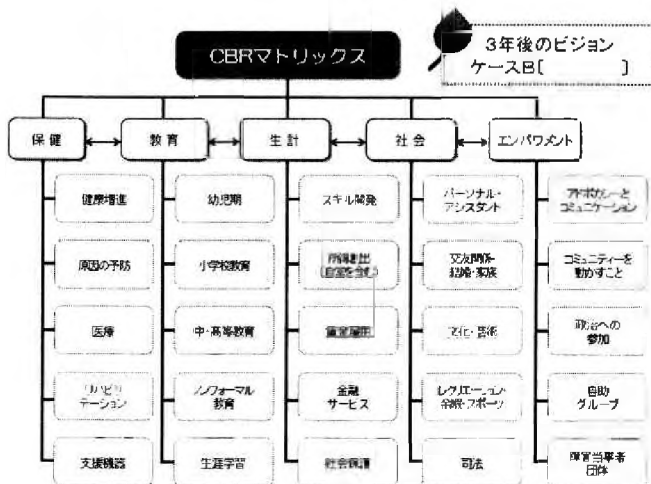
1. _____

2. _____

3. _____

4. _____

5. _____



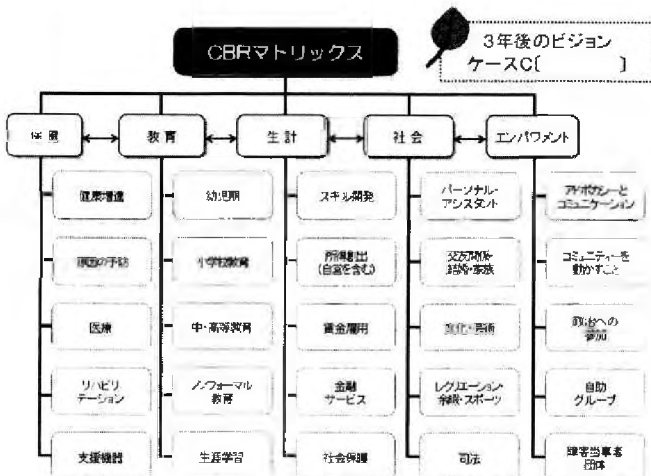
1. _____

2. _____

3. _____

4. _____

5. _____



1. _____

2. _____

3. _____

4. _____

5. _____

Step⑧ インクルーシブの方法

1. コミュニティに活かせそうな当事者の能力（特性）、地域資源、当事者の切実なニーズを書き出しましょう。
2. 当事者の能力（特性）や地域資源を活かしたり、当事者の切実なニーズに応えることができる拠点での活動アイデア、社会資源や住民等のコーディネートイメージ、アウトリーチのメニュー等を考えましょう。
3. 収益を得ながら継続的にビジネスとしてできること、プロジェクトとして補助金、寄付、ボランティア等を活用してできること、教育として取り組むべきこと等、実践できそうなアイデアを絞り込みましょう。

| 人（当事者の能力） | 地域資源 | ニーズ |
|-----------|------|-----|
| | | |

| 拠点 | コーディネート | アウトリーチ |
|----|---------|--------|
| | | |

| ビジネス | プロジェクト |
|------|--------|
| | |
| 教育 | その他 |
| | |

Step⑨ 事業/プロジェクト運営（財源とネットワーク）

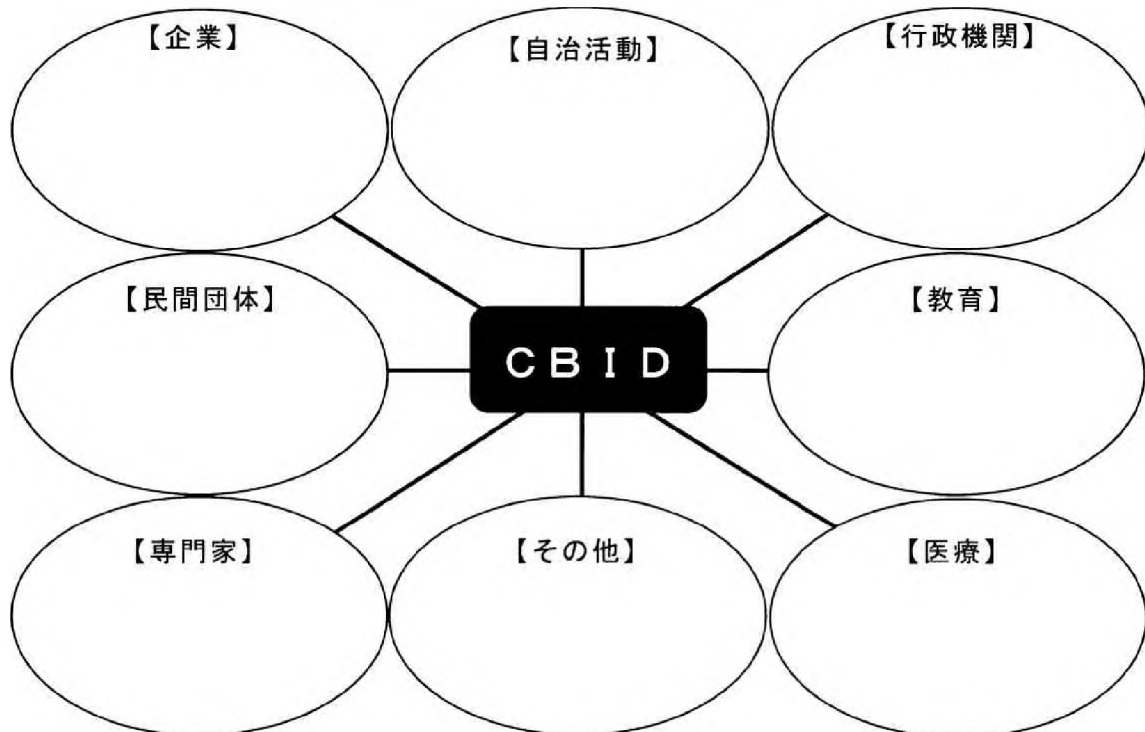
A. 財源の設計

1. 自主財源について、誰から、どうやって、いくら集めるかを考えましょう。
2. 公的な財源、民間の財源は具体的な財源の名称と金額を挙げましょう。

| 自主財源 | | |
|-------|------|-----|
| 売上 | 会費 | 寄付 |
| | | |
| 公的な財源 | | |
| 制度 | 委託 | 補助 |
| | | |
| 民間の財源 | | |
| 助成 | 借り入れ | その他 |
| | | |

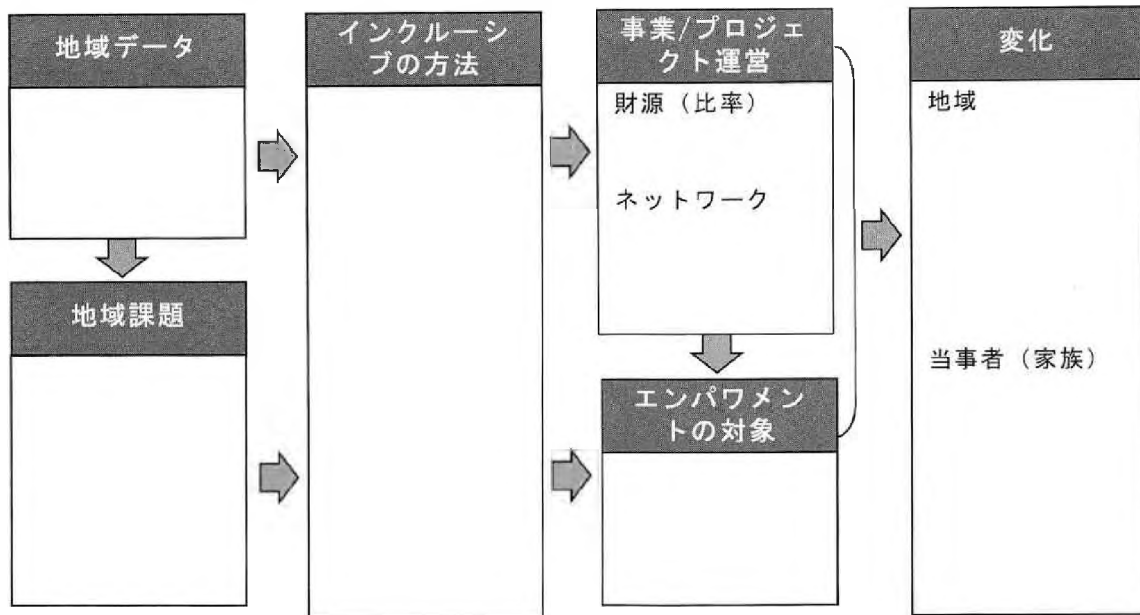
B. ネットワークの設計

1. 未来のビジョンを実現するために必要なネットワークを挙げていきましょう。
2. その中でも重要な関係先の前に●印をつけましょう。

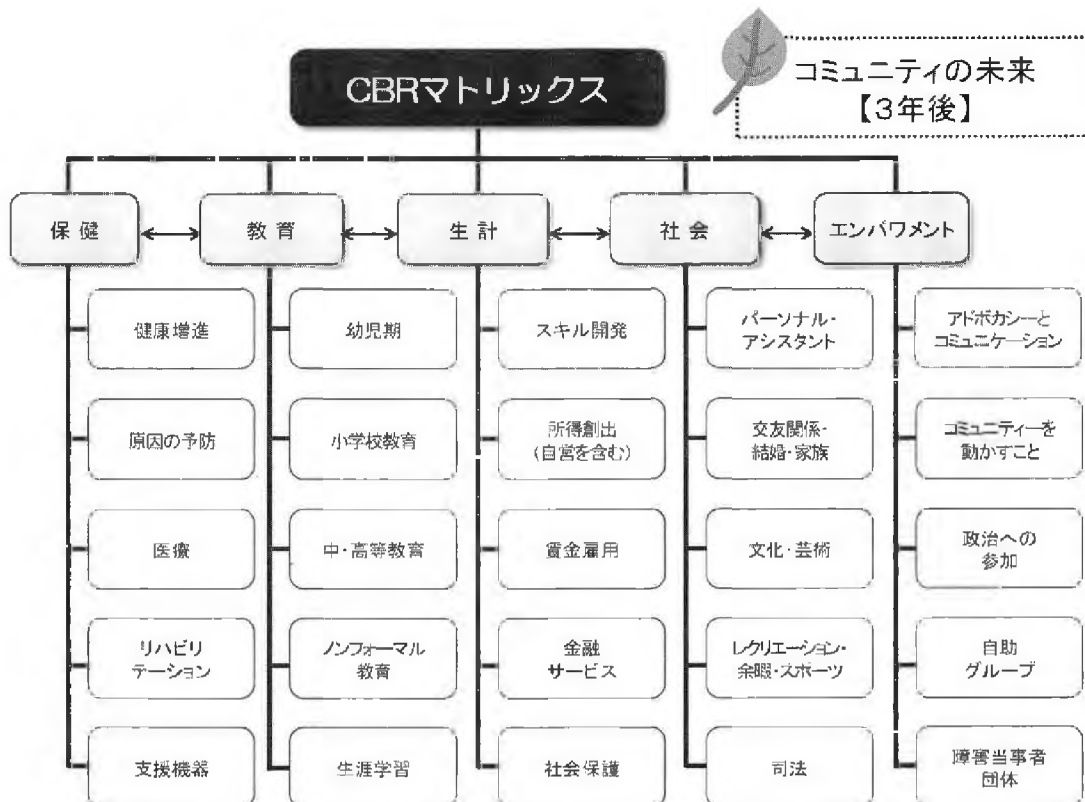


Step⑩ 事業/プロジェクトの全体像

1. これまでのワークの内容を下の図に簡潔にまとめましょう。



2. コミュニティの未来が3年後どのように変化しているかを、マトリックスに表しましょう。 ⇒ ○: 誰にも機会が開かれ、質も確保されている △: あと少しで充足



4-3 できることちよりワークショップマニュアル

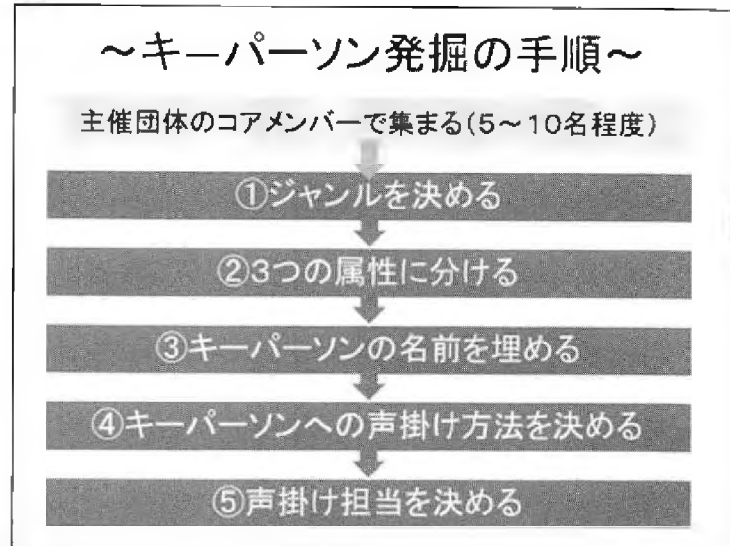
4-3-1 キーパーソン (KP) 発掘

(1)

**できることちよりワークショップ
キーパーソン発掘マニュアル**

CBID研修プログラム開発プロジェクト
 説明会(2016.7.17)

(2)



(3)

①ジャンルを決める

今、自分たちの地域に必要なと思う、専門ジャンルを決めます。
 10～15ジャンル程が理想です。

| ジャンル | |
|------|-------|
| 1 | 就労 |
| 2 | ホームレス |
| 3 | 若者 |
| 4 | 障害 |
| 5 | 高齢 |
| 6 | 外国人 |
| 7 | 居場所 |
| 8 | |
| ... | |

(4)

②3つの属性に分ける

参加者を多様にするために、行政・民間・インフォーマルの3つの属性の方をまんべんなく集めることを意識します。

| ジャンル | 行政・公的 | 民間 | インフォーマル |
|------|-------|----|---------|
| 1 | 就労 | | |
| 2 | ホームレス | | |
| 3 | 若者 | | |
| 4 | 障害 | | |
| 5 | 高齢 | | |
| 6 | 外国人 | | |
| 7 | 居場所 | | |
| 8 | | | |
| ... | | | |

(5)

③キーパーソンを埋める

メンバーがそれぞれに知るキーパーソンを埋めていきます。

| ジャンル | 行政・公的 | 民間 | インフォーマル |
|------|------------|------|---------|
| 1 | 就労 佐藤さん | | |
| 2 | ホームレス | 鈴木さん | |
| 3 | 若者 | 高橋さん | 田中さん |
| 4 | 障害 | 伊藤さん | |
| 5 | 高齢 | | |
| 6 | 外国人 | | 渡辺さん |
| 7 | 居場所 | 山本さん | |
| 8 | | | |
| ... | | | |

(6)

④声かけ方法を決める

| 名前 | 方法 |
|-----|--------------------------------|
| 1 | 佐藤さん 会いに行く |
| 2 | 鈴木さん |
| 3 | 高橋さん |
| 4 | 田中さん メール 電話 |
| 5 | 伊藤さん |
| 6 | 渡辺さん |
| 7 | 山本さん 紹介してもら うつないでもら う |
| 8 | |
| ... | |

・会いに行って趣旨説明した方がいい人
 ・電話やメールがちょうどいい人
 ・キーパーソン経由で紹介してもらった方がいい人 にわけます。

(7)

⑤担当を決める

| | 名前 | 方法 | 声掛け担当 | 備考 |
|---|------|------------------|-------|--------|
| 1 | 佐藤さん | 会いに行く | 中村 | |
| 2 | 鈴木さん | | 小林 | |
| 3 | 高橋さん | メール 電話 | 加藤 | |
| 4 | 田中さん | | 吉田 | |
| 5 | 伊藤さん | | 山田 | |
| 6 | 渡辺さん | 紹介してもら つないでもら | 中村 | 佐藤さん経由 |
| 7 | 山本さん | | 小林 | 鈴木さん経由 |
| 8 | | | | |

・スタッフで声をかける担当を決め、それぞれに実行します。

(8)

【参考】事例を決めるポイント

| KP | 参加者 | 団体名 | ジャンル | 選択 |
|----|------|-----|-------|----|
| | 佐藤さん | A | 就労 | |
| ★ | 鈴木さん | B | ホームレス | |
| | 高橋さん | C | 若者 | |
| | 田中さん | D | 若者 | |
| | 伊藤さん | E | 就労 | |
| | 渡辺さん | F | 外国人 | |

- ①人数の多いジャンル
- ②注目したいキーパーソンがいるジャンル
- ③マイノリティを最後まで意識する

4-3-2 事例作成

できることもちよりワークショップ 事例&お手紙作成マニュアル

事例&お手紙は、できることもちよりワークショップの要です。できるだけ、地域課題を意識できる、リアルな事例&お手紙を作成しましょう。

※※※ 事例作成のポイント ※※※

- ◇ 重複した課題・制度のみでは解決できない課題を抱えた事例であること
- ◇ 「できること」を出しやすいよう、参加者や地域にとって身近なテーマを盛り込むこと
- ◇ 専門家でなくても「できること」が提供できる、具体的エピソードを盛り込むこと
- ◇ イラストや図なども載せ、見やすいレイアウトに仕上げること
- ◇ 専門用語や略語を避け、どんな参加者も読み込みやすい事例にすること
- ◇ 「本人」を主人公に書くこと（支援者からの目線の事例にしない）

<事例&お手紙作成の手順>

- 1) 参加者数が確定したら、5人～7人を1グループとし、できたグループ数分の事例を用意します
※参加人数によっては、同じ事例を使うグループを2つにします
例1) 参加者24名の場合：4事例（1グループ6名）×1
＝事例を4つ準備し、4グループのテーブルをセッティングする
例2) 参加者40名の場合：3事例（1グループ7名）×2
＝事例を3つ準備し、6グループのテーブルをセッティングする
- 2) 事例作成担当を決め、事例とお手紙を作成します
- 3) 実際にふせんが出るかを簡単にテストします
- 4) ふせんが出にくい場合、エピソードを具体的にするなど、修正をします

1事例は必ず、地域のオリジナル事例を作成しましょう！

その他事例は、サンプルを用いても構いません。もちろんすべての事例でオリジナルを作成しても構いません。

事例 1：不登校を乗り越え一度は学校復帰を果たしたが、進級し再び不登校になった A 子

<相談者の基本情報>

年齢：14 歳 性別：女性 学年：中学校 3 年生 既往歴：特になし

家族：父・・・家族に対しては気性が荒く、粗暴。仕事についており一家の家計の支え手。
母・・・表情があまりなく、反応もそっけないことが多い。本人に手を挙げることもある。

姉・・・公立高校から通信制高校へ転学。その後父親と大きなケンカをしたことをきっかけに、長期間家出をしている。

<3 年次担任（女性）の相談概要>

小学校の頃から度々学校を休むことや友人関係でいじめにあったことなどもあり、小学校の申し送りに「担任は女性の先生をお願いします」という旨が記されていた。中学校 1 年の時にも勉強の遅れや友人関係で学校を 1, 2 カ月休むことがあったが、担任（女性）が介入したことで再登校できるようになった。中学校 2 年になり 1 学期の後半から学校を休むようになり、完全不登校になる。2 学期に入っても休みが続き、SC との面談が始まった。SC との話のなかでは、クラスの男子とのやりとりをきっかけに教室にいるのがつらくなった。友達もいるようでいない。担任も男性の先生なので本人はきつく感じている。姉が家を出て行ってから母親がみるみる弱っていき、つらそうな様子を感じ取っている。母が泣いているのは見たくない等ということが訴えられた。昼夜逆転の生活のため放課後に面談を設定していたがなかなか安定した頻度で来室することが難しく、3 学期に入り SC 面談に来られない日が続くようになった。SC から手紙を書くなどし、再度 2, 3 回ほど 3 学期は来室できたが、3 月には全く来られなくなってしまった。

3 年生に上がることについて本人と話したが、本人からの反応はあまりなかった。SC との保護者相談や教育相談、児相への相談も提案したが保護者が動いてくれない。母親とは連絡が取りにくく、夕方家に電話すると本人が出ることが多く、母親が電話に出るのを拒んでいる様子ようだ。進級はしたものの今後のことを考えると何をあげたらよいかわからない。

| 内容 | |
|-------|--|
| 性格や特性 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 集団に入るのが苦手。グループの会話に入っていけない。 ・ 基本的には大人しめの性格だが、少人数だとよく話す。 ・ 会話が一方的になりやすい。 |
| 生活環境 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 基本的に自分の部屋にこもっている。 ・ 昼夜逆転の生活を送っており、夕方ごろにならないと起きない ・ 外出などはほとんどしていない様子。 |

| | |
|-------------|---|
| 担任（学校）との関わり | <ul style="list-style-type: none"> ・母は学校に行くか行かないかは本人の問題ととらえている。 ・放課後本人に学校に来る等約束をしても、来られない日と来られる日がまばらで、母親に顔を殴られるなどし、強制的に学校に行かされるが度々あった。そのようなことが続き完全に学校に来られなくなった。 ・担任が家庭訪問し教育相談を勧めたりしたが、行ってみますと言ったきり相談予約などはいれていない。 ・保護者面談の約束時間に母親が現れず連絡がつかないことがあった。 |
| 社会との関わり | <ul style="list-style-type: none"> ・外出することもほとんどなく、家族ともそれほど顔を合わせていない。 |

修正後事例

①

事例1：不登校中学2年の、“どうしていいかわからず消えてしまいたい・・・”という悩み

<◆相談者＝Aさん Aさんの基本情報> ②

年齢：14歳（中学校3年生）性別：女性 病気や障害：なし

家族：父・・・気性が荒く、妻に暴力がある。仕事にはついているが不況のため収入が激減している。

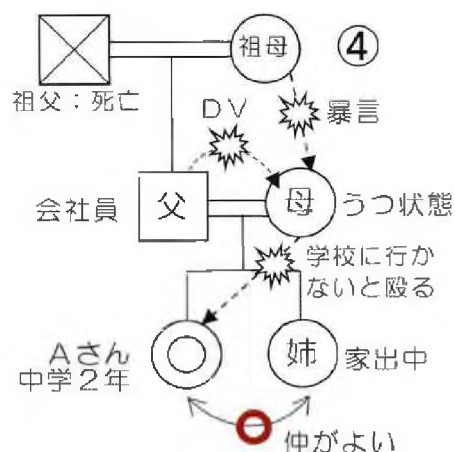
母・・・うつ状態で表情があまりなく、反応もそっけないことが多い。

姉・・・高校を中退して働きだしたたことで、父親と大ケンカになる。それをきっかけに、現在は家出をして3か月が経過している。Aさんはお姉さんを慕っている。

③ <本人の相談内容>

小学校の頃いじめをきっかけに、不登校になった。いじめた相手が男の子だったため、男性が苦手になってしまった。中学校1年の時にも勉強がづらくなり、学校に2か月程行けなくなったが、担任の先生（女性）が家まで迎えにきてくれたり、勉強でわからない所を、授業後丁寧に教えてくれたりしたので、また学校に行けるようになった。

中学校2年になりクラスの男子に容姿をからかわれたことをきっかけに、教室にいるのがつらくなってしまった。担任も男性の先生で、勉強のことも厳しく言われ怖い・・・。女の子とは友達になりたいが、どんな話をしたらよいのかわからなくてグループに入れず、友達ができない。2学期からは完全に学校に行けなくなってしまった。



⑥ 姉が家を出て行ってから、母親がみるみる弱っていると感じる。母が泣く姿を見るのはツライので、姉に戻ってきてほしいが、また父親と姉が大ケンカをするだろう・・・と思うと、想像するだけで苦しくなってしまう。今は、部屋に閉じこもり、昼間は寝て深夜に起きている生活が身についてしまった。そんな様子を見た祖母が、母親に対して「お前の育て方が悪いからだ」と責め、そのことで母親に怒鳴られると、「自分なんて消えてしまえばいいのに・・・」と思ひ涙が出る。学校のカウンセラーさんのところに一度行った時、これからのことを聞かれたが、自分ではどうしたらいいか全くわからず、その場で黙ってしまった。こんな時、姉がいたらアドバイスしてくれるのに・・・。⑦

| 内容 | |
|---------|---|
| 性格や特性 | <ul style="list-style-type: none"> ・集団に入るのが苦手で、グループの会話に入っていけない。 ・勉強（特に数学）が苦手でついていけない。 ・絵をかくことが好きで、学校に通っていたころは休憩時間によく塗り絵をしていた。 ・ディズニーが好きで、キャラクターグッズを集めている。 ⑧ |
| 生活環境 | <ul style="list-style-type: none"> ・学校に行けない日は、自分の部屋にこもっている。 ・昼夜逆転の生活を送っており、夕方ごろにならないと起きられない。 ・父親の収入が激減しているため、塾に通えず家庭教師も頼めない。 |
| 家族との関わり | <ul style="list-style-type: none"> ・母は、「学校に行く行かないは本人の意欲の問題」ととらえ、親身になっていない。 ・母親に顔を殴られるなどし、強制的に学校に行かされることが度々あった。 ・部屋にこもり家族ともそれほど顔を合わせていない。 |
| 社会との関わり | <ul style="list-style-type: none"> ・父も母も学校からの連絡や家庭訪問を拒んでおり、学校も関わりを持ちにくい。 ・Aさんは外出することもほとんどなく、引きこもり状態。友だちもいない。 |

<事例修正ポイント>

同じ事例の「修正前」と「修正後」を比較し、ポイントをまとめました。

① タイトル

状況を説明するのではなく、本人の困りごとと気持ちがイメージできるタイトルにする

② 用語・単語

「既往歴」など、業界でよく使う専門性の高い用語は使わず、一般に用いられる言葉を使う

③ 主人公の設定

支援者の視点で事例を書くのではなく、困りごとを抱えた本人を主人公にする

④ エゴグラム（関係や状況の図示）

家族の状況や関わりは、一目見てわかるよう本人を取りまく状況がわかるように図にする

⑤ イラスト

アイコン的なイラストを入れることで、パッと見てどんな内容の事例かイメージができるようにする

⑥ 相談内容

- ・略語や専門用語を使わない
- ・本人の周りでおこっていることを具体的にイメージし易いエピソードで書く
- ・本人や周りの人たちの「セリフ」を用いる
- ・改行や余白にも気を使い、読みやすさを意識する

⑦ ナラティブ（物語調）

- ・最後の一文は、本人が感情や気持ちを語っているような表現で終わることで、事例の人物への愛着や思い入れを高める

⑧ インフォーマル（専門性・公共性以外）の視点

- ・趣味、特技などのエピソードを盛り込む
- ・本文に書ききれなかった、「本人らしいエピソード」を箇条書きで書く
- ・本人以外の家族の特性や苦労も添える
＝専門家ではない一般の方が「できること」を出しやすいようにする

4-3-3 準備マニュアル

できることもちよりワークショップ 事前準備備品

できることもちよりワークショップは、丁寧な会場セッティングが重要です。参加者にストレスのない会場設定をすることで、ホスピタリティに満ちた場が生まれます。最後まで手を抜かずに、心を込めて準備しましょう！

<ポイント>

※（米印）のついている備品は、事前に準備が必要なものです。

前日までに準備しておく余裕があれば、※の備品を事前作成し、当日はセッティング作業のみにしておくのがベストです。なるべく多くのスタッフが集まることのできる日程で準備日を設け、役割分担をして準備をします。そうすることで、スタッフのチームワークも醸成されます。

◆ 1. グループテーブル上にセッティングするもの

| 物品 | 必要数 | 備考 | |
|--------------|--------------|---|-----------------|
| ふせん 75×75 | 黄色 | グループ数×200枚 | 100枚を束で購入し、2束設置 |
| | 赤 | グループ数×100枚 | 100枚を束で購入し、1束設置 |
| | 緑 | グループ数×100枚 | 100枚を束で購入し、1束設置 |
| | 黄 | グループ数×100枚 | 100枚を束で購入し、1束設置 |
| 黒ペン | 参加人数分 | グループ人数分設置 | |
| 色ペン（プロッキー） | 2グループに1ケース程度 | 黄色・オレンジなど薄い色を抜いて、グループに2～3本設置 | |
| 小さめのぬいぐるみ | グループ数 | なるべくカワイイものを各テーブルに1体ずつ設置 | |
| 名札作成の手引き | グループ数 | 名札の書き方をサンプルで設置 | |
| ※事例番号入り封筒 | 必要事例番号×1セット | 事例番号を大きくA4用紙に書き、封筒に入れ、表に「まだ空けないでください！」と書く | |
| ※模造紙 | グループ数×2枚 | 2枚をセロテープで貼り付け、（裏面）大きな1枚にしてテーブルに設置。四隅をテープで留める。 | |
| ※表札セット | グループに1セット | 青ふせんに、支援の分類を書いてA3用紙に張り付けたものを設置 | |

◆ 2. 受付にセッティングするもの

| 物品 | 必要数 | 備考 |
|--------------|---------|---------------|
| ※ 事例セット | 参加人数分 | 左ホチキス止めの事例セット |
| 配布資料 丸シール（赤） | 参加人数×5片 | 5片ずつに切っておく |
| 丸シール（青） | 参加人数×5片 | 5片ずつに切っておく |
| 名札ケース | 参加人数分 | 丸シール赤・青を両方セット |
| 名札台紙 | 参加人数分 | 名札ケースに入れずに手渡し |
| ※受付名簿 | | 個人情報の管理に注意！ |

◆ 3. ドリンクコーナーにセッティングするもの

| 物品 | 必要数 | 備考 |
|-----------|----------|-----------------|
| 紙コップ | 人数分×2個程度 | |
| プロッキー | 2～3本 | 紙コップに名前を書いてもらう用 |
| ごみ袋 | 適量 | 不燃・可燃など、地域に合わせて |
| ウェットティッシュ | 1箱 | 手拭き用 |
| ふきん | 1～2枚 | 台ふきなどに |
| ポット | 1つ | 大きめのものがあれば便利 |
| 延長コード | 1本 | ポット接続用。長めのもの。 |
| ドリンク | 適量 | 季節に合わせて |
| お菓子 | 適量 | 甘いものと塩気のもの！ |

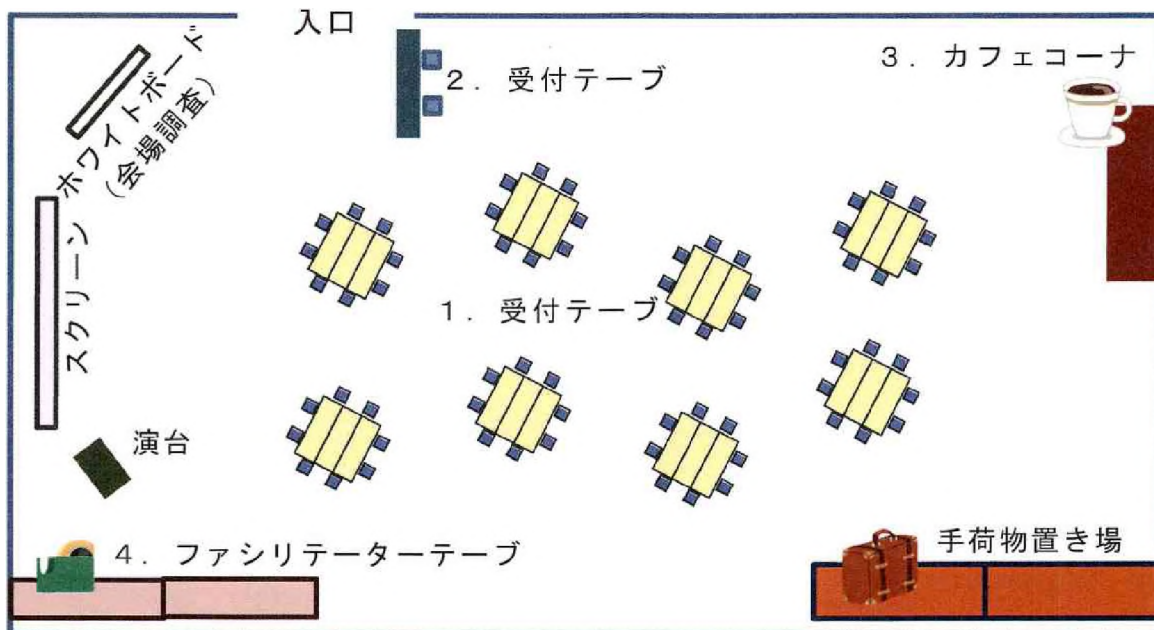
◆ 4. ファシリテーターテーブル（控えテーブル）にセッティングしておくもの

| 物品 | 必要数 | 備考 |
|----------|----------|---|
| A4用紙 | 適量 | |
| A3用紙 | 適量 | |
| セロテープ | 3～4本 | 小型のカッター付きのものが便利 |
| マスキングテープ | 2本 | 手で切れるもの |
| はさみ | 2～3本 | 作業用 |
| ベルやテンジャン | 1個 | きれいな音の鳴るもの |
| ※手引書 | スタッフ人数分 | PPの「手引き」をカラーの2in1で印刷 |
| ※お手紙セット | 事例×10セット | 各事例のお手紙を折って封筒に封入。事例番号がわかるように、隅に鉛筆で印をつける |

◆ 5. 会場設営

| | 物品 | 必要数 | 備考 |
|---------------|------------|------|--|
| 案内 掲示 ※ | 「受付」 | 1枚 | 受付テーブルに表示 |
| | 「手荷物置き場」 | 適量 | 手荷物用テーブルに表示 |
| | 「ドリンクコーナー」 | 適量 | イラストなど入れて楽しく！表示 |
| | 「イベント名」 | | 入口にイベント名を表示 |
| | 「各種誘導」 | | 会場が分かりにくい場合、矢印などで誘導表示 |
| マイク | | 2～3本 | コードレスが望ましい |
| 演台 | | 1台 | |
| 延長コード | | 2本 | なるべく長めのものを用意 プロジェクター&パソコン用 |
| プロジェクター | | 1台 | ケーブルは長めのものを準備 |
| スクリーン | | 1台 | 投影でき白無地の壁があれば、なしでもOK |
| ホワイトボード | | 1～2台 | |
| ※入口調査の模造紙 | | 1枚 | 模造紙1枚に、プロッキーで会場調査マップを作成。地域によって、関心・関係分野は変更する。 |

<会場設営の一例>



<最後の準備：リマインドメール>

2日前～前日くらいの日程に、参加者のみなさんに、参加の感謝の気持ちを盛り込んだ、リマインドメールを出しましょう。その際、再度会場や開催時間の案内を丁寧にわかりやすく載せてください。当日の連絡先番号（担当者の携帯番号）も載せておいたほうがベストです。リマインドメールをすることで、直前キャンセルなどが把握しやすくなり、当日の会場設営やグループ数の誤差を最小限にできます。

----- メモ -----

4-3-4 当日プログラム

(1)



(2)

1. 会場調査

● 今日、どんな方が集まっているかを共有します。
 関心や関係のある分野を選んで(複数可)、シールを貼って下さい。

※開始の前か最初の休憩時間(約15分)に貼り下さい

| 参加分野の関心・関係分野 | 関心があります | | 関心があります | |
|--------------|---------|-----|---------|-----|
| | 名古屋市内 | 他地域 | 名古屋市内 | 他地域 |
| 産科医療 | | | | |
| 就労 | | | | |
| 障害 | | | | |
| 若者 | | | | |
| ホームレス | | | | |
| 高齢者 | | | | |
| 外国人 | | | | |
| DV | | | | |
| 子ども | | | | |
| 兵子 | | | | |
| 医療 | | | | |
| 薬物・アルコール依存 | | | | |
| 居場所 | | | | |
| 労働・法務 | | | | |
| その他 | | | | |

(青いシール) 就労関係の支援を名古屋市内でしている男性

(赤いシール) ホームレスの支援に関心がある名古屋市内から来られた女性

(赤いシール) DV被害者の支援をしている名古屋市外から来られた女性

(青いシール) 医療的支援に関心がある名古屋市外から来られた男性

(3)

2. 名札の作成

● 名札を作成して下さい

氏名をお書き下さい

所属する法人や団体名をお書き下さい

| | |
|-------------------------|---------------------|
| 所属団体の活動エリアの市、町、村をお書き下さい | どんな人を支援しているかをお書き下さい |
|-------------------------|---------------------|

担当の仕事や支援の内容をお書き下さい

【記入例】

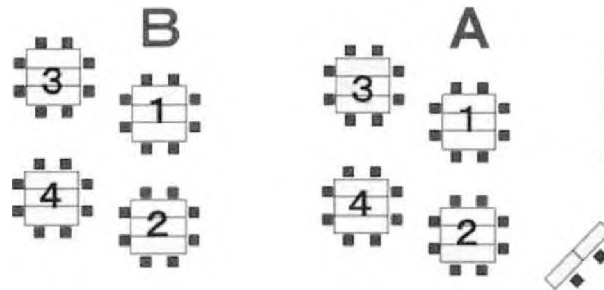
| | |
|------------|-------|
| 草の根 太郎 | |
| NPO 法人あいち | |
| 名古屋市 | 引きこもり |
| 自立生活と就労の支援 | |

※受付までに記入ください

(4)

3. グループになります

好きなぬいぐるみのテーブルに移動してご着席ください。
同じ団体から複数人でお越しの方は、
同じテーブルにならないように、おねがいします。



(5)

どんな方がお集まりでしょうか

| 参加の方の関心・ 関係分野 | 関係があります | | 関心があります | |
|------------------|---------|-----|---------|-----|
| | 市内 | 他地域 | 市内 | 他地域 |
| 権利擁護 | | | | |
| 就労 | | | | |
| 障害 | | | | |
| 若者 | | | | |
| ホームレス | | | | |
| 高齢者 | | | | |
| 外国人 | | | | |
| DV | | | | |
| 子ども | | | | |
| 母子 | | | | |
| 医療 | | | | |
| 薬物・アルコール依存 | | | | |
| 居場所 | | | | |
| 労働・法律 | | | | |
| その他 | | | | |

(6)

◆同じ支援チームになった メンバーで自己紹介をします◆

・緑の付箋に、お題の回答と、
ご所属・お名前を書いてください。

おにぎり
草の根ささえあい
プロジェクト
渡辺ゆりか

**お題:「あなたの仕事や活動を、
食べものに例えてください」**

- ・ぬいぐるみを受け取った方から、お名前、お題の回答
その理由を1分程度で発表ください。
- ・自己紹介が終わったら、ぬいぐるみを回します。
誰に渡しても構いません(投げてもOK)。
- ・自己紹介の緑の付箋を、ファシリテーターに渡してください。

(7)

4. 封筒をあけて、事例をお読みください

◎机の上の封筒をあけて、番号を確認してください

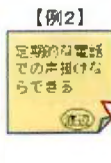
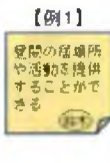
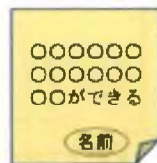
◎封筒に書かれた番号の事例を読んでください



(8)

5. 自分ができる支援を出し合います

①黄色い付箋に自分ができる支援を書きます。
「～ができる」と書いて下さい。一番下に名前も書いて下さい。



③支援が思いつかない方は無理に出す必要はありません。
④支援としてできることも、個人としてできることもお書きください
※自分の専門以外のことでもOKです！

②ひとつの付箋にはひとつのことしか書きません。複数の支援ができる人は付箋を複数使って下さい。
③思いつくままに、自由な発想で、ふせんをお書きください。

(9)

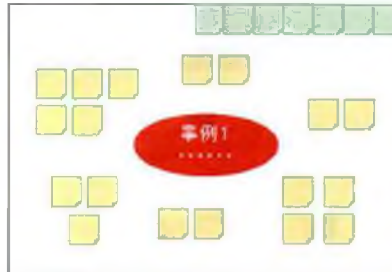
このワークのねらいと参加のポイント

- 本日のワークは、今日ご参加の皆さまの「できること」をなるべくたくさん出し合います。ひとりではできないことを、地域のみんなで考えると、どんなことが起こるか？その可能性を、限界まで知ることを目的としています。
- 付箋に書いた支援は、今後の実施を約束するものではありません。重く考えず、できる可能性があればどんどん書いて下さい。
- 特に「個人としてできること」は、支援者でなくても、困っている人のために「できることがある」ということを知るための大切なふせんになります。どうぞ遠慮なく、積極的に出して下さい。
- 事例はいろんな角度から支援が出しやすいように作られています。最終的な問題解決を目指してしまうと、不足している情報が沢山あって行き詰ってしまいます。今日は「解決」を目指さずよりも、より多くの「できること」を出し合うことを目標にして下さい。
- ちょっと不確実かも知れませんが、今日は自由な発想で、沢山の思い付きを出して、ポジティブに楽しくご参加ください。

(10)

6. 付箋を発表、整理します

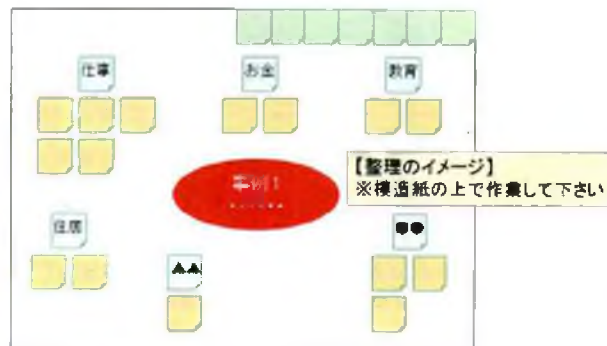
- ①付箋を読み上げながら、「できる支援」を1枚発表し、模造紙に貼り出します。
- ②似た付箋がある人は、読み上げて近くに張り出します。
- ③書いた付箋が全部貼り出されるまで続けます。



(11)

7. 付箋を発表、整理します

- ①分類した支援に名前をつけます。グループの<看板>となるタイトルを、机上の『悩みや・ニーズの分類と支援』のふせんの中から選んで貼り出します。



(12)

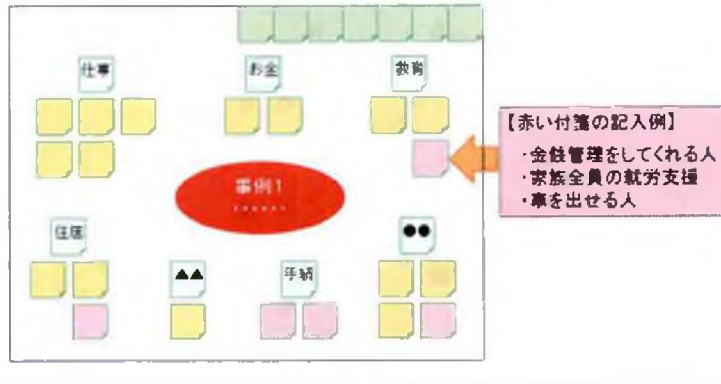
悩みや・ニーズの分類と支援

| 悩み・ニーズ | 悩みやニーズに対して提供できる支援 | | |
|------------------|-------------------|------------------|------------|
| 仕事に関する悩み・ニーズ | 就労の支援 | 働く機会の提供 | 起業・自営の支援 |
| 住居・居宅に関する悩み・ニーズ | 住居の確保 | 訪問支援 | 身辺の世話・見守り |
| 日常生活に関する悩み・ニーズ | コミュニケーションの支援 | 家庭の支援 | 権利擁護 |
| お金に関する悩み・ニーズ | 公的給付の受給サポート | 貸付(サポート) | 多重債務の支援 |
| 病気に関する悩み・ニーズ | 医療・看護 | 予防・リハビリ | 入退院の支援 |
| 教育に関する悩み・ニーズ | 発達支援 | 学校 | インフォーマル教育 |
| 交流活動に関する悩み・ニーズ | 居場所の提供 | 移動の支援 | 余暇の支援 |
| 社会参加に関する悩み・ニーズ | 自助グループの支援 | 地域・政治・企業とのつながり支援 | 人材の育成 |
| 法律・手続きに関する悩み・ニーズ | 制度利用の相談 | 申請手続きの支援 | 被害に関するサポート |

(13)

8. 後に来る人にSOSを出します

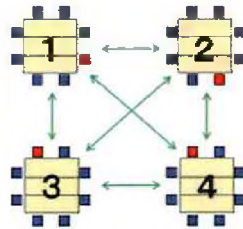
②赤い付箋はSOSふせんです。
 「この支援をできる人が必要!」「こんな支援が必要!」という時に使います。
 具体的な支援内容を書いて、適切な場所に貼って下さい。



(14)

9. 他の事例の支援に向かいます

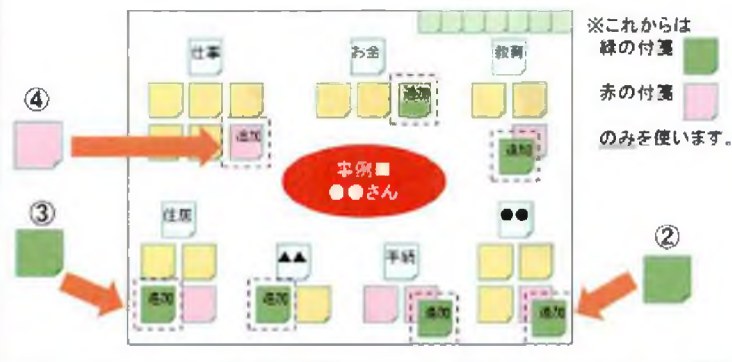
休憩中に他の事例を読み込み、
 あなたの関心の高い事例、
 あるいはあなたが一番活躍できそうな
 事例のグループに移動します。



(15)

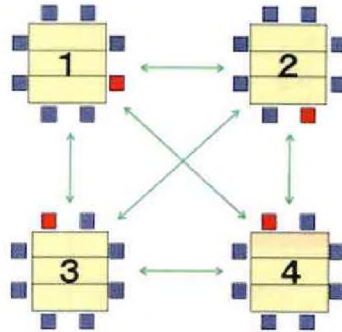
10. できることを出し合います

- ①テーブルに残った人から簡単に説明を受けます。
- ②赤いSOS付箋に対して、できることを出し合います。(緑の付箋)
- ③他にもできることがあれば、SOS付箋がないところにも貼って下さい。
- ④赤いSOS付箋も必要であれば追加してください。



(16)

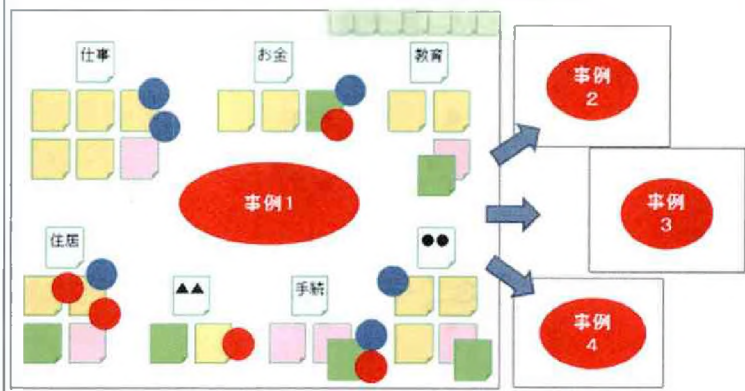
11. 次の事例の支援に移動して できることを持ち寄ります。



(17)

12. いいね！シールを貼ります

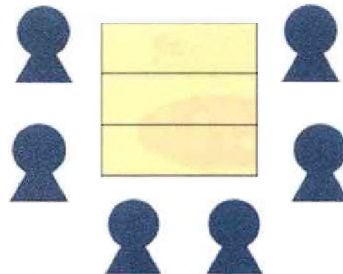
会場全体を見てまわり、「ステキだな」「いい支援だな」
「こんな支援があるんだ！」など、ぐっときたふせんに
マルシール(いいね！のシール)を貼ってください。



(18)

13. 成果の共有

一番初めの事例に戻り、成果を見ながら、
メンバーと感想や気づきを交換してください。



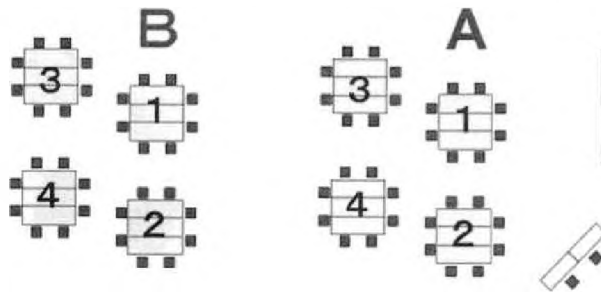
(19)

あなたが今まで、「できること」を提供してきた事例のなかで、「最も気になる」人物について、考えます。
どんな未来が見えるでしょうか……？

(20)

14. ふたたび、グループになります

あなたが、一番「気になる」「思い入れのある」人物のいる事例に移動してください。主人公でなくても、事例に登場する人であればだれでもよいです。



(21)

15. 最悪の未来予測

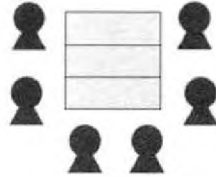
あなたが気になっている人物を、ふせんの支援が全く届かない状態で、放置したとすると、その方の未来はどうなってしまうでしょうか？
【一番最悪の状態】に陥った未来像を想像して書いてください。

精神障害が悪化して、
長期の入院生活になる

弟が家族に暴力を
ふるうようになる。

(22)

それぞれが書いた「最悪の未来」を、
グループでシェアしてください。



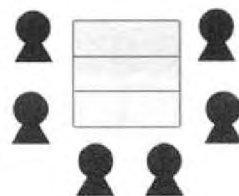
(23)

「ご本人からみなさんに、
お手紙が届いています」



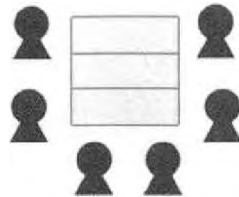
(24)

ご本人からのお手紙を読んで、
それぞれに感じたことを、
グループでシェアしてください。



(25)

お手紙をくださった方が、
どんな未来を歩むことを、
私たちは望みますか？
またどうすると叶うでしょうか？



(26)

◆できることもちよりタイムスケジュール◆

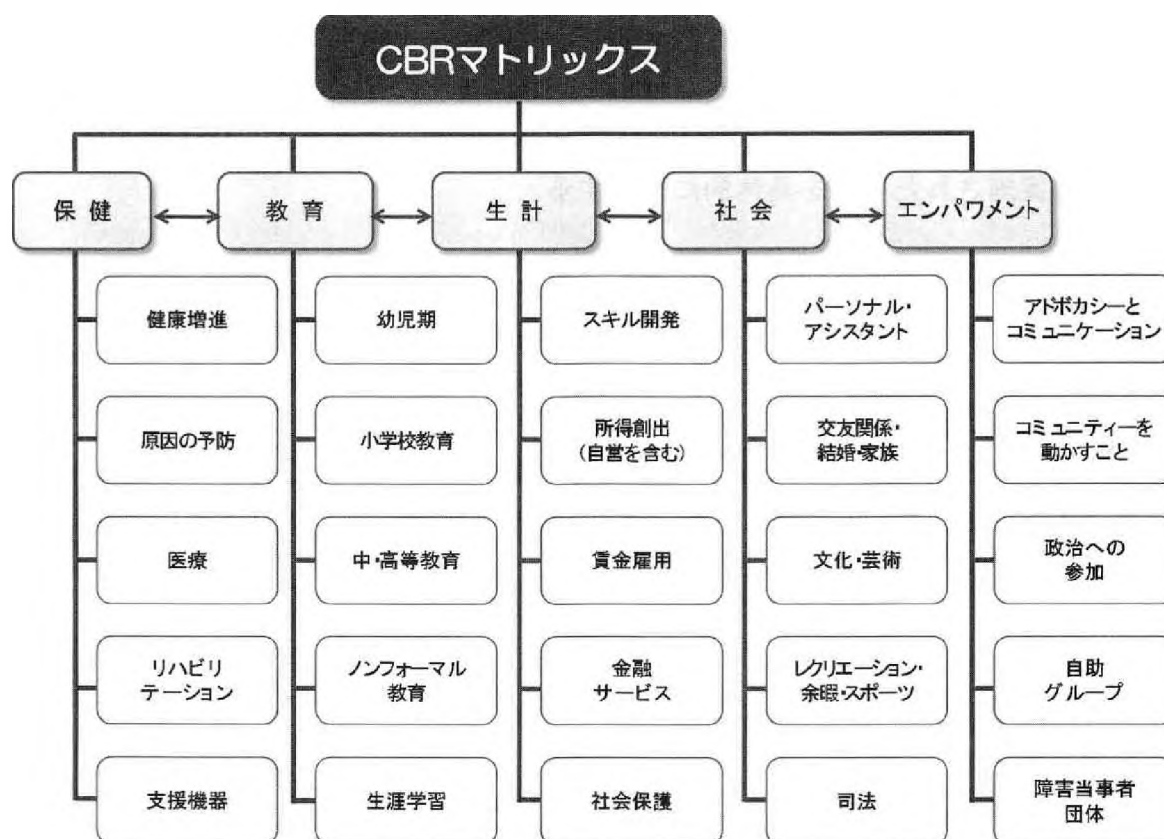
| | 時間 | プログラム | min |
|----|-------|---------------------------|-----|
| 1 | 13:30 | 主催者あいさつ&前説 | 20 |
| 2 | 13:50 | グループ自己紹介 | 10 |
| 3 | 14:00 | 事例の読み込み | 5 |
| 4 | 14:05 | WSの説明 | 5 |
| 5 | 14:10 | グループ1 支援の記入(個人ワーク) | 10 |
| 6 | 14:20 | グループ1 支援の発表(グループで); 勇みせん | 20 |
| 7 | 14:40 | グループ1 整理と足りない支援出し; 青 勇みせん | 15 |
| 8 | 14:55 | 休憩 他事例の読み込み | 15 |
| 9 | 15:10 | グループ2 | 20 |
| 10 | 15:30 | グループ3 | 10 |
| 11 | 15:40 | グループ4 & いいね!シール(全体) | 10 |
| 12 | 15:50 | グループ1に振り返りかえり | 15 |
| 13 | 16:05 | 気になる事例に移動&最悪の未来記入、発表 | 15 |
| 14 | 16:20 | お手紙配布&感想シェア | 20 |
| 15 | 16:40 | 振り返り | 10 |
| 16 | 16:50 | 主催者挨拶 | 10 |

4-4 診断・評価ツール

4-4-1 プロジェクト概要図

| | | | |
|----------------|-----------------|---------------------|------------------|
| A. 地域情報 | C. 事業の内容 | D. 財源/ネットワーク | F. 期待する変化 |
| B. 地域課題 | | E. 事業の主な対象 | |

4-4-2 CBR マトリックス



5. 共生社会づくりに基づく実践報告

5-1 解説

この章では、CBID 研修が松本市新村（にいむら）地区、名古屋市、富山県入善町で、どのように実施されたのかを具体的に紹介する。

1. 地域診断、地域課題の解決とインクルージョンの実践のため事前調査結果。
7月17日の説明会に提出され、各地域の特徴に基づいた結果を知ることができる。
2. 事前調査をもとに、事例作成とワークショップ開催準備が行われ、本番のワークショップ開催の様子
3. 12月4日の振り返りの会での発表を録音に基づいて文字起こしした内容と、その後追加していただいた内容（目標、総括、成果と課題、ワークショップ後の反響、今後の展開）を紹介する。

5-2 事前準備

松本大学

一般社団法人 しん

NPO 法人工房あおの丘

5-3 ワークショップ実施

10月19日 松本市新村地区、松本大学の調査研究員が地区の人々と共に開催

10月30日 名古屋市、一般社団法人しんにより開催

11月3日 富山県入善町、NPO 法人工房あおの丘により開催

5-4 チラシ

共通

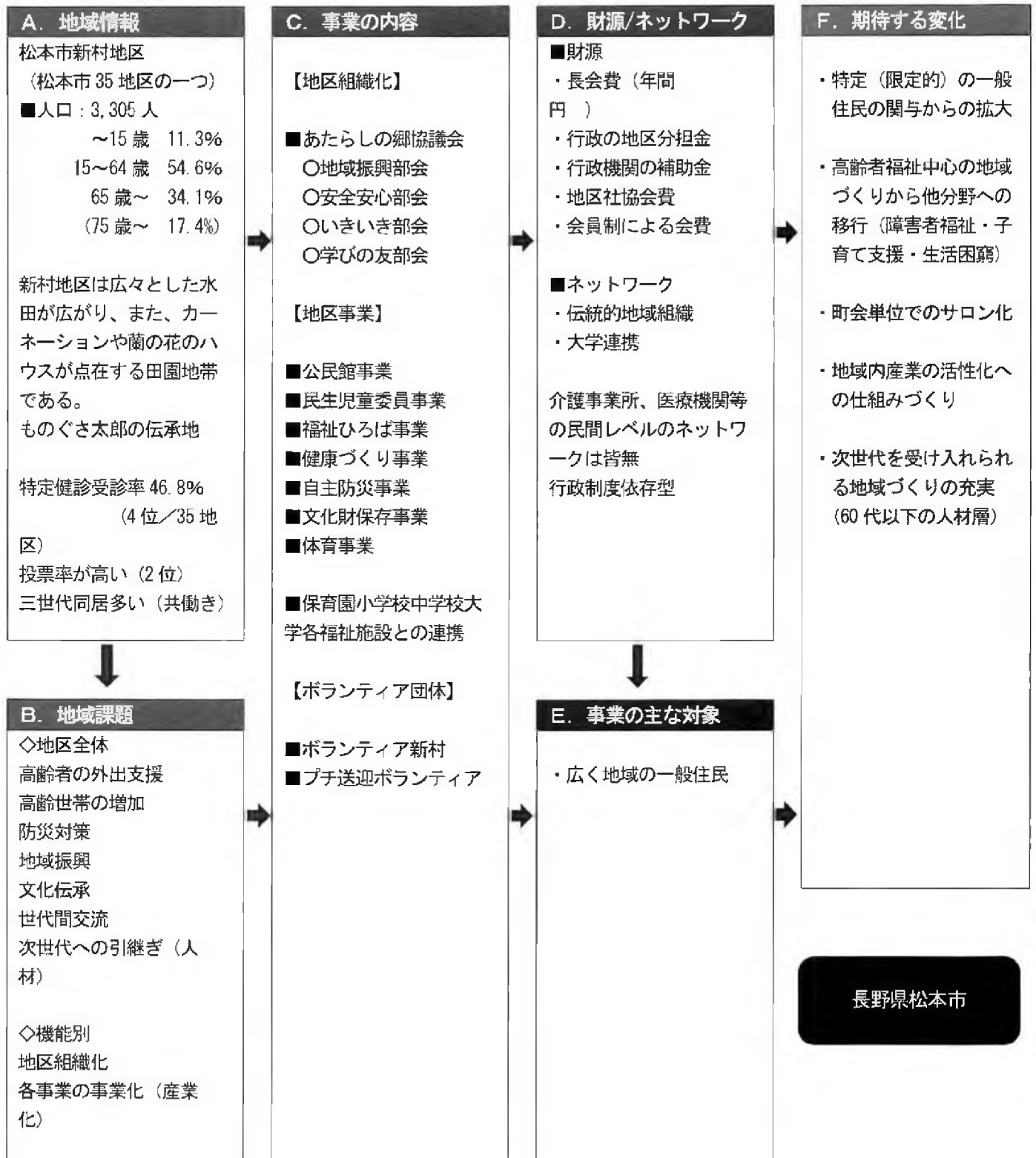
松本大学

一般社団法人 しん

NPO 法人工房あおの丘

5-2 事前準備

5-2-1 松本大学



CBIDを実践するためのワークシート

このワークシート集は、CBID を実践するためのプランニングツールです。
プランニングは 10 の STEP から構成されています。

最初は 1 人で記入してみましよう！

次に仲間や同僚と一緒に考えましよう！

そして、その次は関係当事者（ステークホルダー）を集めて考えましよう！

次のページから未来が始まります！

Step① 地域の概要と課題

Step② 理念・目的

Step③ コミュニティの現状

Step④ マトリックスで見るコミュニティの現状

Step⑤ マトリックスで見る個人のおかれている現状

Step⑥ コミュニティの好ましい未来のビジョン

Step⑦ 個人の好ましい未来のビジョンとステップ

Step⑧ インクルーシブの方法

Step⑨ 事業/プロジェクト運営（財源とネットワーク）

Step⑩ 事業/プロジェクトの全体像

Step① 地域の概要と課題

A. 地域データ

| 人口 | 産業 | 特色 |
|--|--------------------------------|--|
| ■人口： 2,282,444人 ■障害者数 身体：76929人 知的：14474人 精神：17128人 対総人口比： 4.8% | 自動車・パチンコなど 工業生産が盛ん 物流の拠点 | コミュニティに根付いた人と それ以外の人の壁が厚い やや閉鎖的？ |

B. 地域の課題

1. キーワードを参考にしながら、地域の課題を書きだしましょう。
2. 独自にキーワードをあげて、課題を書きだしましょう。
3. 重大な課題のキーワードを○で囲みましょう。

| キーワード | 課題 | キーワード | 課題 |
|-------|------------------------------------|-------|--------------------------|
| 経済 | 他県と比較すると好景気 | 高齢者 | 超高齢化 |
| ○教育 | 教育員会が閉鎖的 メンタルヘルス教育不十分 | 障害者 | 人口比 4.8% |
| 環境 | 経済圏は小さく自然多い | ○患者 | 医療中心（医療任せ） |
| 食 | 独自の名古屋めし | 若者 | 専門的支援の遅れ |
| ○子育て | 待機児童解消した？ 保育士不足 | 子ども | 貧困、教育の不足 |
| ○福祉 | 民間移行が進んでいる 就労系施設の乱立 医療との連携不足 | 子育てママ | 活用できる施設の不足 |
| 文化 | 三英傑、閉鎖的？ | 会社員 | 忙しすぎる |
| 交流 | コミュニティ<サークル型 | ○自営業者 | シャッター商店街 大手量販店にやられている |
| 企業 | 自動車、パチンコ | 外国人 | 支援が不足しがち |
| NPO | 人口比ワースト2 | | |
| 行政 | 堅実、質素 | | |
| 自治組織 | 形骸化？ | | |
| 家族 | 核家族化、単身者増加 | | |

Step② 理念・目的

1. どんな地域を実現するためにCBIIDを実践しますか？
「〇〇な地域の実現を目指します」という文章を10個書き出しましょう。
2. 書き出した10個の文章を何度も繰り返し読み返し、より大切にしたいと感じた文を5つ選び、選択の欄に○つけましょう。

| No. | 実現したい地域 | 選択 |
|-----|-------------------|-----------------------|
| 1 | 共生が可能 | <input type="radio"/> |
| 2 | 精神疾患に理解があり寛容 | <input type="radio"/> |
| 3 | 精神病院をあまり必要としない | <input type="radio"/> |
| 4 | 多様な人が交流できるよう | |
| 5 | 障害を持つ方が住みやすいよう | |
| 6 | すべての人が社会的役割をもてるよう | <input type="radio"/> |
| 7 | 人生のリ・スタートがしやすいよう | |
| 8 | 医療・福祉に任せすぎないよう | |
| 9 | 困りごとを外に出せるよう | |
| 10 | メンタルヘルス教育が充実した | <input type="radio"/> |



3. ○を付けた5つの文を3つの文に集約しましょう。
4. 最終的に一番大切にしたいと感じた文を1つ選び、選択の欄に○をつけましょう。

| No. | 実現したい地域 | 選択 |
|-----|------------------------------|-----------------------|
| I | 予防のため、偏見を持たないための精神保健教育を充実させる | |
| II | 精神疾患を持つ方の現状を地域に知ってもらう | |
| III | 医療福祉任せではなく、地域課題として支えあう | <input type="radio"/> |



5. 選択した文をベースに、3つの文を1つに集約しましょう。

| 理 念 |
|---|
| メンタルヘルスに対する知識を十分に教育し、精神的な危機に陥っている人を医療福祉にだけ任せるのではなく、地域の課題として支えあう文化を作る。 |

Step③ コミュニティの現状

A. 理念からみて「好ましくない」コミュニティの現状

1. 理念からみて「好ましくない」と感じるコミュニティの現状を書き出しましょう。
2. 書き出した現状は理念からみた時にどれくらい深刻でしょうか？
●：かなり深刻 ○：深刻 △：やや深刻

| No. | 理念からみて『好ましくない』コミュニティの現状 | 深刻度 |
|-----|---------------------------|-----|
| 1 | 精神疾患に対して関心が薄いか、知らない。 | ○ |
| 2 | 医療福祉など専門機関に任せすぎ | ● |
| 3 | 家族や地域ができることをあまり考えていない | ○ |
| 4 | 若年層のうつ病患者が増加している | ○ |
| 5 | メンタルヘルスに対する教育が不十分 | ○ |
| 6 | 長期入院している患者の存在を社会が知らない | ● |
| 7 | グループホームなど住居系支援が不足 | ● |
| 8 | 課題が地域に出てこないから支援体制が進まない悪循環 | ● |

B. 理念からみて「好ましい」コミュニティの現状

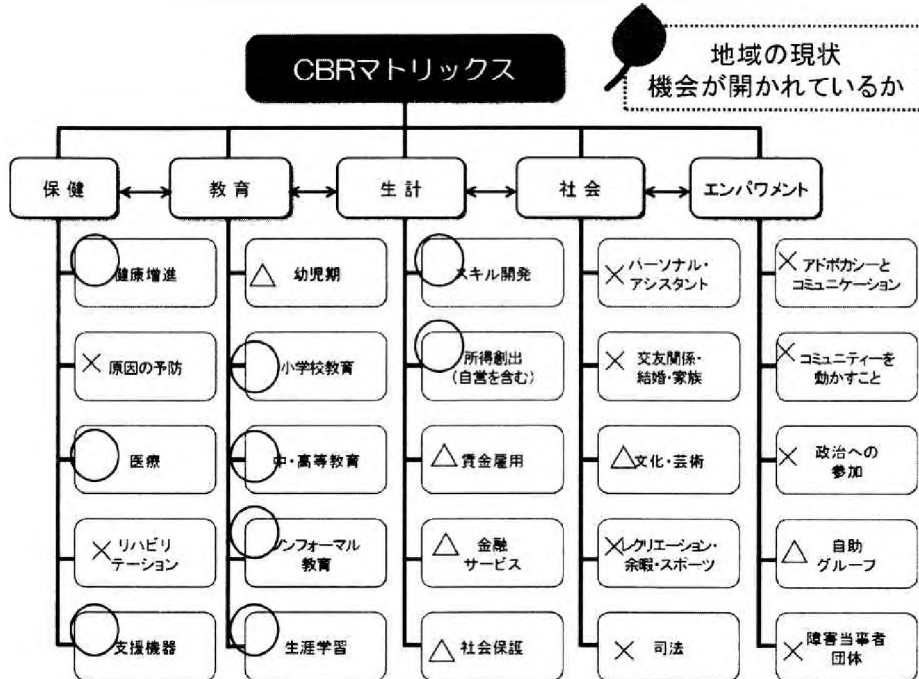
1. 理念からみて「好ましい」と感じるコミュニティの現状を書き出しましょう。
2. 書き出した現状は理念からみた時にどれくらい期待できるでしょうか？
●：かなり期待 ○：期待 △：やや期待

| No. | 理念からみて『好ましい』コミュニティの現状 | 期待度 |
|-----|-----------------------------------|-----|
| 1 | 精神疾患を専門的に支援できる機関は多い（医療機関ばかりだが・・・） | △ |
| 2 | 精神疾患を専門的に支援できる人材は多い（病院にいるけど・・・） | △ |
| 3 | ボランティアをやりたがっている元気な高齢者が多い | ● |
| 4 | 行政も、市民も比較的財政に余裕がある人が多い | ○ |
| 5 | 土地や空き物件が結構ある | ● |
| 6 | | |
| 7 | | |
| 8 | | |

Step④ マトリックスで見るコミュニティの現状

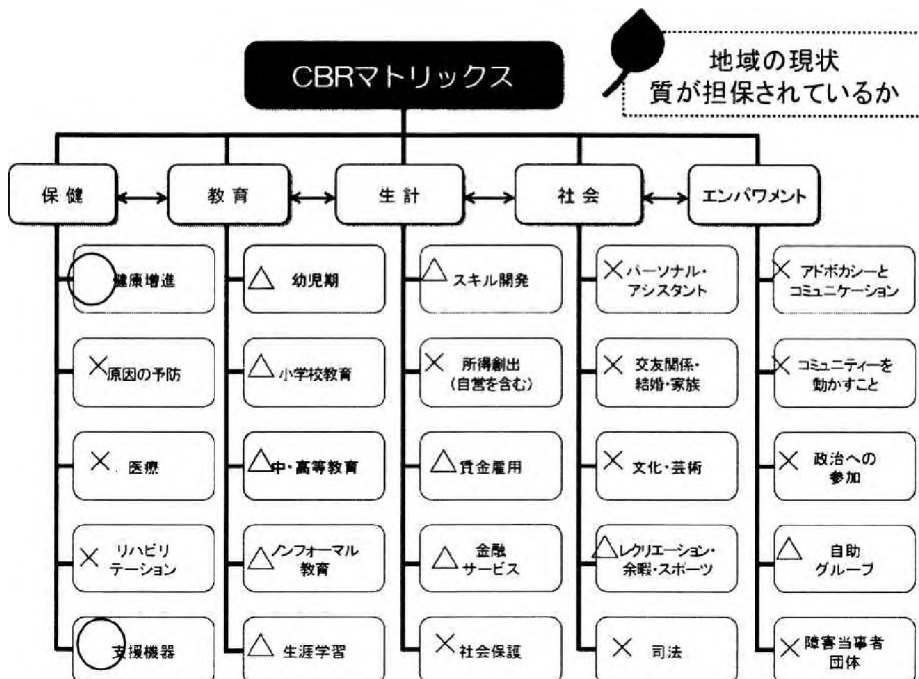
1. マトリックスの要素は誰に対しても機会が開かれていますか？

○：開かれている △：どちらとも言えない ×：開かれていない



2. マトリックスの要素の質を評価してみましょう。

○：高い △：どちらとも言えない ×：低い

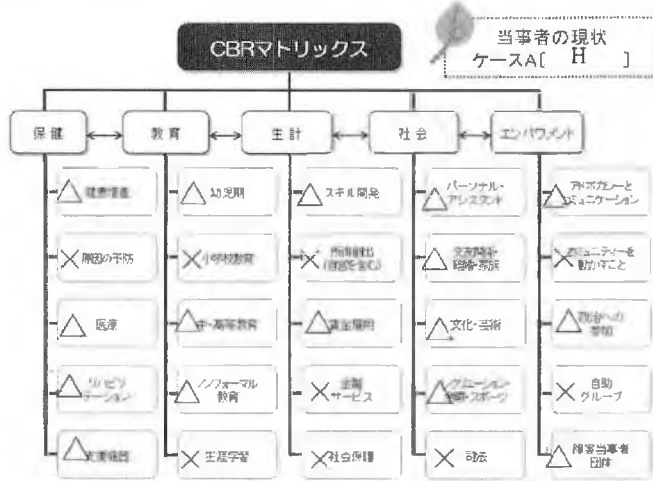


Step⑤ マトリックスで見る個人のおかれている現状

1. 当事者にとって要素が充足しているかどうかを個別に評価しましょう(3ケース)。

○ : 充足 △ : どちらとも言えない × : 不足

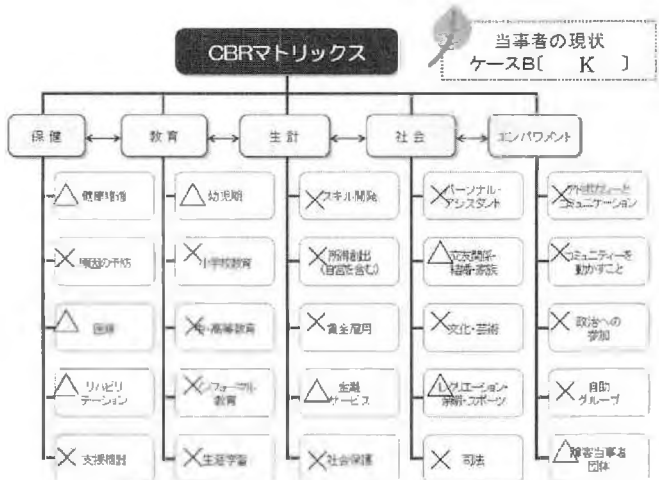
2. マトリックスの右に当事者と評価について説明してください。



H・S 20代女性 統合失調症

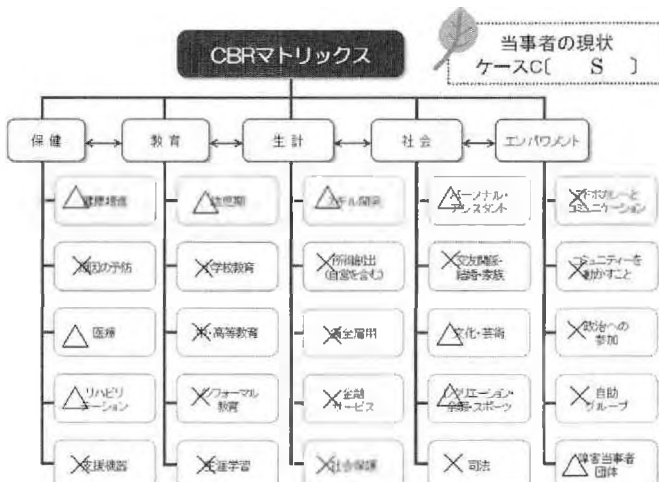
通信制高校生。

保健・教育・エンパワメントは比較的できているが、生計・社会は不十分家族・支援機関以外のつながりはほぼない状態。



K・S 30代男性 統合失調症

精神科への入退院を繰り返し、その後一人暮らし。現在は、通院しつつ、地域活動支援、就労継続B、ヘルパーなど福祉制度を活用している。



S 60代男性 統合失調症

様々な支援機関とトラブルが続く保健所からの紹介で来所。就労意欲が高いものの、被害妄想が強く対人関係が不安定になりやすい。

Step⑥ コミュニティの好ましい未来のビジョン

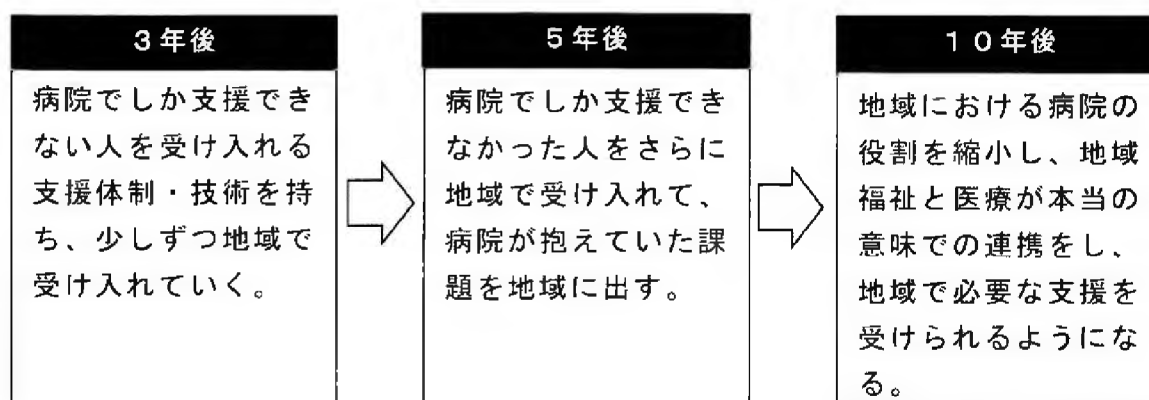
1. 好ましいコミュニティの未来のビジョンを書きましょう（3年後、5年後、10年後）。
2. 書き出したビジョンを重要度で順位付け（1～4）しましょう。

| No. | 3年後のビジョン | 重要度 |
|-----|-----------------------------|-----|
| 1 | 精神疾患を持つ方の地域支援技術・体制を充実させる | 1 |
| 2 | 訪問支援をできる体制と人材の育成 | 2 |
| 3 | 住居系支援を準備する | 3 |
| 4 | 少しずつ病院でしか支援できなかった人を地域で受け入れる | 4 |

| No. | 5年後のビジョン | 重要度 |
|-----|----------------------------|-----|
| 1 | 病院でしか支援できなかった人をもっと地域で受け入れる | 1 |
| 2 | 病院に押し付けられていた課題を地域に出す | 2 |
| 3 | 地域の人に、課題認識してもらい共に取り組んでもらう | 3 |
| 4 | 地域の支援体制をより強化する | 4 |

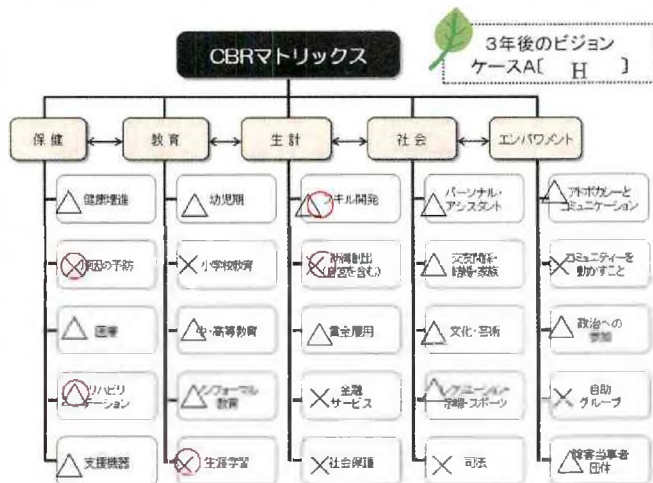
| No. | 10年後のビジョン | 重要度 |
|-----|----------------------------|-----|
| 1 | 肥大化した精神病院の役割を縮小する | 1 |
| 2 | 地域の役割、精神病院の役割のバランスを図る | 2 |
| 3 | 地域福祉と精神病院が本当の意味で連携をする | 3 |
| 4 | できるだけ地域で必要な医療福祉を受けられるようになる | 4 |

3. 書き出したビジョンをまとめましょう。



Step⑦ 個人の好ましい未来のビジョンとステップ

1. 当事者の3年後にどの要素が充足しているかを描きましょう。
現状を記したマトリックスに上書きする形で、赤色で○を付けます。
2. どの順番で充足を図っていくかをマトリックスの右に書きましょう。



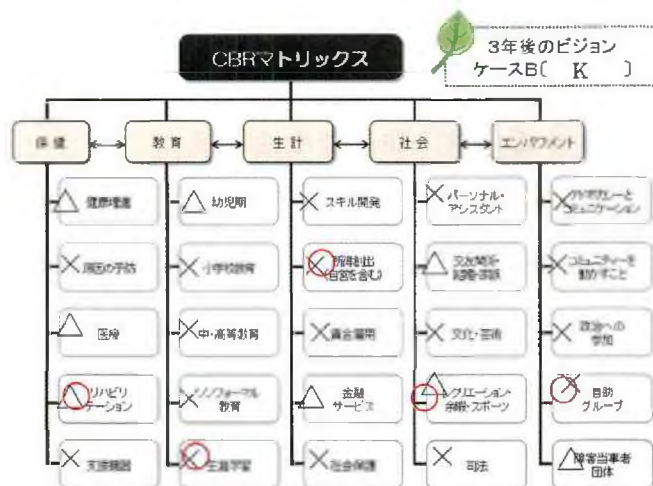
1. 原因の予防

2. リハビリ

3. 生涯学習

4. スキル開発

5. 所得創出



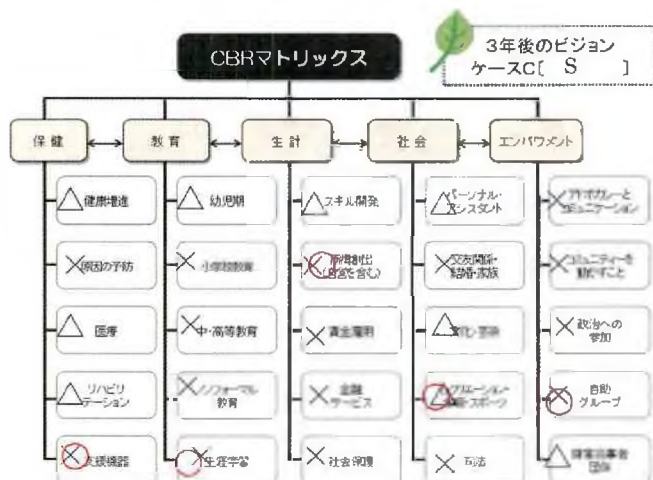
1. リハビリ

2. 生涯学習

3. 所得創出

4. 自助グループ

5. レクリエーション



1. リハビリ

2. 生涯学習

3. 所得創出

4. レクリエーション

5. 自助グループ

Step⑧ インクルーシブの方法

1. コミュニティに活かせるような当事者の能力（特性）、地域資源、当事者の切実なニーズを書き出しましょう。
2. 当事者の能力（特性）や地域資源を活かしたり、当事者の切実なニーズに応えることができる、拠点での活動アイデア、社会資源や住民等のコーディネートイメージ、アウトリーチのメニュー等を考えましょう。
3. 収益を得ながら継続的にビジネスとしてできること、プロジェクトとして補助金、寄付、ボランティア等を活用してできること、教育として取り組むべきこと等、実践できそうなアイデアを絞り込みましょう。

| 人（当事者の能力） | 地域資源 | ニーズ |
|---|--|--|
| 独自の体験（病的体験） 個性的な発想力 精神医療の経験者 偏見を改善する能力 ピアサポート | 研修会 ピアサポーター 直接交流の機会 メンタルヘルス教育 | 存在意義を感じたい 自分の経験を活かしたい 地域で役割を持ちたい 人とふれあいたい |



| 拠点 | コーディネート | アウトリーチ |
|---|--|---------|
| 就労継続支援 B 型 各地でのイベント開催 研修会・後援会への派遣 | 当事者の体験に価値を見出してくれる団体・人を見つけてつながりを増やしていく。 | 訪問型生活訓練 |



| ビジネス | プロジェクト |
|--|--|
| 就労継続支援 B 型 コミュニティカフェの運営 各種イベントへの講師派遣 各種サークル活動の管理運営 イベントスペースのレンタル | ○地域の人が交流できる場所を当事者が中心となって管理運営する提供する。 ○自分の体験を活かした活動を地域で展開していく機会を提供する。 |
| 教育 | その他 |
| 支援機関だけではなく、教育機関な市民公開講座などでメンタルヘルスについての知識を持ってもらったり、当事者が講演する機会を提供し、偏見を減らしていく。 | |

Step⑨ 事業/プロジェクト運営（財源とネットワーク）

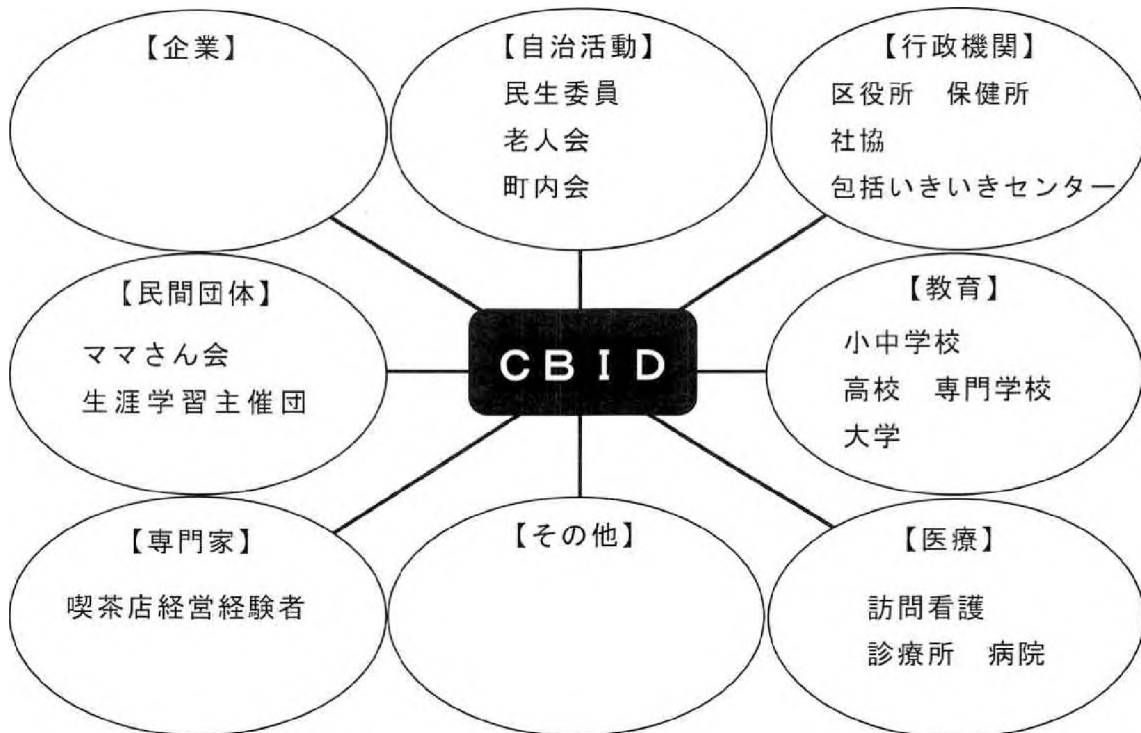
A. 財源の設計

1. 自主財源について、誰から、どうやって、いくら集めるかを考えましょう。
2. 公的な財源、民間の財源は具体的な財源の名称と金額を挙げましょう。

| 自主財源 | | |
|-------------------------|-----|-----|
| 売上 | 会費 | 寄付 |
| 喫茶店 アート作品販売 講師派遣料 | | |
| 公的な財源 | | |
| 制度 | 委託 | 補助 |
| 就労継続支援B型 | | |
| 民間の財源 | | |
| 助成 | 借入れ | その他 |
| | | |

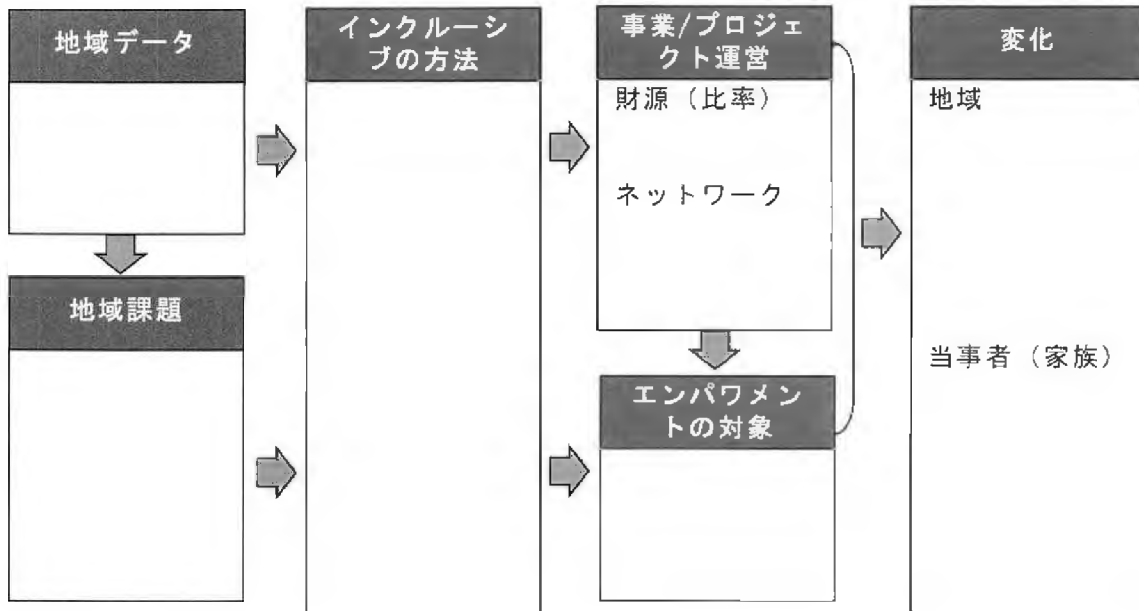
B. ネットワークの設計

1. 未来のビジョンを実現するために必要なネットワークを挙げていきましょう。
2. その中でも重要な関係先の前に●印をつけましょう。

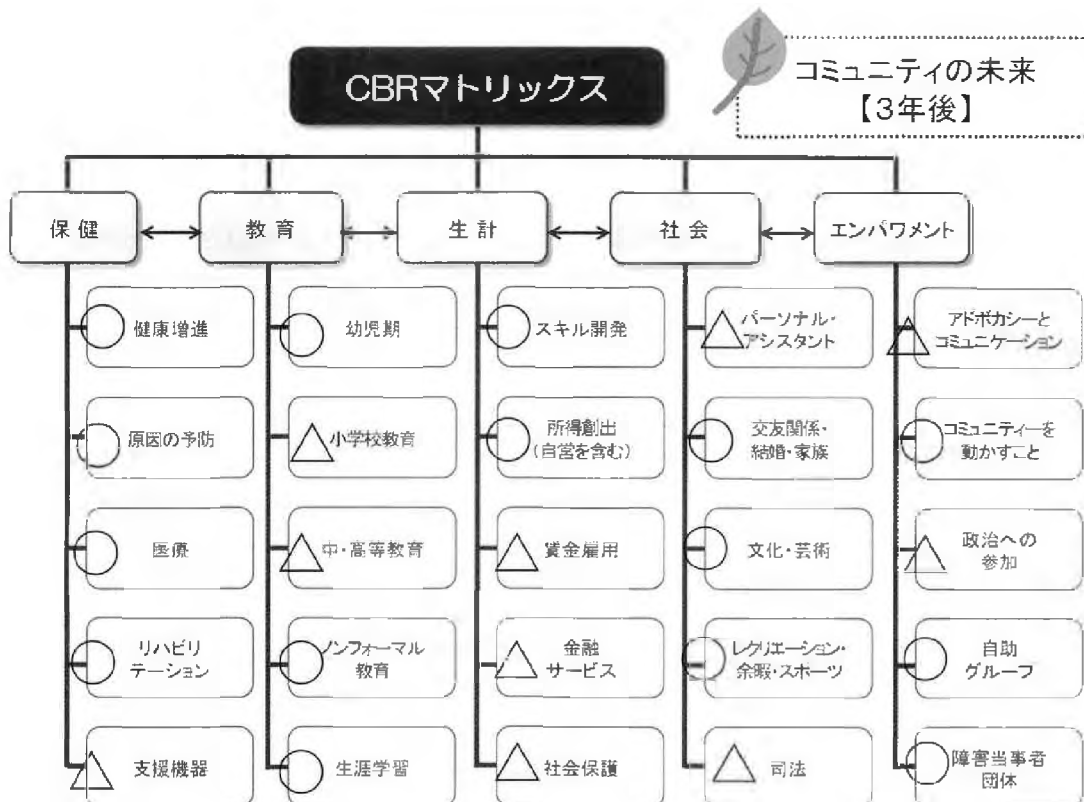


Step⑩ 事業/プロジェクトの全体像

1. これまでのワークの内容を下の図に簡潔にまとめましょう。



2. コミュニティの未来が3年後どのように変化しているかを、マトリックスに表しましょう。 ⇒ ○: 誰にも機会が開かれ、質も確保されている △: あと少しで充足



CBIDを実践するためのワークシート

このワークシート集は、CBID を実践するためのプランニングツールです。
プランニングは 10 の STEP から構成されています。

最初は 1 人で記入してみましょう！

次に仲間や同僚と一緒に考えましょう！

そして、その次は関係当事者（ステークホルダー）を集めて考えましょう！

次のページから未来が始まります！

Step① 地域の概要と課題

Step② 理念・目的

Step③ コミュニティの現状

Step④ マトリックスで見るコミュニティの現状

Step⑤ マトリックスで見る個人のおかれている現状

Step⑥ コミュニティの好ましい未来のビジョン

Step⑦ 個人の好ましい未来のビジョンとステップ

Step⑧ インクルーシブの方法

Step⑨ 事業/プロジェクト運営（財源とネットワーク）

Step⑩ 事業/プロジェクトの全体像

Step① 地域の概要と課題

A. 地域データ

| 人口 | 産業 | 特色 |
|--|---|--|
| <p>■人口：26,819人 高齢者人口：7,727人 年少人口：3,161人 生産年齢人口：15,988人 高齢化率約30%県平均より上 1世帯当たり 3.1人 核家族化傾向 ◇障害者人口 障害者手帳所持者数 ■身体：1,249人 ■療育：175人 ■精神：68人 対総人口比：5.6%</p> | <p>農業（米、ジャンボ西瓜、チューリップ、桃、など） 水産業（漁港あり） 上質の水資源（湧水、海洋深層水）を活用した企業誘致 豊富な農水産物資源の「入善町ブランド化」による特産品の製造販売</p> <p>■産業別人口 第1次産業 9.5% 減少傾向 第2次産業 43% 減少傾向 第3次産業 48% 増加傾向</p> | <p>入善町は、清流黒部川が作りあげた扇状地に広がる、水の恵みにあふれる自然豊かなまちです。</p> <p>湧水、海洋深層水、チューリップ、ジャンボ西瓜など特産ブランドも有名です。</p> <p>また町の良さを発信するキャッチフレーズを、「じゅわ〜っとにゆうぜん」として、皆さんにしみわたる町を目指しています。</p> <p>市町村合併は行わず、古くから変わらないコミュニティーや独自性が残っています。</p> <p>産業としては、農業分野全体での収入は減っているものの専業農家が独自色を発揮し、町もいち早く6次産業化を推進しています。</p> <p>この2年は深層水養殖の牡蠣が県内外から注目を集めています。</p> <p>近年は質の良い水資源を活かした企業誘致も活発です。</p> <p>一方、商店街の空洞化などがみられます。</p> <p>町の情勢としては人口の減少が続き、高齢化率が県平均を越えています。</p> <p>町施策として婚活、子育て支援に力を入れています。成果は上がっていません。</p> |

B. 地域の課題

1. キーワードを参考にしながら、地域の課題を書きだしましょう。
2. 独自にキーワードをあげて、課題を書きだしましょう。
3. 重大な課題のキーワードを○で囲みましょう。

| キーワード | 課題 | キーワード | 課題 |
|-------|--|-------|--|
| 経済 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 農業衰退、担い手不足 ・ 農商工連携、 6次産業化推進 ・ 商店街の衰退、担い手不足、 空き店舗活用 ・ 特産品、地域ブランド品の 創造、販売 ・ 自然資源は豊富だが、観光 施設、宿泊施設が少ない | 高齢者 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 少子高齢化、高い高齢化 率、独居老人増加 ・ 公共交通機関不便、買い物 難民増 |
| 教育 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 人材育成機関、機能がない ・ 福祉教育不十分 | 障害者 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 障害者数に対するサービス 事業所数、種別・選択肢少ない ・ 障がい者の居住不足、親亡 き後問題が深刻 ・ 障害者就職率、定着率低い ・ 居宅サービス、移動サービ ス事業の不足、従事者不足 ・ 障がい児の環境において、教 育や保健分野と福祉の溝がある ・ 福祉現場の担い手人材不足 ・ 公共交通機関不便、買い物 難民増 |
| 環境 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 自然資源は豊富だが、観光 施設、宿泊施設が少ない | 患者 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 医療、リハビリ、 福祉施設不足 |
| 食 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 自然資源は豊富だが、観光 施設、宿泊施設が少ない | 若者 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 飲食店、レジャー施設の減 少 ・ 町を離れる傾向 ・ 福祉現場の担い手人材不足 ・ 農業衰退、担い手不足 ・ 商店街の衰退、担い手不足 |
| 子育て | <ul style="list-style-type: none"> ・ 障がい児の環境において、 教育や保健分野と福祉の溝が ある | 子ども | <ul style="list-style-type: none"> ・ 医療施設、福祉施設不足 |

| | | | |
|------|---|-------|-------------------------------------|
| | ・保育所統合進む | | |
| 福祉 | ・医療施設、福祉施設不足 ・教育、保健分野との連携不足 | 子育てママ | |
| 文化 | ・地域伝統行事の伝承 | 会社員 | |
| 交流 | ・飲食店、レジャー施設の減少 | 自営業者 | ・農業衰退、担い手不足 ・商店街の衰退、担い手不足、空き店舗活用 |
| 企業 | ・飲食店、レジャー施設の減少 | 外国人 | |
| NPO | ・障害者数に対するサービス事業所数が少ない ・多様性のあるNPO活動が少ない ・公共交通機関不便、買い物難民増 | | |
| 行政 | ・人口減少、少子高齢化、高い高齢化率 ・大規模自然災害への備え、地域防災 ・農商工連携の推進、6次産業化支援 ・特産品、地域ブランド品の創造、販売 ・交通機関不足 | | |
| 自治組織 | ・大規模自然災害への備え、地域防災 ・地域伝統行事の伝承 ・子育てサポート | | |
| 家族 | ・人口減少、少子高齢化、高い高齢化率、核家族化 | | |

Step② 理念・目的

1. どのような地域を実現するためにCBI Dを実践しますか？
「〇〇な地域の実現を目指します」という文章を10個書き出しましょう。
2. 書き出した10個の文章を何度も繰り返し読み返し、より大切にしたいと感じた文を5つ選び、選択の欄に〇つけましょう。

| No. | 実現したい地域 | 選択 |
|-----|---|----|
| 1 | 多様性のある障害福祉サービスが充実した地域の実現を目指します | ○ |
| 2 | 企業などが障がい者を雇用しやすい環境づくりがなされた地域の実現を目指します | |
| 3 | 障がい者の居住や収入が確保された自立生活ができる地域の実現を目指します | ○ |
| 4 | 入善町から出ていかななくても良い地域の実現を目指します | ○ |
| 5 | 住民みんなで支えあう地域の実現を目指します | |
| 6 | 地元で育てられてきた食材を新しいものに活かした食の循環がなされる地域の実現を目指します | |
| 7 | 企業連携による新規循環型となる地域の実現を目指します | ○ |
| 8 | 人材育成と福祉教育への取り組みが充実した地域の実現を目指します | |
| 9 | 障がい児理解と専門機関との連携がしっかりとれる地域の実現を目指します | ○ |
| 10 | 若者が積極的に福祉に参加できる地域を目指します | |



3. 〇を付けた5つの文を3つの文に集約しましょう。
4. 最終的に一番大切にしたいと感じた文を1つ選び、選択の欄に〇をつけましょう。

| No. | 実現したい地域 | 選択 |
|-----|---|----|
| I | 真に多様性のある障害福祉サービスを充実させることで、障がい者が年を重ねても、入善町から出ていかななくても良い地域の実現を目指します | ○ |
| II | 福祉の視点にこだわらず、企業連携による新規循環型事業を展開し、障がい者が居住と収入が確保された自立生活を送ることができる地域の実現を目指します | |
| III | より早い発育段階からの障がい児への療育支援体制を整え、専門機関がつながり合うことで、楽しく子育てができる地域の実現を目指します | |



5. 選択した文をベースに、3つの文を1つに集約しましょう。

| 理 念 |
|---|
| 障害を受け入れて、入善町で連携した療育支援を受けながら成長することができ、大人になっても自立して暮らし続けることができる地域づくり |

Step③ コミュニティの現状

A. 理念からみて「好ましくない」コミュニティの現状

1. 理念からみて「好ましくない」と感じるコミュニティの現状を書き出しましょう。
2. 書き出した現状は理念からみた時にどれくらい深刻でしょうか？
●：かなり深刻 ○：深刻 △：やや深刻

| No. | 理念からみて『好ましくない』コミュニティの現状 | 深刻度 |
|-----|---|-----|
| 1 | 障がい児の専門機関の連携ができておらず、子育ての相談がしにくい | ● |
| 2 | 親の相談する場所が少なく、学童の受け入れや保育所とのつながりがうまくいかず、障がい児が生活しにくい | ● |
| 3 | 障がい児が就学する時に悩む | ● |
| 4 | 地域の障害福祉サービス事業所が少なく、利用希望者があふれている | ○ |
| 5 | 家族の持家は、障がい者にとって暮らしにくい | △ |
| 6 | 障がい者の自立するチャンスが地域資源の中に少ない | ○ |
| 7 | 地域の自然資源、文化、歴史を生かした素材が多いのに新しい商品、産業が生み出せない | ○ |
| 8 | 企業の障がい者雇用が進まない | △ |

B. 理念からみて「好ましい」コミュニティの現状

1. 理念からみて「好ましい」と感じるコミュニティの現状を書き出しましょう。
2. 書き出した現状は理念からみた時にどれくらい期待できるでしょうか？
●：かなり期待 ○：期待 △：やや期待

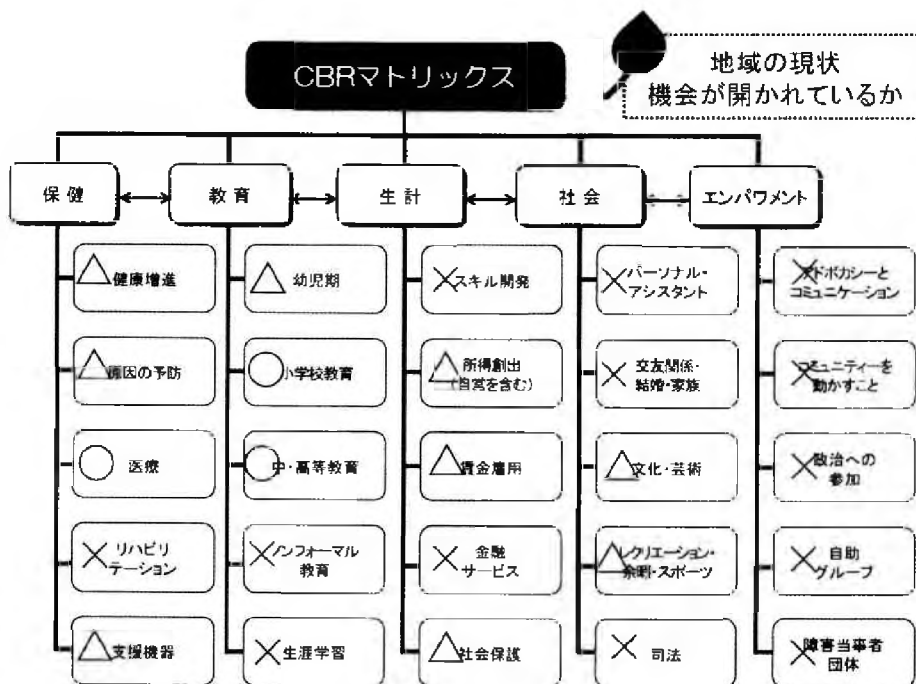
| No. | 理念からみて『好ましい』コミュニティの現状 | 期待度 |
|-----|---------------------------------|-----|
| 1 | 未就学の障がい児に対する支援サービス事業が生まれたこと | ○ |
| 2 | 保健分野の子育て相談に障害福祉サービス事業所が関与し始めたこと | ● |

| | | |
|---|--------------------------------|---|
| 3 | 行政が主導し、地域産業の連携事業に福祉分野をからめてくれる | ○ |
| 4 | 空き家など未活用の物件や土地が多い | ● |
| 5 | 入善町には自然資源を生かした特産物がたくさんある | ● |
| 6 | 入善町には大企業支社、多種の中小企業、専業農家など企業が多い | ○ |
| 7 | 入善町は合併無しの単独行政のため独自性が強い | ● |
| 8 | 地域住民同士が身近で、人と顔が繋がっている | ● |

Step④ マトリックスで見るコミュニティの現状

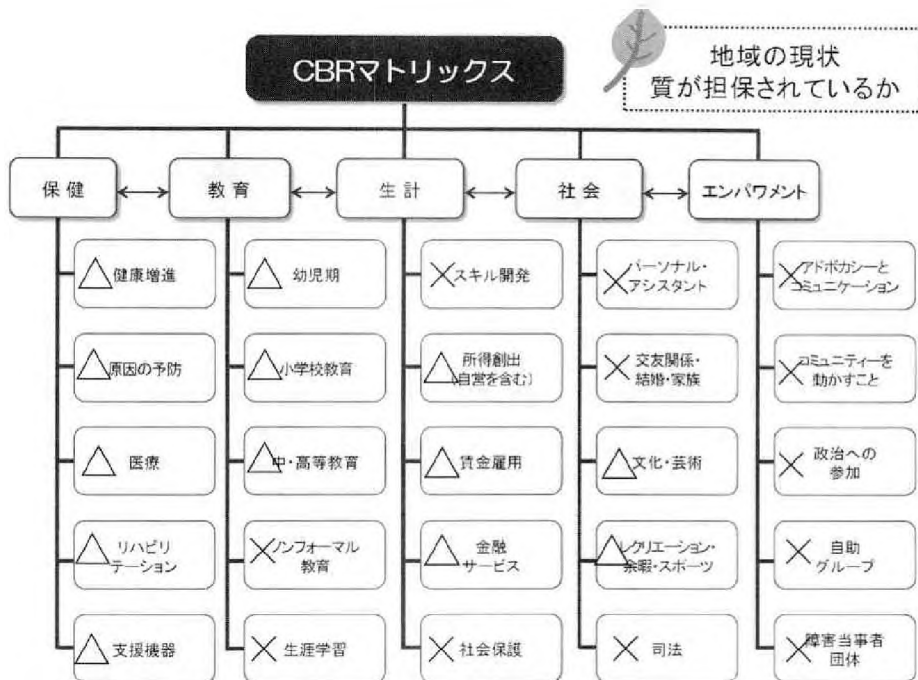
1. マトリックスの要素は誰に対しても機会が開かれていますか？

○：開かれている △：どちらとも言えない ×：開かれていない



2. マトリックスの要素の質を評価してみましょう。

○：高い △：どちらとも言えない ×：低い



Step⑤ マトリックスで見る個人のおかれている現状

1. 当事者にとって要素が充足しているかどうかを個別に評価しましょう(3ケース)。

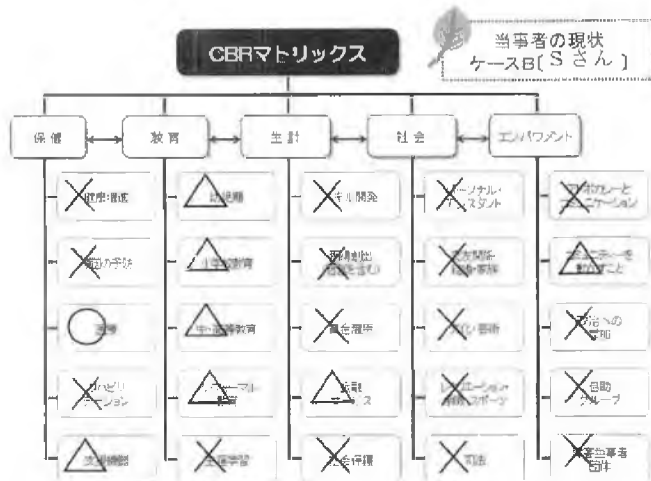
○：充足 △：どちらとも言えない ×：不足

2. マトリックスの右に当事者と評価について説明してください。

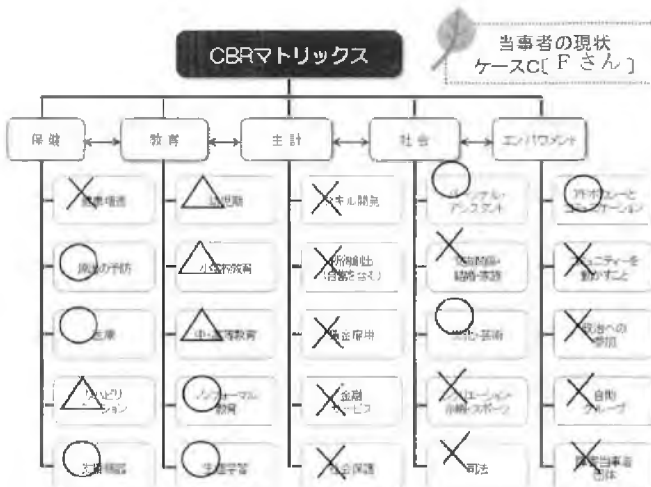
CBRマトリックス 当事者の現状
ケースA(Mさん)

| 保健 | 教育 | 生計 | 社会 | エンパワメント |
|------------|------------|--------------|-------------------|-------------------|
| △健康増進 | ×幼児期 | ×スキル開発 | △パーソナル・アシスタント | ×アドボカシーとコミュニケーション |
| ×原因の予防 | △小学校教育 | ×所得創出(自営を含む) | ×交友関係・結婚・家族 | ×コミュニティを動かすこと |
| ×医療 | △中・高等教育 | ×資金雇用 | △文化・芸術 | △政治への参加 |
| △リハビリテーション | ×インフォーマル教育 | ○金融サービス | ×レクリエーション・娯楽・スポーツ | ×自助グループ |
| △支援機器 | ×生涯学習 | ×社会保護 | △司法 | ×障害当事者団体 |

離婚して、県外在住から本人の実家がある富山県に移転。
現在無職であり、2人の子供がいる。
公団住宅に住む。出来れば両親に頼りたくない。自分でなんとかして子供を育てたい。2人は発達障害の傾向。母は精神科に通院。生活に悩んでいるが、解決策が見つからない。



救急搬送から2年間の精神科入院を経て、自宅に戻る。両親は死去。頼れる肉親は兄のみで、県外在住。生活保護を受給しておらず、兄の援助を基本に、障害福祉サービスを受けながら、なんとか自分で生活を確立するところまで取り戻したい。



身体障害で車椅子生活。入所施設から退所して12年が経過。訪問サービスを使いながら、同じく身体障害者の同居者の援助と共に生活を維持。障害状況の進行を自覚しているが、死ぬまで入善町で暮らし続けたい。なんとか1人で生活を確立する方法を見つめたい。

Step⑥ コミュニティの好ましい未来のビジョン

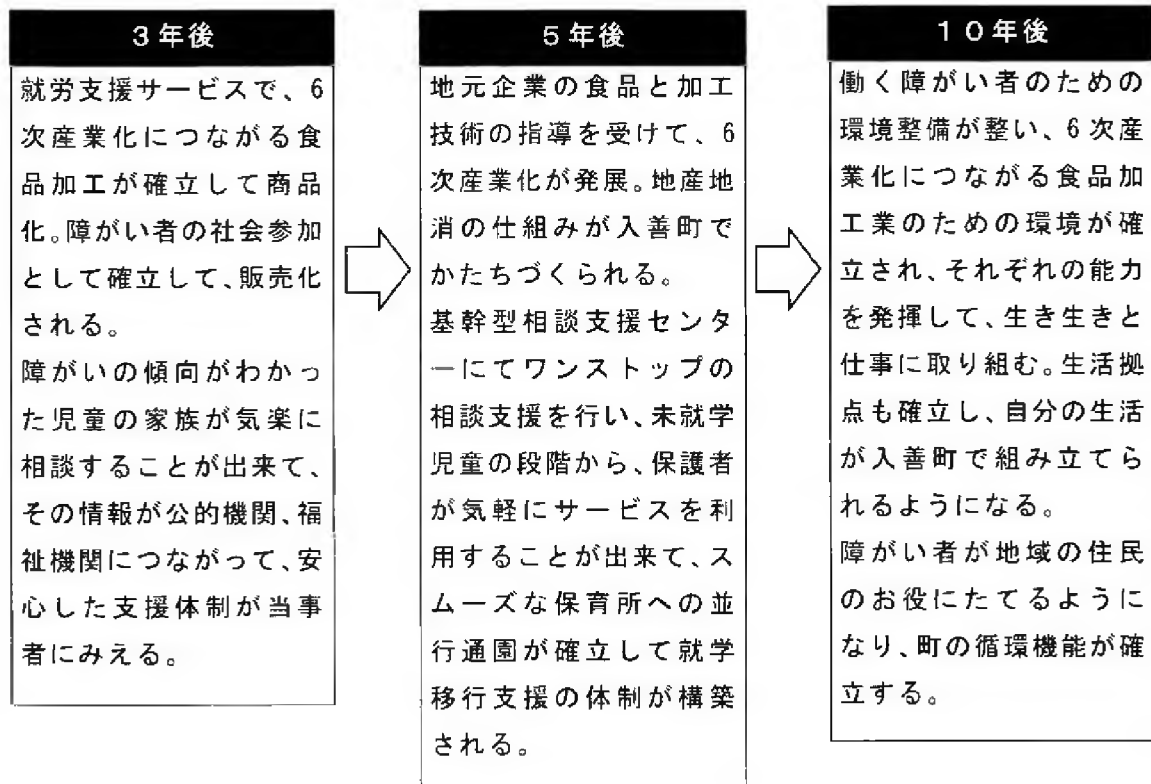
1. 好ましいコミュニティの未来のビジョンを書きましょう（3年後、5年後、10年後）。
2. 書き出したビジョンを重要度で順位付け（1～4）しましょう。

| No. | 3年後のビジョン | 重要度 |
|-----|--|-----|
| 1 | 入善町の特産を活かして、新しい商品が販売される | 4 |
| 2 | 障がい者の生活拠点ができ、その方の財産整理ができる | 4 |
| 3 | 障がい児支援サービスと公的機関との併用で障がい児の保護者が明るく子育てできる | 3 |
| 4 | 保育所で障がい児がすこやかに育っていく | 2 |

| No. | 5年後のビジョン | 重要度 |
|-----|-------------------------------|-----|
| 1 | 基幹型相談支援センターができて相談窓口がひとつになる | 3 |
| 2 | 児童発達支援事業が確立され、保育所との併用がスムーズになる | 4 |
| 3 | 障がい児の生活拠点が入善町に3か所増える | 4 |
| 4 | 地元企業との連携で、新しい商品を障がい者がつくる | 4 |

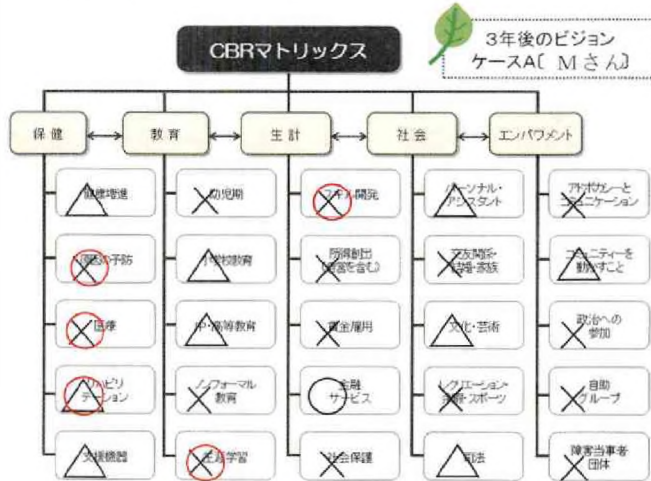
| No. | 10年後のビジョン | 重要度 |
|-----|---------------------------------|-----|
| 1 | 企業との連携で、障害福祉サービスとの合併企業ができる | 3 |
| 2 | 障害福祉サービスの組立で、障がい者の暮らしのサポートが確立する | 4 |
| 3 | 障がい者が働く事業所が入善町のなかで必要とされる場所になる | 4 |
| 4 | ワンストップのしくみが確立し、関係機関との連携がスムーズになる | 4 |

3. 書き出したビジョンをまとめましょう。



Step⑦ 個人の好ましい未来のビジョンとステップ

1. 当事者の3年後にどの要素が充足しているかを描きましょう。
現状を記したマトリックスに上書きする形で、赤色で○を付けます。
2. どの順番で充足を図っていくかをマトリックスの右に書きましょう。



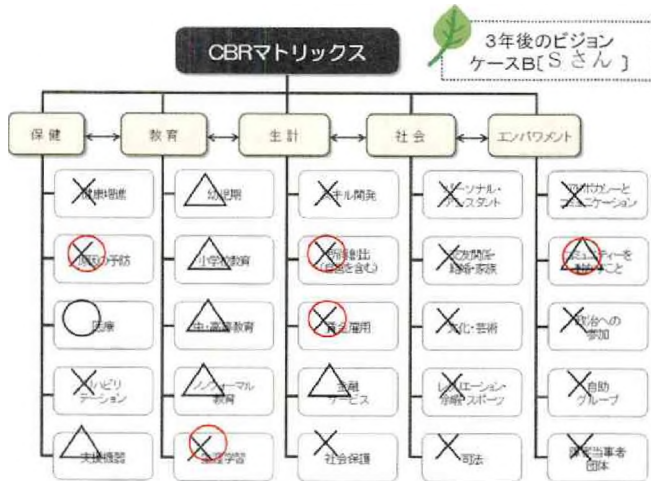
1. 原因の予防

2. スキル開発

3. 医療

4. リハビリテーション

5. 生涯学習



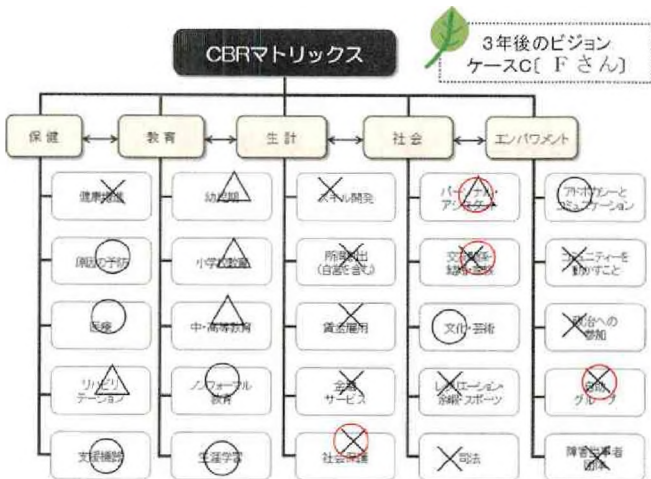
1. 原因の予防

2. 所得創出

3. 資金雇用

4. 生涯学習

5. コミュニティを動かすこと



1. 社会保護

2. パーソナルアシスタント

3. 交友関係

4. 自助グループ

5. 健康増進

1. コミュニティに活かせるような当事者の能力（特性）、地域資源、当事者の切実なニーズを書き出しましょう。
2. 当事者の能力（特性）や地域資源を活かしたり、当事者の切実なニーズに応えることができる、拠点での活動アイデア、社会資源や住民等のコーディネートイメージ、アウトリーチのメニュー等を考えましょう。
3. 収益を得ながら継続的にビジネスとしてできること、プロジェクトとして補助金、寄付、ボランティア等を活用してできること、教育として取り組むべきこと等、実践できそうなアイデアを絞り込みましょう。

| 人（当事者の能力） | 地域資源 | ニーズ |
|---|---|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ・自分で考え、判断することが出来る（F） ・将来の可能性がある（S） ・住むことが出来る家がある（SF） ・本人に覚悟がある（F） ・スケジュールに沿って暮らしている（S） ・相談者に発信できている（MSF） | <ul style="list-style-type: none"> ・学童 ・相談支援機関 ・放課後等デイサービス ・保育所等訪問支援 ・就労継続支援(A,B)事業 ・児童相談所 ・土地の安さ ・空き家が多い ・県立高校 ・水資源、米など特産物 ・地域住民のサポート | <ul style="list-style-type: none"> ・お金が欲しい（S） ・子どもたちを私がしっかり育てたい（M） ・安心して死ぬまで入善で暮らしたい（F） |



| 拠点 | コーディネート | アウトリーチ |
|--|--|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ・障害福祉サービス事業所工房あおの丘 ・障害者グループホーム(GH)に併設して、母子世帯専用、学生アパート ・障害者就労事業所（地域に還元する内容） ・入善食堂 ・合同会社善商 | <ul style="list-style-type: none"> ・居住している母子、学生は障がい者ヘルパーとして登録し、GHの障がい者の生活支援に従事し、それによって収入を得る ・単なる居住スペースではなく、地域交流スペース、就労支援スペースの機能を組み合わせる ・高卒者の就業に繋げる ・障がい児の親の会などとの関係を深め、早期に情報を得られるよう定期的な交流を図る。 | <ul style="list-style-type: none"> ・ヘルパー講習 ・高等学校での交流講座の開催 ・子育て相談会の開催 ・GHの居住者が、地区の行事に参加することが出来るようになる |



| ビジネス | プロジェクト |
|---|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ・グループホーム運営 ・就労支援事業（配食サービス） ・居宅介護サービス ・ヘルパー講習 | <ul style="list-style-type: none"> ・高校生への福祉職場説明会開催、実習受入 |
| 教育 | その他 |
| <ul style="list-style-type: none"> ・ヘルパー講習 | |

Step⑨ 事業/プロジェクト運営（財源とネットワーク）

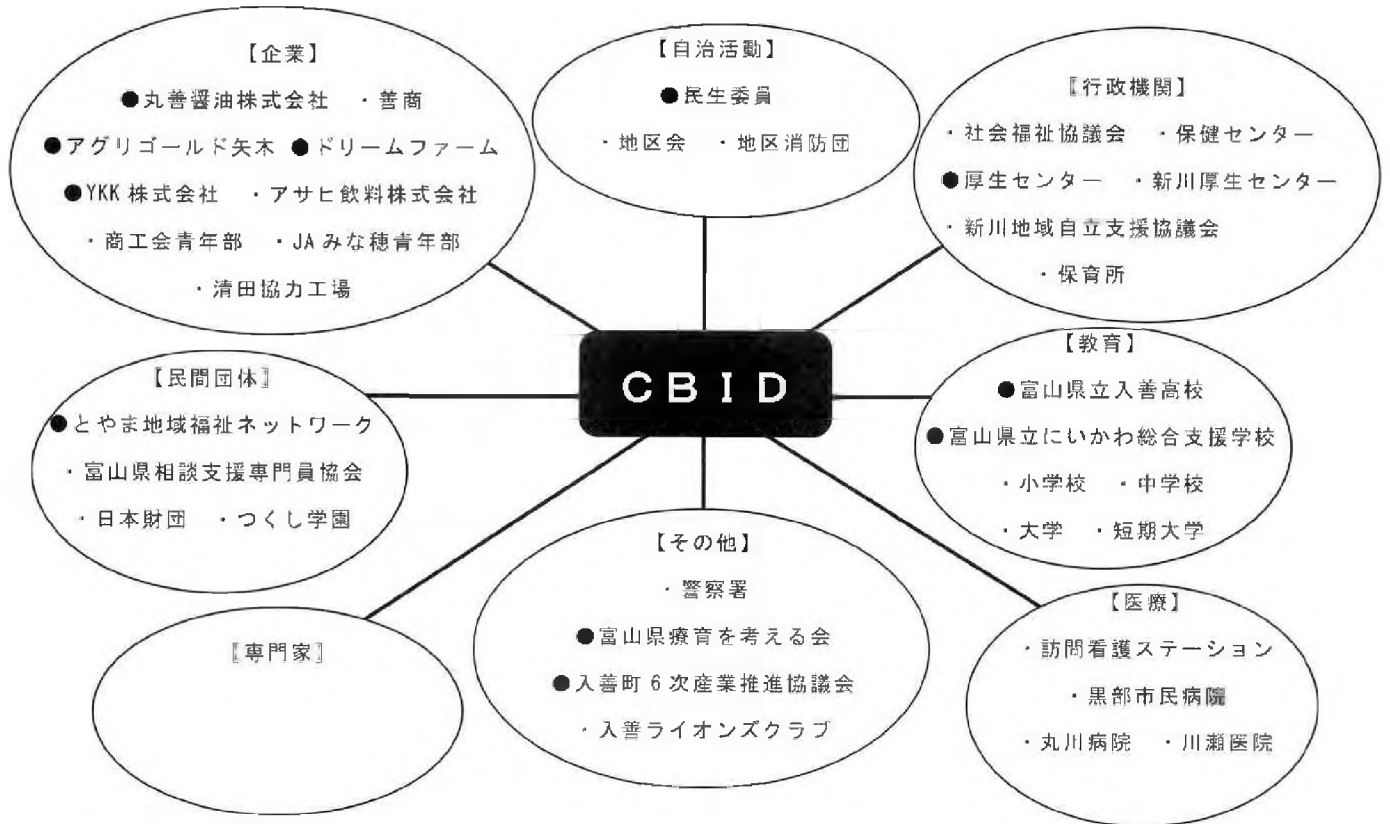
A. 財源の設計

1. 自主財源について、誰から、どうやって、いくら集めるかを考えましょう。
2. 公的な財源、民間の財源は具体的な財源の名称と金額を挙げましょう。

| 自主財源 | | |
|---|--|-----|
| 売上 | 会費 | 寄付 |
| <ul style="list-style-type: none"> ・配食事業 18,600,000 円/年 GH家賃・食費収入 5,760,000 円/年（@60,000 × 8 人 × 12 カ月） | | |
| 公的な財源 | | |
| 制度 | 委託 | 補助 |
| <ul style="list-style-type: none"> ・ヘルパー事業 5,400,000 円/年（@5,000 × 90 時間 × 12 カ月） ・グループホーム事業 14,400,000 円/年（@150,000 × 8 人 × 12 カ月） ・就労支援事業 9,000,000 円/年（@150,000 × 5 人 × 12 カ月） | <ul style="list-style-type: none"> ・ヘルパー講習委託費 150,000 円/年 | |
| 民間の財源 | | |
| 助成 | 借入れ | その他 |
| <ul style="list-style-type: none"> ・日本財団 5,000,000 円（備品整備） | | |

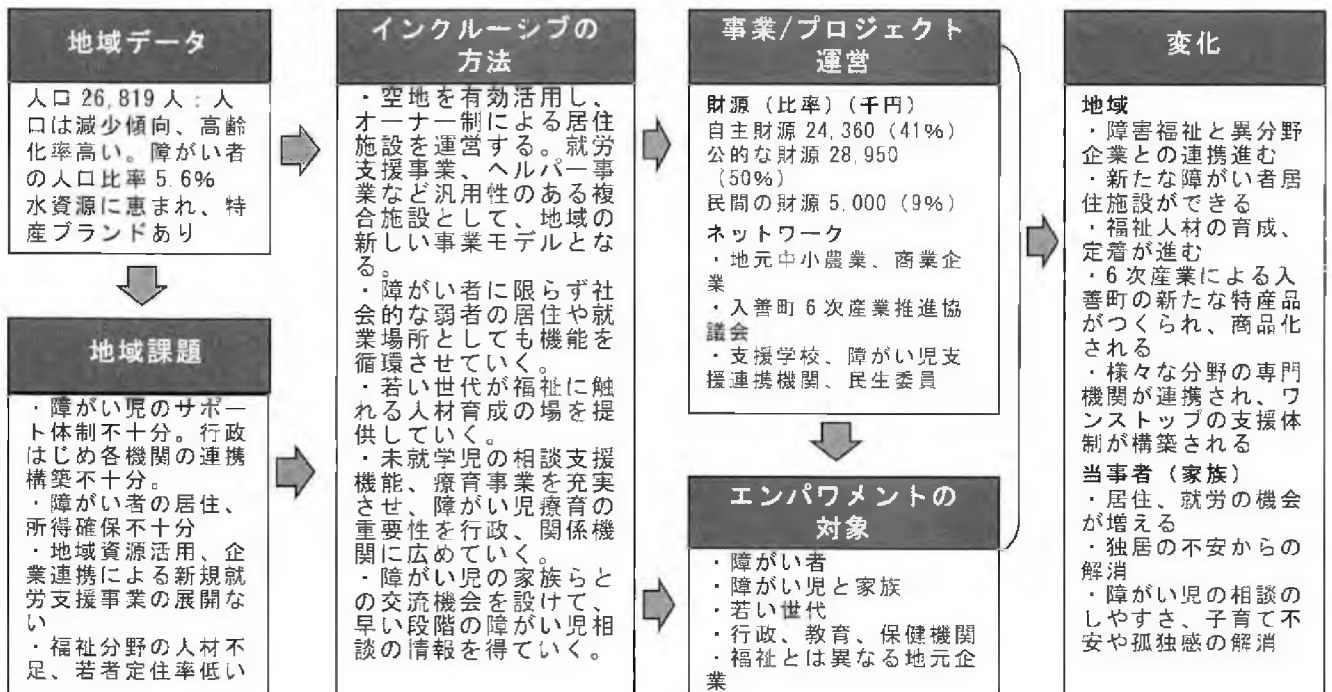
B. ネットワークの設計

1. 未来のビジョンを実現するために必要なネットワークを挙げていきましょう。
2. その中でも重要な関係先の前に●印をつけましょう。

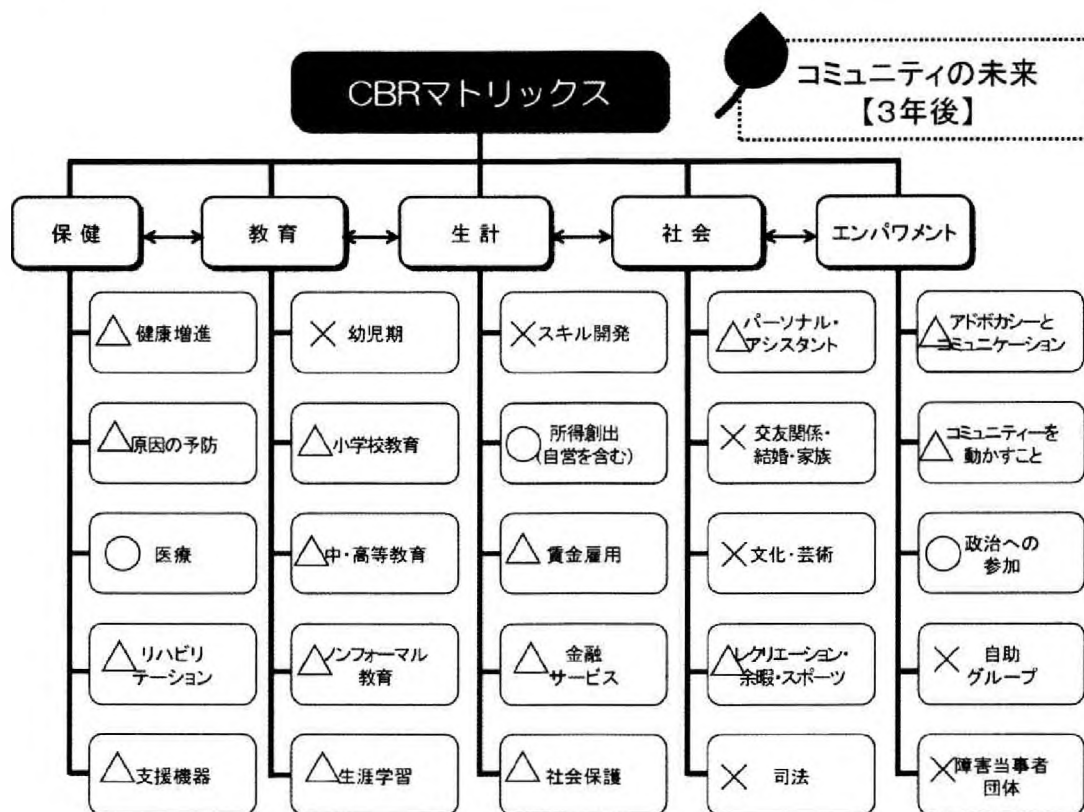


Step⑩ 事業/プロジェクトの全体像

1. これまでのワークの内容を下の図に簡潔にまとめましょう。



2. コミュニティの未来が3年後どのように変化しているかを、マトリックスに表しましょう。 ⇒ ○：誰にも機会が開かれ、質も確保されている △：あと少しで充足



5-3 ワークショップ実施

5-3-1 ワークショップ実施（松本市新村（にいむら）地区）

報告者：尻無浜 博幸（松本大学総合経営学部観光ホスピタリティ学科 教授）

発表者：松本 尚子（松本大学地域総合研究センター特別調査研究員）

一色 美月（松本大学地域総合研究センター特別調査研究員）

（1）現状と課題、目標

様々な社会的課題や制度の運用において、「行政」「支援団体（専門機関）」「地域住民」の3つのファクターの各々の役割、3者の連携などそのあり方が重要との認識は議論の余地はない。比較的社会制度が充実してくるとまず「行政」のあり方、また「支援団体（専門機関）」の役割は明確になる。しかし、その中において「地域住民」の協力が求められているにも関わらず、「地域住民」サイドにおいて問題解決の手法、エネルギー、ツール等持たない場合が多い。そこにおいて、CBRマトリックスを始めとするCBIDプログラム実践によるアプローチは、「地域住民」の手助けになると思っている。逆に「地域住民」レベルでのノウハウを忘れずにCBIDプログラム実践を根幹に置くべきであると考えます。

介護保険制度導入時期に全国的に「生活圏域」が示された。具体的には小学校区が一つの基礎圏域であったが、松本市では、その導入時以前から「地区」があった。松本市人口約24万を35地区に分け、昔からの伝統的社会の変遷を活かしながら松本独自の生活圏域が存在していた。例えば、近年進んだ合併の町村は、一つの地区としてそのまま存在する。地区の役員、地区毎の保健活動、民生委員の仕組みも残しつつ、また「ゆるやかな協議体」として各地区の事情に合わせた組織体制もある。

今回、本事業を試みた松本市新村地区もその一つであり、「あたらしの郷協議会」という地区の自治組織が整備されている。また、行政との橋渡しの役割として課長職級の地域づくりセンター長が配置されており地区と行政との調整を行っている。従って、どちらかと言えば「支援団体（専門機関）」の影が薄い状況にある。別の言い方をすれば、「地域住民」が「支援団体（専門機関）」の活用の方法が十分わからないケースが見られる。

以上の現状を踏まえて、目標1は、松本市新村地区の地域住民による、地域の問題解決の際に役に立つ手法を身につけることによって、住民の関わりの裾野を広げ、さらに共通言語をもって共有出来るようになること。目標2は、「地域住民」が「支援団体（専門機関）」と繋がり、社会制度によってアドバイスが受けられるなどその関係性が構築されることを目標にした。

松本市新村地区の地域住民を対象にした今回のモデル的実証事業は、地域住民が自分たちで出来る役割を果たそうとする際、本当にこのワークショップは有効に作用すると感じてもらえるよう期待をして取り組んだ。

（2）ワークショップへの具体的な声掛け方法

参加の声かけは、まず、地区のゆるやかな協議体である「あたらしの郷協議会」に話

しを持ちかけたところから始めた。事業の趣旨を説明して、その結果、新村地区の研修として実施する運びになった。具体的には新村地区連合町会長兼協議会長の新村氏、協議会の福祉部門長の野口氏と協議した。従ってワークショップの準備段階（スタート段階）からこの地区役員 2 名には参加してもらった。また、ワークショップの手法を広く理解してもらいたいとの観点から、松本市公民館主事、地域福祉を活発に展開している社会福祉協議会職員、地域の課題に積極的に関与している実績のある非営利団体に案内した。

松本市公民館主事に対しては、平成 26 年度から松本市で取り組んでいた公民館高齢者支援講座があった。この講座では、各地区の実践例を参考に実際の取組みに結びつけるための学びを積み上げてきていた。その過程の中で、住民の声を拾い上げる有効な手法を探していた。事前にこのようなニーズがあったため公民館主事の興味は当初より高かった。社会福祉協議会へは、近郊の全ての社協に声をかけたのではなく、平成 26 年介護保険法改正によって総合事業が示され生活支援事業の取組みが開示され、この事業に向け社協として実際に準備しているところが 3 つあり目的をもって参加してもらった。介護保険法に規定されている地域包括支援センターも同様であった。

非営利団体に対しては、生活困窮者自立支援法に関連する取組みをしている団体を中心に案内した。その理由は、困難事例を抱えているケースが多いからである。より多くの情報をキャッチでき、今まで想定していなかった社会資源の開発に繋がられる可能性があるかと判断したためである。

また、松本大学地域総合研究センターに 7 名の特別調査研究員が在籍している。松本市との協定により松本市地域づくりインターン生も兼ねており、研究員は、実際に受け持ちの担当地区（35 地区から 1 箇所）を持っている。各地区の公民館長、地域づくりセンター長、町会長、民生委員と一緒に地区の様々な行事、企画に携わっている。今回は、ワークショップの進めた方の習得、その後担当地区でのワークショップの実施を課題として参加した。またワークショップ当日は、7 名のうちから 2 名が進行役を務めた。1 名は新村地区に配属されている研究員でもあったため、地区役員とも普段から交流があり、地区における住民参加の声かけについても相談しやすくスムーズであった。先ほど記述したとおり、地区役員 2 名にはワークショップの準備段階（スタート段階）、すなわち、7 月の説明会、9 月のプレ研修にも参加、より深い理解をもって住民への声かけをサポートしていただいた。

（3）参加者

総数 37 名の参加でワークショップを行った。65 歳以上や高齢に近い年齢の地域住民の参加が多かった。参加者は大きく 3 つに括られる。

①地域住民 12 名

- ・福祉ひろばコーディネーター 2 名
- ・民生児童委員 1 名
- ・地区での地域振興や防犯などで役職を持った方 6 名
- ・役職はなしで興味を持った方 3 名

町会の会議でワークショップの案内を回覧してはどうかとの提案をもとに、地区内に回覧板で案内したところ、この3名が参加した。福祉ひろばは行政に位置づけられているが、地区住民が職員として業務を行っているので地区住民として分類した。

②専門職や行政職 16名

- ・行政や社会福祉協議会 11名
- ・地域包括支援センターの新村地区担当者 3名
- ・リハ協 2名

③民間 9名

- ・地域サロン実践者 1名
- ・松本大学 8名

(4) 事例作成のプロセス

事例作成の作業においては、以下、2つのアプローチをおこなった。

①準備段階から地区役員2名が参画していたことから、実際に新村地区でおきている事例を挙げてもらった。この作業は新村地区担当の研究員が調整役となって事例収集に務めた。

②特別調査研究員が普段担当する地区から事例を挙げることを試みた。1人の研究員が1~2つ持ち寄って、その後、全員で事例を共有してワークショップにふさわしい事例を選択した。

地区で実際に起きている事例では、高齢者に関係するものが多かった。また、研究員が集めた事例では、やはり、高齢者に関係する事例が多いものの事例の取り直しによって、子育てに関係する事例を集め、また、家族全般の生活苦の内容を収集した。準備の段階で一番時間を要した作業がこの事例作成であった。事例準備の際にワークショップ当日の役割をある程度想定して取り組んだため、事例の設定については、特別調査研究員2名(当日進行役)が主に準備した。

最終的にワークショップ当日用に準備した事例は以下のとおりである。

事例1：“安心して病院に通いたい”というおばあちゃんの悩み

(送迎ボランティアの活動があるが、交通について課題があるので選択)

事例2：ひとり親お母さんの“先が見えない…”という悩み

(事例集にあるものを地区版にしたもの。事例が高齢者に偏りやすいので、子育て世代や若い女性目線の内容を取り入れたいと事務局サイドで考えて作った。昔気質の考え方が残る地域なので、離婚、母子家庭、発達障害、学習障害等を理解してもらいたくて事例を作った)

事例3：うつ病を抱えた男性の“穏やかな暮らしをしたい”という悩み

(老々介護のお宅や、親の介護のために仕事を辞め、収入がなくなって親の年金に頼る5,60代が増えていると民生委員に聞いたのでこの事例を考えた)

事例4：小2女の子の“さびしいお家に帰りたくない”という悩み

また、ワークショップで事例に触れ、それぞれの事例に対する参加者の感想は、

事例1：専門的な意見も必要だが、この家族を地区で見ようとなった。第3者が家族に促しを行いながら、サロン、見守り隊、向こう3軒の関係性でちょっとしたおせっかいをして支えていく

事例2：高齢者の参加者から、お母さんは40代でまだまだ若い。なんだって出来ると思うから、喝を入れることが出来るという人がいた。新村の地域性が出た意見が挙がった

事例3：父・母への支援はできそうだが、本人のうつ病の支援は普通の人には難しい

実際の地域の実情から拾った事例のためか、実に複雑多様化、総合横断化の内容であった。あらためて混乱する現在社会のありようを認識する事態となった。従って、この関連あ分野と明確に整理出来る内容ではなかった。また、参加者からこのような意見もあった。「地域との協同は、支援者・ワーカーのみで行う検討や議論・研修と異なり、その場に（ケーススタディの素材とされた）ケースの当事者が「参加していても不思議は無い」という臨場感的な、良い意味での緊張感を持って臨むことが出来る事を知った。」という内容である。事例作成のあり方次第では、「事例」という解釈のバリエーションに繋がることを知った。

(5) 当日のワークショップ

以下のタイムスケジュールにより実施した。

| | 時間 | プログラム | Min |
|----|-------|--------------------|-----|
| 1 | 13:30 | 主催者あいさつ | 10 |
| 2 | 13:40 | グループ自己紹介 | 10 |
| 3 | 13:50 | ワークショップの説明 | 10 |
| 4 | 14:00 | 事例の読み込み | 5 |
| 5 | 14:05 | グループ1 支援の記入（個人ワーク） | 10 |
| 6 | 14:15 | グループ1 支援の発表 | 15 |
| 7 | 14:30 | グループ1 支援と足りない支援出し | 15 |
| 8 | 14:45 | 休憩 他事例の読み込み | 15 |
| 9 | 15:00 | グループ2 | 20 |
| 10 | 15:20 | グループ3 | 20 |
| 11 | 15:40 | いいね！シールの貼付 | 10 |
| 12 | 15:50 | グループ1での振り返り | 15 |
| 13 | 16:05 | お手紙配布&シェア | 10 |
| 14 | 16:15 | 主催者挨拶 | 5 |
| 15 | 16:20 | 終了・片付け | |

ワークショップ開始時間を午後 13 時半からに設定した。新村地区の「地域住民」の参加を主に考えたため、この時間に開始し、夕方家族の方が帰って来る前までには家に帰り着けるように配慮した。また、公民館主事を参加者ターゲットの一部としたため、勤務内で参加出来る時間に設定した。

また、各グループのファシリテーターは特別調査研究員が務めた。この理由は、ワークショップ後、その成果をどのように新村地区で活用するか各々検討するためである。ワークショップで終わらないために責任をもってグループの意見を反映する目的があった。その中で、「専門性の高い人が多いと話が回りにくかった」という地域住民の方の意見を耳にした。

①会場調査

高齢者が圧倒的に多く、新村地区としても 11 票、他地域から 15 票と、関係のある人が多かった。事例についての話し合いでも付箋が多いのは高齢者関係だった。新村地区でも他地域でも関係がある人が多かったのは、居場所や生きがいづくりの分野だった。他地域で関係がある人が多かったのは子どもや若者の分野だった。事例にお母さんのものがあったのですが、母子に関しては関係も関心も少なかった。

| 項目 | 関係がありません | | 関係があります | |
|---------|----------|-----|---------|-----|
| | 新村地区内 | 他地域 | 新村地区内 | 他地域 |
| 障害 | 3 | 4 | 2 | 3 |
| 若者 | 1 | 5 | 2 | 3 |
| 高齢者 | 4 | 6 | 2 | 3 |
| 子ども | 2 | 3 | 0 | 3 |
| 母子 | 2 | 1 | 2 | 1 |
| 医療 | 2 | 3 | 0 | 3 |
| 居場所 | 2 | 4 | 0 | 3 |
| 行政 | 2 | 2 | 2 | 0 |
| 生きがいづくり | 2 | 4 | 2 | 3 |
| その他 | 0 | 3 | 0 | 0 |

会場調査の結果

②会場

6人掛けで6テーブル作り、各テーブルに一人グループファシリテーターが付いた。9月のプレ研修会で、このワークショップを実際に体験して専門的知識が必要な場面がたびたび見られたので、ワークショップやグループワークに慣れていない地域住民の方を考慮してグループファシリテーターを配置した。事前説明でグループファシリテーターを紹介し、顔を覚えてもらうように工夫した。最初のグループが一番長くワークをするので男女比に注意し、住民で固まってしまったグループには移動してもらうようお願いした。ひとり親お母さんの事例では、「片親親族会の紹介が出来る」や、「一週間のうち何回か食事をつくりに行くことが出来る」等の自分の出来ることが書かれており、フォーマルやインフォーマルな内容をたくさん出していただいた。似た付箋はグループにしてタイトルをつけた。傾向として多かったのは、解決策が出なかった赤色の SOS 付箋にたくさんの「いいね」シールがついた。赤色付箋は出ていても、その解決策を書く緑色付箋が出にくい傾向だった。解決に必要なことは気づいていても、実行手段や方策を現段階では持っていないのではないかということが地域の現状なのだと思う。

(6) 参加者・スタッフからの感想

①参加者

- ・「できそうなこと→今はできていないこと→その解決資源」の三段階により促される気づきのプロセスで、あらためて多くを学んだ。地域住民（地縁組織のキーパーソン）と専門的支援機関の混成による本ワークショップは、日常つながりにくい両者をつなぐ契機となる。そこで得たつながりが今は無い新たな資源の開発にも役に立つのではないか
- ・知らない人と長時間話すのは疲れる。性格や考え方も分からないから正しい意見なのか不安で意見を出しにくい。知り合いの範囲でやったら盛り上がりそう。町会単位でやるのが求められているのかもしれない。
- ・ワークショップのことをよくわからないまま誘われて参加したが、話し合いができてよかった
⇒これは殆どの地区住民の方に言えることで、ワークショップやグループワーク等の横文字が大変苦手な方が多かったが、平素から話し合いが好きな方や、団体の長を務める方をお誘いしたので、このような意見交換の場が持てたことをよかったとする意見が多かった
- ・その場に事例の当事者が参加していても不思議はないという臨場感があり、よい意味で緊張感を持って望むことができた
- ・厳しい意見と聞こえるものもあったが、それが一般の方の意見であり、発言出来る空気があることが素敵だった
- ・こういった話し合いの機会はなかったので新鮮だった。自分たちのレベルが上がったような気がする。しかし、知らない人と長時間話すのは緊張するし疲れる。町会単位や、顔の見える範囲でやるのがもとめられているのかもしれない

②スタッフ

- ・地区住民の意見として『本人の幸せ』という考えが出たのでとても良かったとあり、困りごとというマイナスの面に着目しがちだが、『幸せ』という言葉が地区住民の間から出たことがよかった
- ・この人を何とかしないといけない、と言いながら事例に取り組んでもらえた。他人事ではなく親身になって事例に取り組んでもらえたからだと思う。
- ・最初のグループは住民対専門職の比率が5：5だった。黄色付箋は多く出たが、より具体的な話を進めることが難しい。住民と専門職のバランスが取れていないとグループファシリテーターへの負担が増えてしまうという難しさがあった。
- ・専門職の言葉を住民がイメージ出来るように促すことが難しかった。
- ・他の課題からも多様な意見を出せるようにとのワークショップの狙いが上手く伝わっていなかったと思う。本人の悩みを単純に解決しただけでは、その方の幸せにはつながらないという、事前説明の段階では伝わりにくい事柄が伝わらなかったという点ある。解決に走ってしまう、先走る様子も見られた。

(7) 成果

①「ワークショップを通じて知識・技術の取得、共有ができた」

ワークショップに参加された下諏訪町社会福祉協議会の方からの情報で、12月に同様のワークショップを開催されるとのことで、ねらいの一つである普及という効果が得られたと言える。

②「全員で話し合った結果“地区にない活動”で、すぐにできそうなものが意見として出た」

③「専門用語を地区住民にわかりやすく説明できた（共通言語の開拓）」

共通言語の一つとして“地区にない活動”が出たのかと思う。住民の方が分からない専門用語を説明しているうちに、共通認識として参加者の間から「これなら出来る」とのアイデアが生まれたのでとてもよかったと思う。

④「事例3（うつ病男性、父の介護問題）では、目に付きやすい高齢者にばかり支援付箋がでていたが、3周目になってやっと本人への支援付箋がでた」とあるが、これはワークショップの‘多様な意見を出す’という目的が達成できたと思う。

(8) 課題

①専門職と地域住民のバランス

バランスが取れていないとグループファシリテーターの負担が重くなってしまうので、バランスを取ることを考慮する必要がある。

②地区住民の入るワークショップでの事例の取り扱いが難しく、地区の実例にしてしまうと特定される恐れがある

事例を探しているときに民生委員さんからも事例をあげてもらったが、新村地区は昔からご近所のお付き合い盛んな土地のため、個人が特定されかねない内容だったので今回は扱うことができなかった。しかし、事例でないと身近な問題として捉えられにくいので付箋の数が出なくなる傾向があると思った。

③約束事の付箋は今後の実施を約束するものではない

地区住民の気持ちとして強いため、出されたアイデアを実施することはむずかしいと、地区住民でもある福祉ひろばの職員から意見をいただいた。

④地区住民の入るワークショップとしては、ボリュームが多い

事例の占める割合が高いワークショップだが、ボリュームが多くなってしまうので、字を書くことを嫌がる高齢の方への負担が大きくなると思った。そのため後半になると付箋に書かずに意見だけを言う参加者もいた。時間の短縮を考慮したが、事例について話し合いが深まると時間が足りないとの声も聞かれたので、事例や時間配分については短縮や凝縮の仕方を工夫する必要を感じた。会場調査についても、地区住民の参加が多い場合、多くの項目について模造紙へ貼る場所の理解を得ていくことにも工夫が必要と思った。

(9) ワークショップ後の反響

- ① 平成 29 年 1 月 30 日、S 社会福祉協議会では社内研修テーマとして、このワークショップ講座を開催、ワークショップに参加して学んだことを他の職員に伝えた。次には、自分の担当地区に持ち帰って、地区住民を巻き込んでワークショップ実施を計画する意図があった。
- ② ①の発展系として早速に担当地区でのワークショップ実施を平成 29 年 3 月中に計画中である。
- ③ 松本市公民館主事が地区の研修の際に活用する検討を実際に行っている。
具体的には、平成 29 年 1 月 29 日に公民館研修集会での一つの分科会で実施する準備をしていた。結果的には時間の調整が付かず実行はキャンセルとなったが数回の準備会はもたれた。
- ④ 特別調査研究員は、新村地区での実施の後、ワークショップ当日に出された意見の集約、再確認等の作業を定期的に行っている。この作業の目的は、次にどうするか？である。方向性は見出されていない。
- ⑤ 特別調査研究員は自分がそれぞれ担当する地区でのワークショップ開催を検討中である。まずは実践を積み重ねることを目的にしている。
- ⑥ 松本市新村地区の 2 名の地区役員から、次の展開の相談を地区配属の特別調査研究員が受けた。平成 29 年度中には何らかの実行に繋げていきたいと思う。
- ⑦ ワークショップ参加の地域包括支援センター職員から、ワークショップを前提とした事例作成の方法について問い合わせがあった。新村地区での一連の準備過程をお伝えした。

(10) 今後の展開

- ① 松本市内 35 地区のうち 7 地区に所属しているワークショップに参加した松本大学の特別調査研究員が、各地区に沿ったワークショップへの落とし込み、専門職だけでなく地区住民への波及を目指していく。
- ② 新村地区で 2 回目のワークショップの開催を考えている。しかし、ワークショップのボリュームが多いことと、専門性が必要なことが課題となっている。
- ③ 1 回目に参加した地区住民の方が 2 回目以降にステップアップ出来るような新村版「できもちワークショップ」への改良を考えている。

(11) 質疑応答

参加者：ワークショップの進め方について話していただき、会場の様子が目に浮かぶようだった。実際の話し合いで出された内容は事例について活用できそうか。

新村地区：事例についてインフォーマルな付箋が多かったなので、個人的には事例への応用は難しいかと思った。実際に町づくりに携わる町会長さんたちの参加を希望して

いたが、参加が見込めなかった。参加されたのは、関心のある一般の方が多かったので、事例への活用は難しいのではないかと感じた。

上野：出来ると思うことをたくさん出し合うことを目指したワークショップだった。困りごとのある人の事例を、6人のグループで話し合ったとき、松本は山間部で景色が美しい場所なので、「困っている人を景色の良いところへ連れて行くことが出来る」というアイデアが出た。地域性が反映した意見だった。

新村地区：事例2について、一人親のお母さんが「子どもと過ごす時間がない」との困りごとについて「40代からの婚活へ誘うことが出来る」という方がいた。余計なおせっかひになりかねないアイデアが出る地域性だからかと思う。同じ事例で、「喝を入れることが出来る」との意見から、実際にそのように行動することの是非はともかく、関わろうとする姿勢を感じた。事例1では、ボランティア団体が取り扱わないサービス、例えば花を植える、掃除をする「おせっかひやさん」として立ち上げるとの意見がある。

西島：松本のワークショップに参加して、地域性もよく分かり多くを学んだ。事前の準備について印象に残ったのは回覧板で参加を呼びかけたことだ。松本では、回覧板を含めてどのように参加者を募ったのか。

新村地区：町長さんから回覧板を使って案内してはどうかと提案された。案内は表面に案内文を、裏面にはイラストをつけてワークショップの概要を載せたものをつくり、チラシと併せて配布した。

上野：準備段階で事例をつくることが大変だったと思うが、松本では事例をつくるためにどのようなことをされたか教えていただきたい。

新村地区：各地域に配属されている特別調査研究員が、自分が見聞きした事例をもとに、新村地区の状況を考えて山間部の事例を選択して交通の事例を使用した。また、親近感がわくような事例を作った。民生委員さんや保健師、児童センターの職員さんにお話を聞いた内容を参考にして事例に組み込んだりもした。

(12) 総括

松本市各35地区でこの試みが普及することを期待して本事業を実施した。このワークショップの特徴は、十分な時間と適切な人数の集合が、各地区で普及する条件だと思う。その目処がつくまでの取り組み過程全般こそが、むしろこのワークショップが単に学びを超えた高度な実践たる上での「肝」なのだろうと察する。このことは事例作成過程において肌で感じたとおりである。一方では疑問もある。「私の地区は、ワークショップを実施出来る程、まだ熟していない」という声を聞いた。このことについて、

どのように考えるべきだろうか。また、ワークショップを繰り返し実施することによって「自分が出来る」地域の課題への関与は広がってくるのだろうか。実行に移していくためには次の段階へ繋ぐ仕掛けが必要ではないかななどの疑問である。今後、自分たちの課題だと思う。

松本市新村地区では地域住民の参加を中心に本事業を実施した。専門用語を地域住民にも分かりやすく説明されており共通言語が図られたと思う。しかし、所要時間については、しっかり体系化されているため応用が難しく、一般の地域住民には長かった印象を受けた。恐らく柔軟に対応可能となっていると思われるが、自由度の高い進行とその成果との関係性から実践をもう少し積み重ねることによって、自分たちで検証する課題を見出してみようと思う。

「課題解決」のためだけではない。「新たな資源、領域開発」のためにもなる。今回の一連の研修事業に参加して最も学んだことである。特に地域を基盤に考えた際、制度や社会保障の上で問題解決できない事態は多くあって、その事態に向かっていくためには地域住民の知恵の出し合いにしかない。そこには地域住民の知恵が出し合えるような有効な機会が必要である。このことを「出来ることもちよりワークショップ」に求めたわけである。課題は残しつつも、ワークショップの準備、実際の実行によって、また参加者の反応をみて、「新たな資源、領域開発」につながる可能性を感じることはできた。CBR マトリックスとの組み合わせを加味しながらの展開はさらに多様な可能性を生むと思う。

最後に、この度の取り組みに7名の特別調査研究員と共に参加した。約10ヶ月の時間を要して深く理解を得ることができた。地方都市松本において、この学びの理解は、一つの財産になったと思う。地方都市松本を選んでくださり、新しい知識を分かりやすく指導して下さった方々に心からお礼申し上げたい。

(13) ワークショップの様子



グループで意見を出し合う



「出来ること」をグループで整理



事例に対してたくさんの「できること」があげられました。

5-3-2 ワークショップ実施（一般社団法人 しん）

発表者：一般社団法人しん 夏目 孝弘（精神保健福祉士）

（1）現状と課題、目標

弊社は精神障害および発達障害の人たちに対しての生活支援を目標とした団体である。今日の我が国においては病床数が多い社会的入院、処方されている薬の多さ、施設収容など依然として精神障害者に対しての歴史的処遇の改善が他の国に比べて遅れている現状がある。その主な理由としては以下の3点となる。

- ① 精神医療保健福祉において医療の担う役割が多い。
- ② 長期入院をしている患者の存在を社会が知らない。
- ③ 課題が地域に出てこないことによる支援体制が進まない悪循環

上記の3点から言えることとしては福祉をはじめとした地域での支援体制が整っていないことにより、病院や施設で生活している方が地域で暮らしていくことが困難になっていることから、医療側として地域移行が困難となる。それに伴い、医療側が患者を抱えざるを得なくなり、医療の役割が大きくなるという悪循環が構造的に成立している。そのため福祉の領域の役割を大きくしていくことは課題の一つとなる。

ただし、実際の支援においては福祉の領域というのは専門職だけで担っていくのでは限界があり、現在の精神保健福祉の課題は福祉・医療・行政だけの問題ではなく、それぞれの地域の課題として捉えていくことが重要である。そのため、今回のCBIDを実施することによって、弊社が課題と認識している上記の3つの課題を色々な領域の垣根を超えた人たちで共有することによって課題を解決することを目標とした。

特に名古屋市の現状においては、精神障害者は必要な福祉的支援が十分に得られていない。これは福祉系の事業所に偏りが生じているからである。具体的には就労系や家事援助系の事業所が多いことに対して地域活動、生活訓練、住居などの支援をおこなっている施設は不足している。実際には地域にそのような資源を開発する可能性が潜在的に備わっているにも関わらず、上手くそれを活かしていない現状がある。したがって、CBIDを行うことによってどんな人たちがどのようなことが出来るのかを「持ち寄る」ことによって、地域資源を増やしたり、活かしたりすることが必要だという意識をもつこともねらいとしている。

また地域で実施する際には当事者とその家族の声を地域福祉の向上に活かす必要があり、イタリアなどでは地域に非営利目的の法人や市民団体などが沢山あり、それぞれがその地域を向上させるために活動をしている。つまり、精神医療保健福祉の領域だけに限らず、私たちが住む地域が良くなり、それに伴って精神医療保健福祉における患者の地域生活も安定することになる。それも今回のCBIDの一つのねらいである。

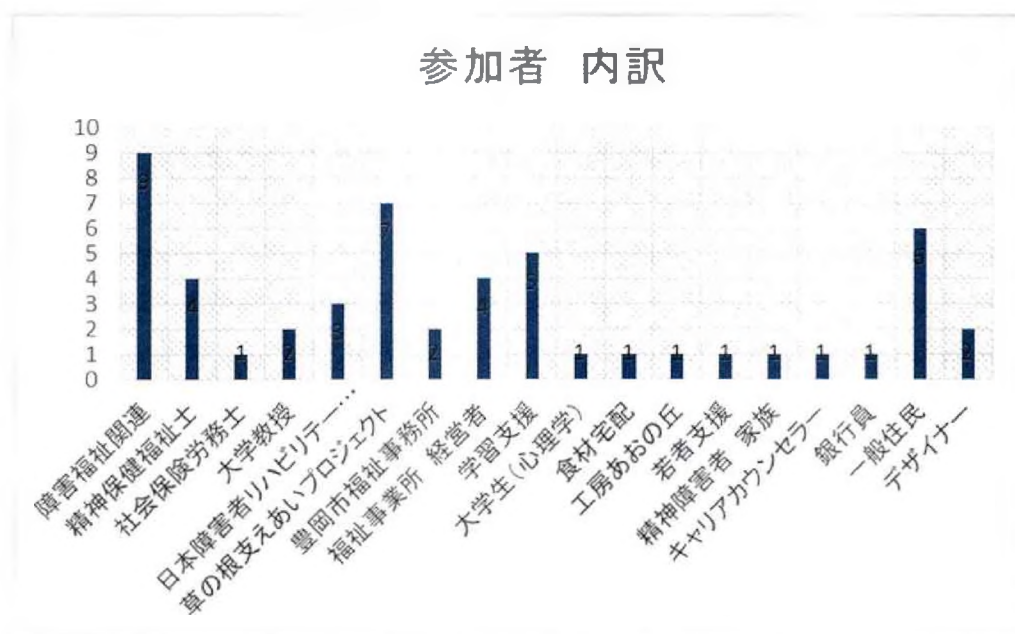
(2) ワークショップへの具体的な声掛け方法

声掛けをする際にねらいとしたことは実施に目標に掲げたことを達成するために地域（名古屋市が中心）において社会的な影響力を持ち、かつ、各スタッフが一度会ってみたい方を対象とした。声掛けのプロセスとしては各スタッフが対象となる方々に対してメールや直接会うなどして90名程に今回のワークショップの目的を伝え、参加可否を確認した。

(3) 参加者

参加者43名の内訳は以下のグラフの通り。

図 1-1



1番は多かったのは障害福祉関連で、その次は就労、若者と居場所が必要な方の支援者が多く、高齢者や外国人支援の関係者は少なかったという印象である。

名古屋市からの参加者が7割、他の地域が3割位で、「障害」、「就労」、「居場所」、「若者」に関心・関連がある人が多かったこと、「高齢者」、「権利擁護」「子供」、「外国人」など、弊社があまり取り組んでいないことから関心・関連は弱かったと思う。

声掛けをした相手に対して十分にその意義や効果などを説明できるようになること、そしてスタッフ全体が普段から横のつ



会場調査の結果

ながりを構築していくことを意識し、行動しておくことが大切であると感じた。

一方で、精神保健福祉や障害分野だけに限らない方が今回のワークショップに参加されたのは普段から法人の活動に興味のある人たちだったので、その点に関しては、地域とのつながりが醸成されていたのだと感じる。

(4) 事例作成のプロセス

事例はワークショップをおこなう際の中核的な部分にあたる。地域の方にとって事例がイメージしづらくなってしまいう程、できることが少なくなってしまうことや弊社にとって馴染みのない分野に関する事例を作るのは困難であると判断した。それによって今回の事例作成にあたって留意した点としては以下の点である。

- ① 法人の理念に沿った事例を作成する。(退院促進など)
- ② 法人で苦手としている分野を対象とする。(依存症関連)
- ③ 精神医療保健福祉の分野を扱う。(福祉および医療)
- ④ 参加者が発言しやすい事例を用いる。
- ⑤ 実際に支援した、或いは支援しているケースの内容を少し変えて使用する。

上記の点に留意して今回は5事例を作成した。タイトルは以下のものとなる。

- ① 認知症の夫と、知的障害がある子どもを抱えた女性の将来が不安という悩み
- ② 精神科病院に入院中の男性の自宅で誰にも迷惑かけずに暮らしたいという悩み
- ③ 幻聴を持つ30代男性の本当は友達がほしいし、結婚もしたいという悩み
- ④ アルコール依存症をもつ方の就職し安心して暮らしたいという悩み
- ⑤ 不登校の少年の家族で仲良く明るく暮らしたいという悩み

作成の手順としては4人の担当にそれぞれ事例の作成を依頼し、完成したものから本事業研修講師の渡辺 ゆりか氏に添削を依頼した。添削された内容を振り返ったところ、幾つかの改善点が見つかり、それぞれ事例を読んだ人が具体的にその人をイメージが出来ない、その人の出来ていることや得意なことの不足、主観性と客観性の区別などの点が指摘された。

それによって事例を読んだ時に参加者が本人の困りごとをイメージしやすい様に本人が自身の物語を語っているような形式にした。そして基本情報を記載する部分においては本人の疾病や社会資源の活用について記述した。これによって、本人の主観と外から見た客観的な部分を入れることが可能となった。

また背景に抱える困難さの点に本人の得意なことや誇れること、複数の具体的な情報を記載することにより、参加者が複数の切り口から自身のできることを「持ち寄れる」ように配慮した。

(5) 当日のワークショップ

以下のタイムスケジュールにより実施した。

| | 時間 | プログラム | min |
|----|-------|--------------------|-----|
| 1 | 13:30 | 主催者あいさつ | 10 |
| 2 | 13:40 | グループ自己紹介 | 10 |
| 3 | 13:50 | ワークショップの説明 | 10 |
| 4 | 14:00 | 事例の読み込み | 5 |
| 5 | 14:05 | グループ1 支援の記入（個人ワーク） | 10 |
| 6 | 14:15 | グループ1 支援の発表 | 15 |
| 7 | 14:30 | グループ1 支援と足りない支援出し | 15 |
| 8 | 14:45 | 休憩 | 15 |
| 9 | 15:00 | グループ2 | 20 |
| 10 | 15:20 | グループ3 | 20 |
| 11 | 15:40 | いいね！シールの貼付 | 10 |
| 12 | 15:50 | グループ1での振り返り | 15 |
| 13 | 16:05 | 気になる事例に移動&最悪の未来記入 | 15 |
| 14 | 16:20 | お手紙配布&シェア | 15 |
| 15 | 16:35 | 振り返り | 20 |
| 16 | 16:55 | 主催者挨拶 | 5 |

各参加者に事例を各グループで話し合ってもらう時間を多く設け、各グループに草の根ささえあいプロジェクトスタッフと弊社スタッフをファシリテーターとして配置し、話し合いが円滑になるような時間配分と人材配置を行った。今回の形式でのワークショップ参加者の方が多かったことから各プログラムにおける導入の時間を長めに取り、参加者がスムーズにワークへ取り組めるように配慮した。会場は、笑いに包まれたりしながら真剣に取り組んでいるという印象だった。事例を読み込んで、皆さんは熱心に考えてくれたが、メンタルヘルスの問題について詳しくない方もいらっしまったので、そういう方にはどのように進めてもらうかが今後の課題である。ファシリテーションにおいては会場内の進行状況を見ながら時間を調整したため、予定通りのスケジュールで終了することができた。また、休憩時間中に名刺交換などを通して横のつながりを作りたいという人が沢山いたことからこの時間に関してはもう少し長めにとっても良いのではないかと感じた。

弊社のロゴを付けた看板を置いたカフェコーナーを設けたが、名古屋のものが少なかったことは残念だった。

終了後、11月1日にオープンするコミュニティカフェにて20名位の参加者と懇親の場を持った。

(6) 参加者・スタッフからの感想

①参加者

- ・つながりが大事だ
- ・普段の支援の中では、つながりを持たない人との関わりを持てたことによって自身の業務範囲の狭さを知り、自身の支援に関して振り返る機会になった
- ・色々な人とつながることによって当事者の現状を知っていただく今後の普及啓発活動の一環になる
- ・実際にどうするかという行動計画を立てればよかったのではないか
- ・精神科医や社会的に影響力のある方も呼びできればよいのではないか

「いいね」シールの効果が一般の方へは大きかったように思う。自分がやったことに対して「いいね」をもらえることで自分にもやれることがあるのだということに気づけたこと、つまり専門職でなくても何かやれる、誰かに対して貢献できると気付けたのではないかと感じる。時間に関しては適切に進んだと感じる。

②スタッフ

- ・今回色々な人をお誘いしたことによって自分が活動していることを知ってもらいきっかけになったことが良かった
- ・ワークショップ後のつながり作りや仕組み化するのが良い
- ・専門的な支援が多くて真面目過ぎた。もう少し笑いがあるとよいかもしいれない
- ・事例に関してはもっと多様性があっても良かった
- ・くだけた事例があってもよかったのではないか
- ・支援者だけの会議だと一般の方が提案や意見を言えないと思うが、ワークショップは利害関係が無い横の繋がりという場なので、「フラットな立場で意見を行くことができた」

法人内部での効果としても良かったと思う。今回は5事例だけだったがもっと多様性があったほうが良かったかもしれない。

(7) 成果

CBIDの目的とは「誰一人取り残されない社会を作る」という理念の下、「できることもちよりワークショップ」という既存のワークショップよりも内容が工夫されているものを使用している。その効果として期待されることとしては、地域でどんな活動をしている人がいるのかを知ること、自分自身の活動の振り返り、専門職や地域住民との立場の垣根を超えた人と一緒に一つの事例に対して様々な意見を出し合うことである。従来、私たち支援者は地域住民と切り離された形で福祉・医療・行政・教育などを通して様々な生活課題を抱えている人たちや地域を支援してきた。しかしながら、そこには支援する側と支援される側という暗黙のパワーバランスが生じ、少数の人たちが地域の行く末を決めるという住民主体という観点を十分に生かしきれずに展開してきた。

そこには消費者、すなわち利益を享受する人たちを出発点とした支援が展開してい

るとは言いづらく、その反省点として今回のワークショップを行うことになったのだと感じている。その中で得られたこととしては、以下のことがあげられる。

①限界を感じていた支援に打開策を見出すことができた。

(支援者の自己高揚感の向上)

組織として求めることと個人で求めていることに葛藤が生まれることがある。例えば、自分としては病院に勤めているソーシャルワーカーなので退院支援をしたいと思っても、実際に1人退院すると病院では400万円位損失が出るので、どうしたら補填できるかを組織では考えると思う。このように、組織が求めるものと自分が実際にやっていくこととの狭間で役割の葛藤が生まれる。一方、つながりができると、病院で働きながらも他で何かやれば地域がよくなるという、自分が今後こんなことが出来そうだという自己高揚感が向上したということを成果としてあげられる。ワークショップでは、自身が「できること」を出していき、それに関して「いいねシール」を貼付するというプログラムがある。その中で高い評価を得るものとしては、当事者性、支援者としてではなく一人の住民や人として何ができるのか、というものだった。私たちは支援という枠組みを再構築することを求められたと感じた。

②支援者同士のつながる場所ができた。

CBIDの目的の1つである横のつながりを使った社会開発という点での成果だと思う。ソーシャルワークに限らず顔の見える関係で、あの事業所にこの人がいるからここを紹介できるというのは非常に大事なことである。普段お会いしない人と接点を持ったことによって、1つの物事に対して多面的に考えられる効果があった。例えば「年金」の相談があればあの人に繋げられるというようなイメージが浮かぶようになったことも成果だと思う。

どこの分野が最も頑張っているかというものではなく、すべての分野はつながりを持っているため、私たちは協力していくことが大事だと感じた。利害関係を越えたつながりを持つことの重要性に関しても改めて気づくことができた。

③各支援者における当該地域で起こっている問題意識づくりができた(自身の支援の振り返りや方向性の模索)

精神科病院の方が、「業務の範囲の狭さを知ったので、今後色々なことに繋がりたい」と意欲を語ってくれた。また、「自分1人が事業所で頑張ってきたけど無駄じゃなかったと気付けたことが良かった」との感想もあった。普段の取り組みに関して反省することが出来た。私たちは普段の支援においては自分自身がどの程度、地域とのつながりがあるか、本人にとって良い支援ができているのか、人脈を形成しているのか、というのは分かっているようで分かっていないことが今回のワークショップで明らかになった。

(8) 課題

① 当事者やその家族の『声』が十分に反映されていないこと（パートナーシップの不足）

今回は私達が支援している人達の事例を扱ったので、実際の当事者をお呼びできなかったが、実際に地域をよくしていくために地域でパートナーシップを組むのは当事者や家族だと思うので、事例の選択は課題だと思う。

② 実施から地域の向上までのフォローアップの仕組み（体系化への課題）

ワークショップへどのように参加者を募るかとか、感想を求めるのか、今後の体系化・具体化への一連の流れが弊社内で体系化出来ていなかったことが課題。

③ 1 団体で扱う対象の限界（人数、事例、分野が限局的）

障害福祉関連なので呼べる人数や知っている事例も少ないし、地域には様々な課題がある中でメンタルヘルス分野だけを扱うことに限界があったのではないかなと思う。

(9) ワークショップ後の反響

主に以下のような点に関して参加者から話があった。

① 自分の団体でも実施してみたい。

CBID の手法は一般的なワークショップで用いられている手法よりもユニークな点が多く、参加している人から自分自身の団体でも使ってみたいとの話があった。現状としては他団体で開催することには至っていないものの、その関心の高さが窺えるような反響があったものだと考えることが可能だろう。背景には横のつながりを作りたいと考えている人がいることや CBID の手法によって得られる効果を自身の団体でも生かしていきたいと考えている人が多いからだといえる。

② 仕事場以外でのつながりを意識し始めた。

CBID の手法を用いる目的の一つとしては、横のつながりを使った社会開発であり、そこでは支援者同士、住民同士、支援者と住民同士というつながりを展開していくことが求められている。そして私たちが普段仕事をしている場だけで、自身の関心領域の人たちと協働して何かのつながりを作ることは困難である。したがって、職場という垣根を超えて何かのテーマについて話す場を創出することに関して意識をし始めている人たちが増えてきたといえる。たとえば、名古屋市では月に1回、地域円卓会議という社会的孤立について自由に意見交換のできる場を作っているが、そこで話される内容においては自身が普段有している役割を超えた形で関わっている人が多い。つまり、自身の興味のある範囲をベースとして地域や現状を変えることをおこなっている。

③ 人とのつながりを意識し始めた。

私たちが今回のワークショップで得たこととしては、普段から色々な人とつなが

りを持っておくということであった。多くの人たちは自身の関わっている領域に対して何かの変化を促したいと考えているが、実際には一人で変化を導くのは非常に困難である。今回のワークショップでは一見、普段の支援とは関係ない人たちとの協力が地域を変えていけるのだということに気づいた人が多かった。そのため、そのような人たちは普段からつながりを意識するようになってきていると感じている。

(10) 今後の展開

①他地域・他団体が開催するワークショップの手伝い

弊社が開催した経験をもとに、他の団体がやってみたいとの声があれば、事例の作り方やワークショップをどのように行ったかお伝えできると思う。実際に色々な所でワークショップをやってみたいというお声はいただいたので、お手伝いしてもよいと考える。

②ワークショップに参加した人同士が再会する場の創出

ワークショップで出会った人達と共通の課題を抱えた小さなワーキンググループを作り、弊社が実施している社会的孤立を防ぐための地域円卓会議に参加してケース検討をやってみるということが考えられる。これで業務以外の活動の場所や出会いの場になればよいかと感じた。「共有できる課題の抽出」ということだが、様々な地域の課題がある中で何を選定するのかをしっかりと考えられれば良かったと思う。

(11) 現状

2016年11月1日にコミュニティカフェを開所した。下は喫茶店で上は若者のサテライト授業をするレンタルスペースがあり、生活支援と地域活動をしている。そこでお茶を飲みながら、相談支援では敷居が高いと思われる困ったことについて気軽に話せる場になっている。B型作業所(非雇用型)なのでフォーマルな資源だが、インフォーマルに機能しているので、「できもちワークショップ」をしたことによってCBIDの効果は少しずつ上がっているのではないかと感じる。

(12) 質疑応答

参加者：私はうつ病を2回発症し2回休職しているので、精神保健福祉士にもいつもお世話になっている。名古屋は精神病院が多いと聞いたが、恐らく身体・知的・精神の3障害の中で、精神が一番遅れをとっているのではないかと感じる。精神の人たちがカミングアウトできるような環境や、当事者や家族の方の声が反映されやすくなるような環境作りはどうしたらよいか。

夏目氏：弊社の代表理事が、ピアサポートの全国大会を地域で2017年1月に行う予定。弊社ではピアサポート活動として精神障害の方が互いに困っている人と話し合う場を作っている。個人的な見解だが、普及啓発活動も大事だが、一番は互いに交流していく

ことが偏見や差別を無くすきっかけになると思う。また、自分自身が精神障害に関して偏見や、自分はだめだというセルフスティグマを持っている認知症や引きこもりの方は多く、これらの方々の家族は隠したがつていると思う。そういう場合に、デイサービスの車が近所に来る回数が増えると、隠しようがないので段々と受け入れる土壌が出てくるようだ。「精神障害の人が増えれば増えるほど多数派になり、地域に受け入れられるのではないか」という地域の方の意見があった。答えになっているか分からないが、一番は実際に交流することだ。

あおの丘 山下氏：今まで色々な形のワークショップをしてきたと思うが、それらと今回の「できることもちよりワークショップ」との違いを聞かせていただければと思う。

夏目氏：明確な違いは、今までのワークショップとは方法が違うという点だ。色々な意見を出すというのは以前もあったと思うが、色々な意見に対して自分なりの課題解決の方法や「いいね」シールを貼るとか、フィードバックするプロセスがあるという点の違いだと思った。また、個人的には今後体系化していくという名目があるという点が他のワークショップとの違いだと思う。

参加者：参加者の内訳を拝見すると、学習支援者、不在宅配の方、銀行員、デザイナーなどと記載されているが、どういう経緯で声掛けしたのか詳しく教えていただけると嬉しい。

夏目氏：弊社メンバーさんがボランティアとして、引きこもりや生活困窮の家庭の子どもさんへ学習支援をしている団体に関わらせていただいているというお付き合いからワークショップへの参加を呼びかけた。銀行員やデザイナーなどの方は、障害のある子どもを持つ親御さんで、「いきなり本人が参加するのは躊躇するので、まずは親の自分が参加してみる」ということだった。

(13)ワークショップの様子



グループで意見を出し合う



事例の読み込み



カフェコーナー

5-3-3 ワークショップ実施（特定非営利活動法人 工房あおの丘）

発表者：特定非営利活動法人 工房あおの丘 代表 西島 亜希

（1）現状と課題、目標

障害者福祉の課題

障害者福祉の課題では、障害児教育に関する支援は大きく遅れている。私たちがこの分野で活動を始めた4年前から現在まで、福祉と教育や保健との間に大きな溝が見られ、それが一つ大きな課題だと思われる。人材が少ないこともあり、それは町全体の人口減少という問題にもつながっている。それをくい止めるために、町は婚活活動などに取り組んでいる。

障害福祉サービスを主体としてはじまった工房あおの丘の活動は、自宅から出て、身近な地域での「居場所」を提供し、そこでのお付き合いを経て、障がい者本人の「暮らし」の支援に対する活動実践につながっていった。

これまでの環境との違いが指摘され、県外から転居してきたお母さんから、「この人たちはいったいどうやって子育てをしているのですか？どうして誰も相手にしてくれないのですか？」と非常に心の痛む意見をもらったことが強く残っている。

障がい者本人のライフステージの移行段階では特にとぎれがちで、ステージの転換期には本人、家族がまた一から始めなければならないという、大きな壁が立ちはだかっていると感じる地域のシステムの現状に対して「つながる支援体制」を目指して活動を行っているところである。

児童の年齢では、扶養義務者である保護者が明るく、元気に子育てが出来る仕組みの構築をめざし、本人にとっても、家族にとっても、早い段階からの受容と支える形をつくるのが理想であると感じてきた。児童福祉法の改正と共に「子どもは障がいをもっていても、子どもとして地域のなかで育てる」ことを基本理念として、障がい児に対するサービスの再編成も行われたことで、公的機関と福祉との連携の必要性がますます提唱されている流れは、自分たちが理想として考えている支援体制の思いと合致している。

「暮らし」に寄り添う支援を目指したとき、子どもが大人へと成長していくなかには、たくさんの人との関わりがあり、たくさんの育ちの環境が設定されている。

町の課題

人の「暮らし」は、自己完結できるものではなく、障がい児（者）に必要な社会資源は、そこにつながっている地域全体の「暮らし」をみつめることへと行き着いてきた。

すべての住民がより良い暮らしを構築していくことこそ、障がい（児）者の方々の豊かな暮らしにも直結していくのだと気づいた時「入善型のまちづくり」という活動コンセプトが浮かんできた。それは、私たち福祉の専門的支援だけでは達成されない、入善町だからこそ出来る「人づくり」の仕組みなのだと感じ始めている。

この「できることもちより」ワークショップは、まさにその考えを確信づける取り組みだと感じている。

(2) ワークショップへの具体的な声掛け方法

「ワークショップ」という手法は、多くの分野で行われていることもあり、とても聞き慣れている言葉ではあると思われた。

しかし、福祉側からのワークショップ開催は、地域の方々には馴染みがなく、具体的な実践のイメージがわからない方が圧倒的に多かった。今回の「できることちよりワークショップ」のように、立場を広くみて、様々な分野の方にお誘いをしたい、ということになると、福祉側の立場としてそういった方々と一緒にワークショップに取り組んだ経験も少なく、研修会等でも同じ福祉分野の方々の方が実践経験があり、また提供する立場としても他分野、地域住民の方々との実践経験はまず少なかったということが言えた。

私たちは最初の活動を始めて12年ということもあり、地域とのつながりを感じていたので、参加者数の目標を80名と設定した。チラシはリハ協会から送られてきたものにプラスして、合計600枚を配布した。

広報での課題の特徴

- ① 専門機関に声掛けをするとワークショップや研修を受けた経験は何度もあることから変な先入観があり「あ～、グループになって意見を言い合うのでしょうか。」と言われ、ワクワクしてくれなかった。
- ② 地域の人たちを誘った時は、とても田舎であるせいか「それって、人前で自分の意見を言わなきゃならないのでしょうか。」と恥ずかしさから躊躇された。

実際の参加へのアプローチは、地域住民の方々へのお誘いについては特に、ワークショップをあまり経験したことがないという方が多かったので、チラシを直接お渡しして、手法等を詳しく説明することに努めた。具体的にどういった内容のものかをお話することで、このワークショップ全体が見えて、実際にどんなことをするのか、少しでも理解してもらえるようにした。

福祉関係機関には団体宛に案内を送った。入善町町内の福祉専門機関からの参加はまったくなかったのは大きな特徴だと思う。一方で、地域の民生委員の中にとっても熱心な方がいて、動員をかけてくださった。「民生児童委員19名」が、その結果である。

専門機関の組織の関係者へチラシをお渡しする際に、窓口になっていただく方には直接ご説明してご理解をいただいた上で、配布を許可していただいた。その経過のなかでは「できることちよりワークショップ」の意図と、専門機関との関係性について懸念される状況があり、関係者の参加は遠慮したい、という判断を受けたこともあった。

そういう意味では、直接お話しすることによって、それぞれの立場での考えを聞かせていただくことも出来て、今後のつながりをもつ大切なながれにもなり、また、それぞれの組織の考え方等についても、把握するより良い機会となったと感じている。

結果として、100名近くの参加希望をいただいたので、主催する私たちとして、非常に大きな成果を得たと感じている。当日は、関係者を含め、101名の参加があった。

(3) 事例作成のプロセス

活用する事例は、工房あおの丘スタッフからいろいろな意見が出された。この地域で実際に工房あおの丘が関わっている事例が基本、との指導を受けていたが、地域の方々と取り組む「できることもちよりワークショップ」では、事例との関係が近すぎて、実際的事例の方が特定されてしまうのではないかと、その事例の関係者が参加してくる可能性もあるのではないかと、そうなると、事例に関わる個人情報の保護は、守れるのか、といった意見が出された。

そういった意見を踏まえて、工房あおの丘が出した結論は、参加してくださる皆さん自身が住むこの地域に「こんなふうに住んでいる人がすぐそこに存在する」という現実感をもってもらうこと、私たちと同じように「こういった事例の方々もここに今暮らしていて、困りごとを抱えているのだ」という実感をもってもらうことを最優先とすることであった。

参加者の人数を、ワークショップを実際に実践することを想定したグループの数で分けて考えてみると、すべてのグループに別々の事例を提供すると事例が多くなってしまい「できること」をまとめていくことにし、という観点から、1人の事例に対して、より多くの「できること」を集めていくことにし、5つの事例を作成し、1事例に対して、3グループの方々に取り組んでもらう、という考え方をすすめることとした。

事例の年齢は、子どもから大人まで、幅広く選択することとした。あおの丘では子どもから大人までを対象に活動しているので、年代を考慮したり、本人たちに例として使っていいかと確認したりするなどして、実情に近い事例とした。同じ事例について話しても、グループによって出る意見が異なるなどの特徴があった。事例を作る際に考慮したことは、年齢とお父さんやお母さん、当事者など、立ち位置が重ならないようにした。

10事例を取り上げ、そのなかから工房あおの丘スタッフで再検討を行い、5事例に絞り込んだ。私たちは、障害福祉サービスを提供していることもあって、取り上げた事例に直接向き合っている活動団体であるので、事例の選択肢はたくさんあったが、困りごとを抱えていながらこれまでもなかなかその解決に向かえない方、これからの生活に大きな不安が予測される方を取り上げることとした。また事例本人の状況や立場が、参加してくださる皆さんの立場により近いものを意識した。同じ立場で共感できることや直接的に感じる人が多いほうが取り組みやすいと感じたからだ。

(4) 当日のワークショップ

以下のタイムスケジュールにより実施した。

| | 時間 | プログラム | min |
|---|-------|------------|-----|
| 1 | 13:30 | 主催者あいさつ&前説 | 15 |
| 2 | 13:45 | ワークショップの説明 | 8 |
| 3 | 13:53 | グループ自己紹介 | 7 |

| | | | |
|----|-------|----------------------------------|----|
| 4 | 14:00 | 事例の読み込み | 10 |
| 5 | 14:10 | グループ1 支援の記入（個人ワーク） | 10 |
| 6 | 14:20 | グループ1 支援の発表（グループで）：黄ふせん | 20 |
| 7 | 14:40 | グループ1 タイトル整理とSOSふせん出し ：青、赤ふせん | 15 |
| 8 | 14:55 | 【休憩】他事例の読み込みをしながら休憩 | 15 |
| 9 | 15:10 | グループ2へ移動（SOSふせんにできること） | 20 |
| 10 | 15:30 | グループ3へ移動（SOSふせんにできること） | 10 |
| 11 | 15:40 | 【休憩】休憩をしながら、いいね！シールを貼る | 20 |
| 12 | 16:00 | はじまりのテーブルに戻る | 5 |
| 13 | 16:05 | 振り返り | 10 |
| 14 | 16:15 | 気になる人物のグループへ移動 | 5 |
| 15 | 16:20 | 最悪の未来（最悪の未来共有） | 5 |
| 16 | 16:25 | 手紙の共有（グループシェア） | 10 |
| 17 | 16:35 | 手紙をくれた人の未来を歩むための共有 | 10 |
| 18 | 16:45 | おわりの言葉 | 5 |
| 19 | 16:50 | 終わりの挨拶 | 10 |
| 20 | 17:00 | 解散 | |

当日は、休日の午後の時間を活用した。社会人、子育て世代の主婦、高齢者、学生、幅広い立場の方々をターゲットとすることをねらいとして考えていたので、休日の開催をはじめから想定していた。広い会場に100人を超える皆さんが集まってくださった。そして、驚いたことに、当日飛び込みの参加者の方もいらっしゃって、大変うれしい悲鳴となった。

会場調査の結果

①会場

3つのグループを1列としてA列からE列と5列作り、3つのテーブルが同じ事例についてディカッションすることとした。メンバーは事前に振り分けておき、受付を終えた人からスタッフが所属を聞いてシールを貼るなどのアシストをし、順次テーブルに誘導した。

会場がとても広かったので、ガランとした居心地の悪くなるような雰囲気を出さないように、入善町のゆるキャラ（ジャンボール3世など）を飾る工夫をした。また、入りやすくそうにしている人を見かけたらスタッフが声をかけるなど、丁寧に対応した。そのおもてなしの心が通じたのか、参加者から「スタッフの対応がよく、居心地がよかった」との感想が寄せられ、ホッとしている。カフェコーナーを用意したが、何も言わ

ないと皆さん遠慮して飲まれないので、ワークショップの中でも「自由に飲んでください」と繰り返し伝えた。会場は広いとはいえ、15もグループがあったので、移動の時は人の流れが妨げられないように、うまく誘導するなどそれぞれのスタッフが気を付けた。ただ、動きづらかったという意見もあった。

② ワークショップ

各テーブルのファシリテーターの名前は明かさず、さりげない形で「各テーブルにはファシリテーターがいます」と伝え、私たちと関係のある機関、福祉関係や社会福祉協議会の方々にお願いした。

時間が過ぎるとともに、立ち上がって付箋を貼る人の姿が見られたり、積極的に意見を言ったりなど、ワークショップの雰囲気がとても良くなってきているのが司会進行をしていて感じられた。このワークショップの時間管理はとても大変で、プレ研修の時、とても長く感じられたので、自分たちが実施するときは参加者に長く感じさせないようにしたいと思った。ただ、基本形が決まっているので、それに従って進めた。工夫した点は、司会進行と同時に自分で時間管理は出来ないと思ったので、他のスタッフに時間の責任を担ってもらった。各テーブルの様子を見ながら、例えば、活発に意見が出ている場合などは1～2分から3分延長して、雰囲気を壊さないようにした。この方法を取ったことはとても良かったと思う。途中「ワークの時間が短い」、「話しているのに進行を始めないで」といった生の声も届き、できる限りその場で対応しながら進行をすすめた。

反省点としては、私の声が大きすぎたようで「次に行きましょう」などと声をかけた時に、まだ意見が出切っていない人を遮ぎってしまったことだ。そのような時も、時間管理しているスタッフが「参加者がまだ意見を出し切っていない」ことを知らせてくれて、その都度、修正を加えながら進めた。とにかく、時間管理が難しい印象が残った。

全体的な印象だが、付箋もたくさん貼ってくださり、皆さんがとても一生懸命にそして強い気持ちを持って参加してくださっている様子が伺え、とても嬉しかった。

(5) 参加者・スタッフからの感想

《良い点》

- ・ いろいろな人からの「できること」が最終的に集約されるように、グループを変えたり、テーマを変えたり、主訴の人からの手紙が登場するなど、本当によく考えられたプログラムだと感心した。
- ・ 参加者の皆さんが積極的に発言していたこと。
- ・ 非日常だと思っていたテーマだったが、そのテーマが日常だという人々が、私の近くにも存在しているということに気づかされた。
- ・ 会が進むにつれて自分の中で埋もれている考えが自然と導き出されてくるような、

不思議な雰囲気のあるイベントだった。

- ・ 人気投票のように、各自が好きな意見にシールを貼ることによって、他の人がどんな意見に興味を持っているかが一目で分かって良かった。
- ・ 普段の生活ではなかなか関わることがない方と同じテーブルについて話せたことが楽しかった。
- ・ 準備が行き届いており、スタッフのお迎えの姿勢が素晴らしいと思った。
- ・ 幅広い年齢層、異なる分野の方々が参加していたことが素晴らしいと思った。
- ・ 長時間の設定だったのに、参加したら短く感じた。
- ・ 「事例検討会でこれまでは、どのようなサービスが当てはまるか」という点ばかりを考えていたが、基本に立ち返り「自分ができること」から始めればよいということに気づかされた、明日からまた頑張ろうという気持ちになり、元気になった。

今回、参加者の年齢層が高校生から 70 代の方までととても広く、いろいろな年代や立場の方々と向き合えたことも、私たちにとって大きな収穫だった。

《改善すべき点》

- ・ 自己紹介の付箋、会場調査の「興味がある」のシールは活かされないまま終わったので、活用してほしかった。(何のために行ったのか分からなかった。)
- ・ 不完全燃焼だった。

これについては、プレ研修で「このワークショップの目的は、何かを解決することではない」、自分の中で「気づき」を持ってもらったり、何故だろうと考えたりすることで次につなげると聞いていたので納得した。「不完全燃焼」との意見は複数あった。また、自分のできることを考えてやる気になっていたのに、本人からの手紙を読んでガックリしたとの意見も寄せられた。
- ・ 与えられた事例に対して、自分たちのグループでは「共感」することは難しかった。「同情」はされたようだ。

これは、社協の方からの感想で、ファシリテートしていただいたグループメンバーから感じられたことだと思う。
- ・ 「気づき」の確認をするなど、最後のまとめをもう少し丁寧に行う時間を取ってほしかった。
- ・ ワークの時間が長いという意見が多かったように感じた。
- ・ いろんな職種や年齢の方がいたので、付箋を使ってワークをすることが初めてという人がいる中で、このワークショップの方法や内容に難しさを感じている人もいた。
- ・ このワークが、今後どのようなことにつながっていくのか、このワークをする目的などを参加者がよく理解できていなかったように感じた。
- ・ 後半になるにつれて、時間に追われるようにグループワークが進行していき、消化不良気味だった。
- ・ せっかく人気投票をしたのだから、上位の意見を紹介するべきだった。

（６）成果

- ①人とつながる形を構築してきても、実際の障害者の生活に触れるというアプローチができていなかった。今回のワークショップで、地域の障害者の現実の暮らしに触れてもらえた。
- ②障害児（者）が家族にいる、ということが生活にどのように影響しているのかを感じてもらえた。これは、自分たちの周りに「こんな人たちがいるんだ。」という衝撃を伴った気づきの感情だと思う。
- ③私たちは、「何も力になれない」ではなく、一人の住民として出来ることを素直に考えてもらうきっかけとなった。
- ④生きたワークショップを経験することができた。これは、何度もワークショップ形式の研修を受けている人からいただいた感想なので、このワークショップの大きな成果だと思う。

（７）課題

- ①このワークショップの次への展開を検討していかなければならない。
- ②使った事例は、困りごとを抱えて暮らしている方々の生の声であるので、このワークショップで集まった「できること」を如何に支援に生かしていくのかを考えなければならぬ。
- ③ワークショップをきっかけとして繋がった人たちを今後の活動に巻き込んでいくにはどのようにしたらよいか。
- ④「できることもちよりワークショップ」を今後も開催すること。
- ⑤ワークショップの趣旨を提案し、地域づくりの展開に活かしていくこと。
- ⑥全員の参加者から意見をいただいている。
- ⑦課題として挙げられていた関係団体との溝を埋めるために、このワークショップで学んだ手法を使ってアプローチする。
- ⑧個人として困りごとの事例に向き合うことから見えてくる視点を、支援者の立場に置き換えて具体的な支援に組み込んでいくこと。

（８）ワークショップ後の反響

参加して下さった異業種の方から、「この手法は、私たちの分野でも活用できる。いつも自分たちの利益ばかり気にして次の事業展開に至らないことが多い分野で、みんなが対等に出来ることを考えることができるんじゃないか。素晴らしい取り組みだったよ。」というお話をいただいた。

この言葉が「取り組んでよかった」という達成感とともに、ずっと私たちの心に残っている。是非、今後取り組んでみたいと考えている。

また、参加して下さった参加者の方から、その後「事業所内でプチワークショップ

をやってみました！」というメッセージもいただいた。自分たちのサービスのなかでの困難事例を使って、具体的な支援方法を考えるために、みんなで出し合う、ということを行った、とのこと。そこから、一緒に働いているスタッフが、現状の支援に対してどんな思いを持っているか、現場では話しきれなかった支援に対する考え等を共有することが出来て、これからの業務に活かしていくことが出来そうだ、との感想をいただいた。

また、このワークショップで出会った方々と、新たなつながりが生まれ、その後の集まり等にも参加していただくことが出来るようになり、私たちの活動に理解をいただき、地域での連携につながりつつある。実際の仕事、関わっている障がい者本人への支援に活かされていくことは、とてもうれしいことである。

Facebook 等の SNS を活用した、情報提供も行っていったことから、県内の住民の方が「この手法は、自分の地域で活用できるのではないか、と思った。是非、できることもちよりワークショップを、自分たちのところで、指導していただけないか。」との問い合わせも入ってきている。

（9）今後の展開

- ①「できることもちよりワークショップ」を改めて開催すること。
- ②事例から考え、本当の支援体制構築を目指す。
- ③ワークショップで出た意見を事例の本人たちの支援に活かす。
- ④再アセスメントを行い、真のニーズを見極めて具体的な支援を整える。
- ⑤参加者とのつながりをさらに深め、工房あおの丘の活動に活かす。
- ⑥福祉支援者が支援を組み立てる際に、専門職としてではなく、一個人としての思いから見つけて行けばよい、との考えを持って、フラットな気持ちで話し合う場面を構築していくこと。
- ⑦ワークショップで得られた多くの「できること」を実際に事例に活かして解決に導く。
- ⑧本人の次へのニーズにつなぎ、本人、支援者、全員のモチベーション向上へつなぐ。

（10）質疑応答

上野：「手紙」について。これはワークショップ参加者ができることを出し合った後で、ご本人の本音を書いてある「手紙」を読んで、自分たちの考えとの違いを感じた、ということだが、実際のワークショップではどのようなインパクトがあったのか、お話しいただきたい。

西島：実際、参加者からは「なんなんだ。あの手紙は！」、「せっかく考えたのに！」などの落ち込んだような意見が聞かれた。会場が一瞬静まり返った。すべての事例は、「本人の生の声を伝えたい」というスタッフたちの思いから、取り繕うことなく生の

声を書いたものだ。鈴木氏(スーパーバイザー)と渡辺氏(研修講師)からはバランスを考えて事例を作るように言われたが、自分たちとしては本人たちの本当の声を伝えなかったもので、そのようにした。そのためか、多くの参加者の方々は衝撃を受けたと思う。それが、このワークショップの「狙い」だと聞いていたので、私たちも参加者の方々に本人たちの本音を伝えなければとの思いがあった。参加者の方々は、手紙を読んで「やっぱり自分たちでは何もできないのか...」とショックを受けるが、手紙の前に出された「できること」を再確認して「できることから始めよう」とまとめることで終わった。

上野：このワークショップで意見を出し合っていると、とても盛り上がるがその後、本人たちの本音を知ることで現実とのギャップを知りショックを受ける。ただ、そこから改めて自分たちのできることを考えることで、ある意味、本気度を試されているのだと思う。現実を知り、改めて考える、このことが「できることもちよりワークショップ」の特徴だと思う。

参加者：今日発表された3ケースのうち、最初の2つは作られた事例を使ったということだったが、最後のあおの丘は本当のことを事例としたと報告された。これは、それぞれの実施者のお考えか？それとも、違いを見るために意図的に変えたのか？私自身は、ご本人の実体験に基づいて実施されたあおの丘さんの報告がとても良かったと思った。

鈴木：事例は、基本的に実際のことに基づいて作られている。名古屋の事例もそうである。松本については高齢者が多く、多様性が少ないとのことで、こちらが事前に用意したものも使用した。7～8割は実際のものである。ただ、あまりリアルにすると、本人が特定されることがあるので、表現を変えたりしている。あおの丘だけがそうではなく、ほぼ実際のことに基づいている。

松本大学：参加者のことでお聞きしたい。一般の方たちに参加を促すときに、「人前で意見を言うのがねえ...」と躊躇されるので、一人ずつにアプローチしたと言われた。松本でも同じようなことが聞かれたので、どのようにされたのかお聞きしたい。

西島：幸運なことに、私たちは3カ所目、最後の実施だったので、先の2カ所の方法から学ぶことが多かった。例えば、松本の方々が「一人ずつに丁寧に声をかけた」と言われたことから、自分たちもそれになった。私たちは福祉関係機関とも関係があるが、イベントの案内をしても来ていただけることはほとんどなかった。そのような機関には、通常通り郵送で案内し、来てほしいと思った人たちには個々にお誘いした。ただ、松本のように分かりやすい案内を特別作るのではなく、既存の案内をもって、このワークショップの特徴を説明したり、楽しさを伝えたりした。このように、特別に新し

いことをしたということはない。

(11) 総括

ワークショップの終了時には、全体的に参加者の皆さんのなかで、達成感というよりも、なんとなくもやもやしてすっきりせず、参加者のみなさんに名残惜しさを残すかたちとなったようだ。それは、終了直後の参加者の方からの声があがっていたことからよく理解できる。それは、「本人の手紙」を提示したために、そういった気持ちになったようで、「ここまで話し合ってきたのに」「何か出来るとおもいはじめていたのに」というような発言も聞こえてきていた。

指導を受けてきた私たちとしては、まさに、今自分の目の前に、現実として困っている人が存在しているのだという実感を持っていただくことが出来た、という、このワークショップの目標としては成功、といえたのではないだろうか。

終了後には、交流会を企画し、参加して下さった方々があらためて繋がる時間を取ることができ、この「できることもちよりワークショップ」の取り組みを、熱が冷めぬうちに参加者の皆さんとともに、振り返りながら、直接感想を聞くことができた。

私たちが非常にうれしかったのは、当日の交流会を開催することで、主催者の皆様にも同席していただくことが出来たことから、実行する私達がこれまでの経過のなかで教えていただいていた「できることもちよりワークショップ」実践のきっかけ、目的、本来の意味、この研究事業の今後の展開などを、一般の参加者の皆さんにも知っていただくことが出来たことだ。

ワークショップの開始時に、工房あおの丘に関わって下さったすべての人たちに伝えたメッセージ「今ここにいる皆さんは、地域にとって、私たちにとって、とても大切な、かけがえのない人なのです。」は「できることもちよりワークショップ」の取り組みから、お伝えしたいことそのものである。

これからの「入善型のまちづくり」を目指す、私たち工房あおの丘にとって、地域の力を確認する素晴らしい機会となったこと、ここからの実践のかたちを根拠づけるチャンスとなったことに感謝したい。

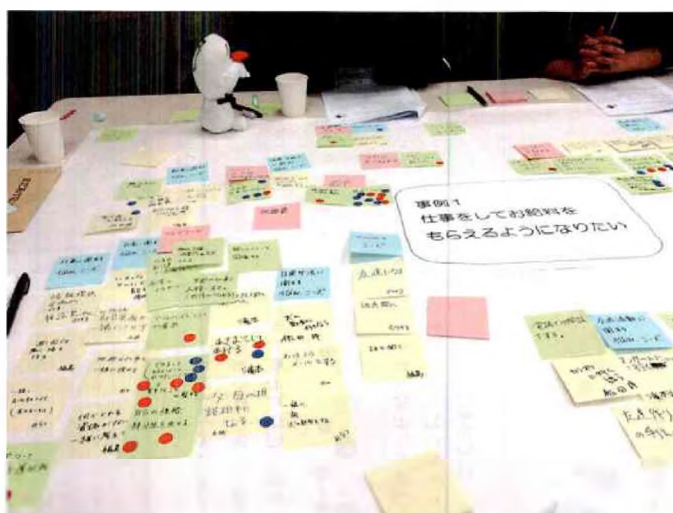
「誰かの困りごと」は、「私の困りごと」。

「みんながみんなに必要とされる」地域づくりのきっかけをくれた取り組みであった。

(12) ワークショップの様子



参加者 101 名を迎えて
ワークショップ開始



できることを付箋に書いて
出し合っています。



説明を聞いています。

できもち できることもちよりワークショップ 2016 ~ 参加ガイド ~

「できることもちよりワークショップ」は2012年に愛知県よりスタートしました。現在は全国各地で開催され、2014年には《新たな地域社会づくりの方法》として、国連(UN)のニュースレターにも紹介されました。ワークショップが更に全国へと広がっていき、地域のできること・ささえあいが深まることを目指しています。

知り合う

ミッション1 出会い

- 専門分野や立場の垣根を超えて、多様な地域の人たちと出会います
- 集まったひとりひとりが、どんな想いを持っているのかを知ります
- 想いをもちよることで、可能性が大きく広がる体験をします

体験できたら
チェックして
みましょう

できることもちよる

ミッション2 資源化

多様な技ノスキルノノウハウノアイデアなど、
「できることもちよる」ことで…

- ステップ1:ひとりひとりの「できること」をみんなで共有します
- ステップ2:アイデアの交換により、さらに「できること」を広げます
- ステップ3:それでもまだ、地域に足りないことは何か？を考えます

連携の方法を考える

ミッション3 組織化

- 困りごとを抱えた本人を中心とした、もちより支援の在り方を考えます
- つながり・もちよることではじまる、新たな地域の未来を探ります
- わたしたちの地域に合った、実行力のあるチームを立ち上げます



「誰一人取り残さない」地域社会づくりプロジェクト CBID/Community-based Inclusive Development

本プロジェクトは、CBID(地域社会で障害のある人やその他の脆弱な人が開発から排除されないこと)の理念に基づき、日本障害者リハビリテーション協会が2016年度、日本財団の助成を受けて開始しました。

対象地域は長野県松本市、愛知県名古屋市の富山県下新川郡入善町ですが、この三カ所を手始めに日本国内でこのプロジェクトのエッセンスが広がり、活用されること、また、その地域で独自のプロジェクトが立ち上がることを目的に実施されます。

最終目標として、地域に根ざした共生社会が実現されることを目指します。

地域の人々の気づきや変化に着目し、「地域が変わる、地域を変える」地方創生の新しい取り組みにもなるでしょう。国連の持続可能な開発目標(SDGs)の達成に貢献できるツールとして、開発途上国でも活用できると考えられています。

— プロジェクトの背景 —

日本は、高齢化、貧困、社会的孤立など様々な社会課題に直面し、地域社会の対応が必須となっています。一方で、社会課題に対して先進的に取り組んでいる地域も数多くあります。

日本障害者リハビリテーション協会は、2015年にこのような好事例を「CBID事例集」としてまとめ、第3回アジア太平洋CBR※1会議(2015年東京で開催)にて国内外に発信しました。今回この好事例が日本全国に展開されるよう、波及効果を狙うプロジェクトを立案しました。

※1: Community-based Rehabilitation (WHO)
「地域に根ざしたリハビリテーション」

10人で
支えられること

1人で
支えられること

100人で
支えられること

地域の《できることもちより文化》をつなげて、
“わたしの課題”を、“わたしたち”のチャレンジに。

できることもちより
ワークショップ

セッション01
長野県松本市

新村地区に住む方や、
地域づくりに関心のある方
ご参加をお待ちしています

2016年10月19日(水)
13:30~17:00 (受付開始13:00)

松本市新村公民館 2階 大会議室
〒390-1241 長野県松本市新村 2179-7
TEL: 0263-48-0375

対象: 新村地区住民および
地域づくりに関心のある方
定員: 50名 / 参加費無料



参加申し込み / お問い合わせ

直接お電話にてお申込ください
松本市新村公民館 (担当: 一色)
TEL: 0263-48-0375
FAX: 0263-40-1625

* 松本電鉄上高地線 北新・松本大学前駅より徒歩3分
* 長野自動車道 松本により車で8分

セッション02 / 愛知県名古屋市
2016年10月30日(日) 13:30~17:00
会場 名古屋国際センタービル5階 第1会議室
主催 一般社団法人しん
問い合わせ: 052-528-5977(担当: 中山)

セッション03 / 富山県下新川郡入善町
2016年11月3日(木・祝) 13:30~17:00
会場: 入善まちなか交流施設 うるおい館2階
主催: 特定非営利活動法人 工房あおの丘
問い合わせ: 0765-72-2248(担当: 梅津)

てきもち

2016

できもち
2016

つながる、共有するという
ことだけで、これだけの支援
が広がることに気づくこと
ができた。

制度のはざままで困っている
人々を見捨ててはいけな
いと改めて感じた。

自分のほんの少しの動きでも、
集まればその人に大きな動き
かけとなることを実感できた。

「誰一人取り残さない」

地域社会づくりプロジェクト

孤立した個人と社会を
結びつける手助けは、
誰にでも(自分にも)
できることだと思った。

事例が重すぎて、自分では無理と思っ
ていたことも、具体策が見い出されて、
とても感動しました。

できること もちより ワークショップ

セッション01
長野県松本市
新村地区

2016年10月19日(水) 13:30~17:00 (受付開始13:00)

松本市新村公民館 2階 大会議室

対象：新村地区住民および地域づくりに関心のある方

定員：50名 / 参加費無料

Supported by
日本財団
THE NIPPON
FOUNDATION

共催：松本市新村地区 / 松本大学
公益財団法人日本障害者リハビリテーション協会
協力：日本財団
一般社団法人草の根ささえあいプロジェクト

10人で
支えられること

1人で
支えられること

100人で
支えられること

地域の《できることもちより文化》をつなげて、
“わたしの課題”を、“わたしたち”のチャレンジに。

できることもちより
ワークショップ

セッション02
愛知県名古屋市

「誰もが暮らしやすい」
地域のつくりかた、
一緒に考えませんか？

2016年10月30日(日)
13:30~17:00 (受付開始13:00)

名古屋国際センタービル5階 第1会議室

〒450-0001 名古屋市中村区那古野一丁目 47-1

TEL : 052-581-0100

対象：どなたでもご参加いただけます
定員：50名 / 参加費無料

参加申し込み / お問い合わせ

一般社団法人しん(担当:中山)
TEL/FAX:052-528-5977
Mail:syadanshin@yahoo.co.jp
名古屋市西区花の木3-17-14
第一新日本ビル2F
<http://syadanshin.jimdo.com>



* JR・名鉄・近鉄・地下鉄東山線 名古屋駅より徒歩7分
* 地下鉄桜通線 国際センター駅より徒歩1分

セッション01 / 長野県松本市新村地区

2016年10月19日(水) 13:30~17:00

会場: 松本市新村公民館 2階大会議室

主催: 松本市新村地区 / 松本大学

問い合わせ: 0263-48-0375(担当:一色)

セッション03 / 富山県下新川郡入善町

2016年11月3日(木・祝) 13:30~17:00

会場: 入善まちなか交流施設 うるおい館2階

主催: 特定非営利活動法人 工河あおの丘

問い合わせ: 0765-72-2248(担当:橋津)

てきもち
2016

「誰もが暮らしやすい」地域のつくりかた、一緒に考えませんか？

できもち
2016

つながる、共有するという
ことだけで、これだけの支援
が広がることに気づくこと
ができた。
制度のはざまに困っている
人々たちを見捨ててはいけな
いと改めて感じた。

自分のほんの少しの動きでも、
集まればその人に大きな動き
かけとなることを実感できた。

「誰一人取り残さない」
地域社会づくりプロジェクト

孤立した個人と社会を
結びつける手助けは、
誰にでも(自分にも)
できることだと思った。

事例が重すぎて、自分では無理と思っ
ていたことも、具体策が見い出されてい
て、とても感動しました。

できること
もちより
ワークショップ

セッション02
愛知県
名古屋市

2016年10月30日(日) 13:30~17:00 (受付開始13:00)

名古屋国際センタービル 5階 第1会議室

対象：どなたでもご参加いただけます

定員：50名 / 参加費無料

Supported by
日本財団
THE NIPPON
FOUNDATION

共催：一般社団法人しん
公益財団法人日本障害者リハビリテーション協会
協力：日本財団
一般社団法人草の根ささえあいプロジェクト

10人で
支えられること

1人で
支えられること

100人で
支えられること

地域の《できることもちより文化》をつなげて、
“わたしの課題”を、“わたしたち”のチャレンジに。

できることもちより
ワークショップ

セッション03
富山県下新川郡
入善町

2016年11月3日(木・祝)
13:30~17:00(受付開始12:45)

入善まちなか交流施設 うるおい館
2階イベントホール

〒939-0626 富山県下新川郡入善町入膳 5232-5
TEL:0765-72-0123

定員:80名(高校生以上の方にご参加いただけます)
参加費:500円(高校生無料)

参加申し込み / お問い合わせ

【申込締切 10/24(月)】

特定非営利活動法人 工房あおの丘
TEL:0765-72-2248(担当:梅津)
メール:info@aonooka.jp
富山県下新川郡入善町道古 34-3
http://www.aonooka.jp/

あなたのちよつとのできる
ことで、入善町の「これから」を
創りませんか。



※あいの風とやま鉄道 入善駅より徒歩5分
※北陸自動車道 入善スマートICより車で10分

セッション01 / 長野県松本市新村地区
2016年10月19日(水) 13:30~17:00
会場:松本市新村公民館 2階大会議室
主催:松本市新村地区 / 松本大学
問い合わせ:0263-48-0375(担当:一色)

セッション02 / 愛知県名古屋市
2016年10月30日(日) 13:30~17:00
会場:名古屋国際センタービル5階 第1会議室
主催:一般社団法人しん
問い合わせ:052-528-5977(担当:中山)

できもち

2016

あなたのちょっとしたのことで、入善町の「これから」を創りませんか。

できもち
2016

つながる、共有するという
ことだけで、これだけの支援
が広がることに気づくこと
ができた。
制度のはざままで困っている
人たちを見捨ててはいけな
いと改めて感じた。

自分のほんの少しの動きでも、
集まればその人に大きな働き
かけとなることを実感できた。

「誰一人取り残さない」
地域社会づくりプロジェクト

孤立した個人と社会を
結びつける手助けは、
誰にでも(自分にも)
できることだと思った。

事例が重すぎて、自分では無理と思っ
ていたことも、具体策が見い出されてい
て、とても感動しました。

できること
もちより
ワークショップ

セッション03
富山県下新川郡
入善町

2016年11月3日(木・祝) 13:30~17:00 (受付開始12:45)

入善まちなか交流施設 うるおい館
2階イベントホール

定員：80名(高校生以上) / 参加費：500円(高校生無料)

Supported by
日本財団
THE NIPPON
FOUNDATION

共催：特定非営利活動法人 工房あおの丘
公益財団法人日本障害者リハビリテーション協会
協力：日本財団
一般社団法人草の根ささえあいプロジェクト

6. 12月4日振り返りの会での「総括」

振り返りの会の最後に、企画委員を中心に総括コメントをいただいたので掲載する。ただし大塚晃委員はご都合の関係で総括前にコメントをいただいた。

大塚晃上智大学教授（企画委員）

専門家としての視点

皆さんの発表前なので総括ではなく、この事業の意味付けと期待することをお話する。

すべてを丁寧に見ていたわけではないので限界があるが、この事業には高い期待をもっている。私は障害福祉や障害を研究している。障害福祉の分野では相談支援がとても重要で、本人やご家族の相談にのって様々なサービスに結びつけている。地域にないサービスであれば作っていくとか、広くは地域づくりをしていくことも視野に入れて考えている。そうした専門の観点からこの事業に期待をもっている。

今、地域で色々なことが行われている。それを支える市町村や都道府県レベルの自立支援協議会という、様々なサービスや地域づくりをする場を活性化していこうとしている。ところが、自立支援法が総合支援法になり、この十年間に様々な取り組みが行われているが、どこまで出来たかは甚だ疑問である。一生懸命やっているところもあるが、全国でやってきたことの殆どに成果が見られていない。それは私の責任でもあり、お叱りはあると思うが、地域をどのようにつくっていけばいいのか、地域を耕すとかいわれるが、それはそう簡単ではないことが分かってきた。

地方創生との関係

これから改めて地域をつくっていくことに取り組まねばならない。地方創生とも関係するが、1つ限界が見えてきた。既存の制度、既存の政策、枠組み、考え方、私たちが持ってきた伝統・歴史の中でやってきたことが余り役に立たなかったと思うことである。そうすると自分たちの枠組みや考え方を一度取り払って、破壊して、無くしてというか、難しいし出来ないことだが、それにチャレンジして多様な考え方や枠組みの中でやって行くことを考えなければならないと思う。それが、まさにこの事業の意味づけだと思う。

昨年、国は「新たな時代に対応した福祉の提供ヴィジョン」を厚生労働省から出した。外の人に頼らずに多分若手の官僚だけで作ったと思うが、これが意図しているのは、既存の枠組み・政策は役に立たないということである。高齢者、障がい者、児童という縦割りでやってきたことに危機感を感じていると思う。「何にも動いていないじゃないか」とか、「生活困窮の家庭での子育てが広がっているのに、それも含めて、本当に役に立っていない」と、柔らかな表現ながら書かれている。新しい福祉において、既存のものを1回壊そうという意図はとても盛り上がっている。もしかしたら地域包括の支援体制とまた同じになるかもしれないが、そうした意図は盛り上がっている。そういう中で、この事業に期待することは大きい。先程、地方創生との関係で話したが、地方創生は3つのことを言っている。①仕事の創生、②人の創生、③街の創生である。

最初の仕事の創生とは、少子高齢化で様々な形で地域が衰退していく中で仕事を作っていくことである。ここのところの使命は人間の関係性の創生だと思う。その基にある人と人との関係をどのような地域でつくっていくかである。

次が人の創生で、これはとても大切である。この事業をとおした色々な総括でも出てくると思うが、誰がどのような役割を担いながら具体的に人との関係の中で地域をつくっていくかということであり、マネジメントである。今までは福祉の人間は、どちらかと言うと決められた枠組みの中でよい仕事をしようと思っていたのが、それを取り払って外に出て、異なる人たちや多様性の人たちや関係のない人と、まったく関係ないガソリンスタンドで働いているあのおじちゃんと繋がらなければならないという新しいことであり。それが地域を豊かにするということである。これはそう簡単にできることではないが、それを戦略的にやっていくということである。

その意味では、人の創生とは、3番目の街を作っていくことにつながります。どのような街を自分たちはイメージしてつくっていくのか、障害という分野から発せられても、障害分野を超えていかなければならないと思っている。その意味で考えたのだが、ある意味で、今までの制度化を非制度化しなければならぬと考える。或いは専門性を非専門性にしなければならぬ。全体化を地方化、地域化とか、発展を縮小、中央化と分権化とか、2つの相対立するもののどちらも必要なのだが、両方を考えながら真ん中に新しい視点をつくっていくことがこの事業だと思っている。だから今までの既存の制度もあるが、それを変えて非制度化の枠組みを作らなければならない。この真ん中においてどのような視点に立ってどのような地域をつくっていくか、このようなイメージである。そのようなことが今始まったと思っている。そういう意味でこの事業に期待している。今までのような障害ではないところから新たなものをつくれる可能性が出てきたと。地方創生でも言われているが、PDCA サイクル（プラン - ドゥー - チェック - アクト サイクル）においてきちんと結果を出す必要があるといわれている。考え方や理念はよかったが、何の成果なく、繋がらなかったことが今までのやり方だった。きちんとした評価の基におけるアウトカムを出さなくてはならない。効果や変化が地域にあったことをきちんと見せなくてはならない。それが非常に重要なこれからの観点だと思う。その意味では、皆さんとても熱心に取り組んで頂いた。残念ながら私は富山県（入善）しか知らないが、最初につくったものは皆さんが本当に頑張りによって、花火の打ち上げのようで、「行くぞ、頑張ろう」と成功したと思っている。花火は次にどうなるか。終わってしまうのか。継続して発展させなくてはならないが、それは今までより、もっともっと苦勞かもしれない。でもやり甲斐があり楽しい、創造的な仕事だと思っている。こんな意味で、是非皆さんがこの事業を通して地域をつくっていく、或いは世界をつくっていくことはチャレンジしがいがあることだと思っている。是非がんばっていただきたい。感謝申し上げる。

コーディネーター：

鈴木直也氏、NPO 法人起業支援ネット副代表理事（スーパーバイザー・企画委員）

今回まだプロジェクトの途中だが、中間総括という形で話しをしたい。今回上野さんには3会場すべてに来ていただきたいので全体的なお話をお聞きしたい。林さんに

は、入善地域のみに来ていただき、街も見学していただき、地域を深く掘り下げて見ていただいた。林さんは、インドにフィールドをお持ちなのでそのような主体的な視点を持って、このワークショップがどのように映られたのかもお聞きしたい。内容も踏まえて私もお話ししたいと思う。最後に、一番不安要素の大きい今後の展望についても考えたいと思う。最初に3地域を回ってくださった上野さんから総括とこのワークショップの可能性をお願いする。

上野悦子、日本障害者リハビリテーション協会

3地域のワークショップで主に印象に残ったこととお話しする。まず、松本でのワークショップについては、当初は色々な方が言っていたように、地域づくりという点で新しい方法を模索していたと尻無浜教授から聞いていた。高齢の方も多く、松本大学からのインターンの方々との関係性がどうなるか等よく分からなかったが、成功したと感じている。これは沢山の方も仰っていたとおりの。その要因として、地域の人達との繋がりが元からあったとお聞きしている。地域の方々との繋がりは、他の実施地域からも出てきたが、これは全く簡単ではなく、相当大変な思いをして向かい合っておられることは西島さんのお話からも分かることである。地域との繋がりと同時に、多様性があるだろうと感じた。繋がりが薄いことが必ずしも良くないわけではなかったりする。地域の人たちとの関係性が具体的にこういったワークショップの効果を生むのに役に立つのかという点を今後見ていけたらと思う。

しんさんは、精神障害者への支援に特化した団体で、最初に3人のイニシアチブで始めた。それが、組織内に伝わり、ワークショップの成功に導びかれたと思う。また、カフェをオープンされたことからカフェが一つの核として地域との繋がりを今後作っていくのかもしれない。

あおの丘さんは沢山の参加者を集められた。集客にご苦労されたこと、本当に来てほしい人には今回は来ていただけなかったというお話があった。翌日も市内を見学させていただいて感じたことは、地域の産業が順調に続けていくことと、あおの丘さんの持続性というのは一体化しているのではないかと痛感した。それから、個人の障害のある人の支援だけに視点を当てるのではなく、地域に目を向けることがいかに大切かということ、あおの丘さんの活動を見て感じた。

林早苗氏、東京女子大学非常勤講師（企画委員）

11月に入善に行き、あおの丘さんのワークショップを見学した。まず、101名の方が参加されたという数の大きさに驚いた。私はワークショップを開催する側になることがあるが、100名という人数を集めるのは本当に大変なことだ。渡辺さんも鈴木さんも言われたように、ワークショップは準備が要で、100名という数に結び付くというのは本当に大変な努力をされただろうと、先ほどの西島さんの涙からも分かった。100名という数も多種多様な人達の集まりで、若旦那や若女将等、これから地域を何とかしたいという人達が本気で関わっていた。私も地方出身なので身に染みて思っているのだが、地域に活気がなくなる一方の地方の若者が頑張ろうとしているところに障害者

が入っていく様子を見て、私自身も障害者なのでこういう場所に住みたいと本気で思った。多種多様な人が来ているので、アイデアも多様だった。離婚したお母さんに障害のある子どもさんが2人いるという事例があったが、その事例を扱ったテーブルに、保険会社の参加者がいて、障害者のことは関わったことないが、ライフプランは作れると言っていた。保険会社の知識をもって、ライフプランを作れるというようなアイデアが出てくるのは、「できもちワークショップ」のワークショップの良さだと思う。他のワークショップを非難するわけではないが、どうしても自分達では出来ない。出来ないから夢を持って仕方がないと終わってしまうのは何回か経験している。いつも残念な気持ちで帰っていたが、「できることもちよりワークショップ」は最初から出来ることを宣言して話し合っている。できないという不要な前置きをなくして、前向きに取り組むことができるワークショップで私は大好きなワークショップだと改めて入善で感じた。途上国との絡みでお話しすると、私は防災系のNGOで働いていて、今インドに赴任している。障害者を専門とした事業ではないので、いかに障害者を巻き込むことかは本当に大変で、未だお声掛けもできていない状況である。そういう場所でも「できもちワークショップ」は出来ると感じている。障害の有無に限らず、地域の問題に取り組んでいくという土台であればいかなる事業でも取り入れることが出来ると思う。防災では、障害者が逃げなくてはならない時には私が一緒に逃げてあげるとか、自分でできることを提案できるのがこのワークショップである。また、開発途上国の支援をしている人も会場にいらっしゃるが、大概途上国で障害者に関係することを行うと、障害者ではない人も困っているのだから、障害者は後にしようとか、政府が動かず日本ほど制度が良くない所では何も出来ない、という意見がでてくる。「日本だから出来る」、「綺麗ごと」と言われることが多い。先程の名古屋のしんの方が課題としていた「地域に受け皿がない」や「各分野で連携が不足している」、「相談体制がない」、「支援が偏在している」、「制度に限界がある」などは、日本でも途上国でも全く同じだと思った。これを何とかしようとしたら、最終的には地域に働きかけるしかない状況に来ているのではないかと思う。地域に問題があり、地域の人たちが解決策を持っているなら、私たちはどのように引き出していけばよいのか考えられるのが、このワークショップである。入善の方に出来ることを見せていただいたように、途上国でも国内でも出来ることだろう。今回地域性が出たということは、地域に密着してこのワークショップを育てて、ついていくのが一番良いだろうと思う。今回学ばせていただき感謝申し上げます。

コーディネーター 鈴木氏

ここで先程大塚先生が仰っていたことを繰り返してみたい。仕事の創造、まちの創造、人の創造という3つの創造において、多様性を持って関係のない人を繋ぐことが大事という点、専門性から非専門性、制度化から非制度化、全体から非全体ということを考え、真ん中辺りを目指すことだった。

私も色々な地域に行かせていただき地域について誰が敏感かという点で観ると、意外に福祉の人は敏感ではない。日本の制度はしっかりしているので、食べていけるし、生きていける。しかし、地域が衰退するとそこで商売している人が食べていけなくな

る。そのため、より大きな市場を求めて地域を出ないといけなくなる。そうすると、地域がより衰退するが、地域から出られない力のない人が残り、その人たちは福祉で守られている。福祉の人は困らない、敏感でなくてもよいとなる。困っている人を受け入れると人手不足で敏感になるが、もうこれだけでいいと決めてしまうと敏感でなくても地域で暮らしていける。地域で敏感な人はやはり何とかしたいと思うし、敏感な人と一緒に考えていかないと地域の将来は見えてこない。こんなことを思いながら地域を眺めていた。渡辺さんにお聞きしたいのですが、長くワークショップをしていることから見えてくる成果もあると思う。これまでの総括を聞いた上での渡辺さんの感想と未来に起こる可能性も体験としてご存じだと思うので、それらをお話いただきたい。

渡辺ゆりか氏、一般社団法人草の根ささえあいプロジェクト代表理事（研修講師、企画委員）

総括を聞いて私が思ったこととお話する。「できることもちよりワークショップ」は当初この名前ではなく、「社会資源開発ワークショップ」という堅い名前で、地域にある社会資源を掘り起こしていくという意図を持っていた。「できることもちよりワークショップ」という名前に変わって良かったと思う。また、「私の問題を私達のチャレンジに」というサブタイトルがあり、個人の課題や問題を地域のチャレンジにしましょうという意味である。「できることもちよりワークショップ」を受け渡したことで名古屋という大都市だけではなく、地方都市や中山間地域でも同じことが起こると分かったので、皆さんにワークショップをやっただいて嬉しく思う。今後の展開として、私たち草の根ささえあいプロジェクトがこのワークショップを少し前に始めているので「起こること」について想像できることとお話する。「できることもちより」とは文化に近いところがある。出来ない人を遠ざける人、出来る人やしたい人、或いは専門家がするべきと思ってきた人、出来ることは自分でやるべきと思っている人たちにカルチャーショックを与えるような文化の持ち込みでもある。文化は受け取ってもらうのに非常に時間がかかるし、文化が浸透していく為には繰り返し伝えないといけない。そのため変化に時間がかかるワークショップでもある。来るべき人達と縁を繋げていき、Aさんという困りごとを中心に地域のチャレンジにしていくプロセスや、「できることもちより」という文化を忘れなければ着実に効果的なネットワークになっていくことを私たちは経験してきた。それはネットワーク会議（連携会議）という会議がネットワークや連携を生まない結果になる経験を皆さんもしてきていると思うが、そうではなく、Aさんという困りごとを地域の課題にしよう、つまり私たちの課題にして、Aさんという孤立している人に誰かの手を届けよう営みで繋がった絆・連携はなかなか壊れない。だから時間をかければかけるほどネットワークは強固になり、そのネットワークが別のネットワークを生むことが起きてくる。皆さん楽しみにしていただきたい。しかし、熱量は自然の法則で次第に下がってきますので、熱量が下がりだした頃にもう1回熱量を上げることを繰り返す手間暇を惜しまなければ、とても強い絆のネットワークが発生してくると思う。

林氏

できもちのプログラムの未来へのつながり

私の夢だが、タイトルの「誰一人取り残さない」とは最終的に世界中がそうあってほしい。このワークショップのファンなので「できもち」を通して「誰一人取り残さない」地域作りに繋がったらいいと思う。障害の世界では、Nothing about us, without us（私たちを抜きにして私たちのことを語らないで）という言葉がある。ワークショップをやるに当たり、障害者のための取り組みをやるのであれば、その人たちの意見を聞く、その人たちを呼ぶのは絶対に外してはいけないと思う。それは難しいのは確かだが、自分が事例になっても気にしない。同様に気にしない人は実際におられるので、そういう人を見つければどんどん事例として使っていただければいいと思う。ただ、日本人の良いところでも悪いところでもあるが、遠慮して声を掛けないで、気づいたらいないということは、気をつけなければいけない。自分が事業で体験したことから申し上げた。

上野

今後の可能性

リハビリテーション協会でも今後の方向性について話し合いをしている。当協会ではリハビリテーションを、手足の機能回復訓練というイメージより広く捉えて、権利の回復を含めたものを推進して行こうとしている。国連障害者権利条約、障害者の社会参加に関する機会均化等などの国際文書を見ると、リハビリテーションは、障害のある人が社会に参加していくための手段の1つとされている。当協会が参加している国際リハビリテーション協会は、その使命をインクルージョンと権利としている。SDGsやCBR/CBIDとの兼ね合いでも、インクルージョンは今後の方向性として私たち自身も取り組まなければならないことの1つになるだろうという話し合いをしている。

われわれのことをわれわれ抜きで決めないで（Nothing about us, without us）は権利条約の基本だが、或るベトナムの障害者団体は、われわれのことはわれわれすべてで考える（Nothing about us, without all of us）と表現していた。これはCBIDの視点から、障害のことを、障害のある人を中心にして、係わる人が皆で考えていこうと解釈した。これから今回の活動結果を今日の振り返りの会をもとに報告書を作成する。その報告書をもって「できもちワークショップ」の方法を紹介していこうと思っている。

来年度は、この報告書をもとにより良い地域をつくり、障害のある人の暮らしがより良くできるような研修を実施するためのテキストを作りたいと考えている。実践者以外にインストラクターが必要になってくるから、そういったものを開発して、より多くの人がこの研修の良さやエッセンスを使っていただけるような機会を設けられたらいいと考えている。

渡辺氏

今後の展望

今回は、私たち草の根ささえあいプロジェクトや起業支援ネットさんが開発して温めてきたワークショップを、3地域の方々が受け取っていただけたことに感謝の気持ちで一杯である。大変なことが多かったと思うし、手間暇もかかるワークショップなのでこれまでのご苦労頂いたことに感謝申し上げます。「できることもちよりワークショップ」を受け取っていただいて思ったのは、このワークショップは私が思っていた以上に多様性を開拓できる、可能性のあるワークショップで、意外にアレンジが効くと知ったこと。例えば、松本大学の皆さんが、高齢の方が理解しやすいように寸劇をして説明したと伺い、さぞや地域の皆さんをやる気にさせただろうと想像した。今後の展望としては、このような地域の実情に合わせたアレンジを期待する。「できることもちより」は効果があるワークショップである。一番非効率的なのは出来ないことを相手に押しつけるために集まることで、不毛だし時間ももったいない。次に効率が悪いのは、出来ないことを頑張っ一人で出来るようにすることだと思ふ。そうではなく効率が良く楽しいのは、皆ができることを持ち寄り、それを集めて形にしていくことだと思ふ。それで足りないことは、足りるように出来る人を連れてくればいいし、それでも足りないことは皆で作ってあげればいいと思ふ。それがとても効率がよく、地域で困っている人のためだけでなく、地域に暮らす全ての人を助けていくことになるだろうと今日改めて思うことができた。

鈴木氏

まとめ

渡辺さんのお話は、文化だと、つまり直ぐに答えを求めるものではないと、拙速に一回やって何か変わったとしても直ぐにまた元に戻ってしまう。だから文化として捉えていきたいと、つまり時間をかけてやっていくことが大事だとのお話だったと思ふ。

よく世の中でまちづくりとかまちおこしという言葉が聞かれますが、まちづくりとまちおこしには違いがある。まちおこしはメリットがあるように感じられるので、皆参加しやすい。例えば、サポテンでラーメンを商品開発して観光地化を目指すようなことをまちおこしと言う。分かりやすいが失敗することもある。まちづくりは、皆さんが生きやすい、暮らしやすいまちをつくること。暮らしにくい人がいたら、その人が暮らしやすくないとまちにならない。今回私たちが狙っているのはまちおこしではなくまちづくり。住みにくい人がいる、暮らし難い人がいることを念頭に、それは本当に苦しいことであって、その人が暮らしやすくなるために、そういう人が一人一人増えていき、すべての人が暮らしやすくなるのがまちづくりだと思ふ。私たちがやっていくことはまちづくりで、それは文化を変えていくことかなと思ひながら聞かせて頂いた。感謝申し上げます。

以上

企画委員リスト

- | | |
|---------|-------------------------------------|
| 鈴木 直也氏 | 本事業スーパーバイザー、NPO 法人起業支援ネット副代表理事 |
| 渡辺 ゆりか氏 | 本事業研修講師 一般社団法人草の根ささえあいプロジェクト代表理事 |
| 大塚 晃氏 | 上智大学教授 |
| 林 早苗氏 | 東京女子大学非常勤講師 |
| 河野 眞氏 | 国際医療福祉大学准教授（7月17日まで） |

CBID 研修プログラム開発事業2016

報告書

地域に根ざした共生社会づくり

一部 1,000 円

2017 年 3 月末作成

公益財団法人 日本障害者リハビリテーション協会

〒162-0052 東京都新宿区戸山 1-22-1

電話 03-5273-0601 Fax03-5273-1523

URL:<http://www.jsrpd.jp>



この冊子は、日本財団のご協力により作成しました。

Supported by  **日本 THE NIPPON
財団 FOUNDATION**